鳥羽離宮跡発掘調査概報

昭和61年度

京　都　市　文　化　観　光　局

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序

千年の歴史にはぐくまれた学問，芸術，文化，宗教の都であることをふまえながら，21世紀へ向けての理想のまちづくりを目指している京都は，伝統を生かし創造をつづける都市づくりに取組み，なかでも，２年後(昭和64年)の市政100周年事業並びに７年後(昭和69年)の平安建都1200年事業などを計画しております。

一方，都市の活性化に伴う開発に際して，埋蔵文化財を保存し，良好な環境を維持することが重要な課題となっております。

このような状況の中で，本市といたしましては，埋蔵文化財の保存について，市民の理解と協力を得る努力をいたしておりますが，保存が困難な遺跡につきましては，調査を行いその成果をできる限り後世に伝えるように努めております。

この調査報告書は，昭和61年度国庫補助事業として実施した調査の概要をまとめたものであり，本書が埋蔵文化財の研究に，また有用な資料として御活用いただければ幸いです。

本調査の実施にあたり調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所，また御指導いただいた文化庁をはじめ御協力をいただいた関係各位並びに市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和62年３月

京都市文化観光局

例　　言

1．本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施した文化庁国庫補助を伴う昭和61年度の鳥羽離宮跡発掘調査概要報告である。

2．発掘調査は４ヶ所実施した。発掘調査次数は、第117次・第119次・第120次・121次調査である。調査地は以下のとおりである。

Ⅰ　第117次　　伏見区竹田浄菩提院町32（昭和60年度調査）

Ⅱ　第119次　　伏見区竹田田中殿町56-3（昭和60年度調査）

Ⅲ　第120次　　伏見区竹田浄菩提院町91-2

Ⅳ　第121次　　伏見区竹田浄菩提院町92・93・99・101

3．本書の執筆は以下の通りである。

Ⅰ 第117次：鈴木久男・前田義明、Ⅱ 第119次：吉崎伸・中村敦、Ⅲ 第120次：鈴木久男、Ⅳ 第121次：前田義明・鈴木久男、Ⅴ：岡田文男、Ⅵ：西岡信雄

4．写真は主に牛嶋茂が行い、一部村井信也が担当した。植物遺体は岡田文男が行った。

5．図中に使用した方位・座標は、新平面直角座標系（Ⅵ）による。

6．標高はＴＰ（東京湾平均海面高度）を用いた。

7．文章及び断面図の土壌の色名は農林省農林水産技術会議事務局の監修による新版標準土色帖を用いた。

8．遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方法に基づき使用した。

9．本書に使用した地図は京都市都市計画局発行の2500分の１の地図（城南宮）を、京都市の承認を得て使用した。

10．第121次出土の和琴については、大阪音楽大学教授西岡信雄氏に執筆していただいた。記して、感謝の意を表します。

本文目次

Ⅰ　第117次調査……1
　1　調査経過……1
　2　遺構・遺物……1
　3　まとめ……2

Ⅱ　第119次調査……3
　1　調査経過……3
　2　遺構……4
　3　遺物……5
　4　まとめ……8

Ⅲ　第120次調査……9
　1　調査経過……9
　2　遺構・遺物……9
　3　まとめ……9

Ⅳ　第112次調査……11
　1　調査経過……11
　2　遺構……11
　3　遺物……13
　4　まとめ……21

Ⅴ　植物遺体……24
　1　第117次調査植物種実分析結果……24
　2　第121次調査植物種実分析結果……25

Ⅵ　鳥羽離宮跡出土の和琴についての観察……27

図版目次

図版1　遺跡　調査位置図

2　遺跡　東殿跡遺構配置図

3　遺跡　田中殿跡遺構配置図

4　遺跡　第117次調査　遺構実測図

5　遺跡　第119次調査　遺構実測図

6　遺跡　第121次調査　遺構配置図

7　遺跡　第121次調査　遺構実測図

8　遺物　第121次調査　軒丸瓦拓影・実測図

9　遺物　第121次調査　軒丸瓦拓影・実測図

10　遺物　第121次調査　軒平瓦拓影・実測図

11　遺物　第121次調査　軒平瓦拓影・実測図

12　遺物　第121次調査　平瓦拓影・実測図

13　遺物　第121次調査　平瓦拓影・実測図

14　遺物　第121次調査　平瓦・丸瓦拓影・実測図

15　遺物　第121次調査　ＳＤ３出土和琴実測図

16　遺物　第121次調査　埴輪拓影・実測図

17　遺跡　第117次調査　1 調査区全景(北東から)　2 洲浜(南西から)

18　遺跡　第119次調査　1 調査区全景(北から)　2 ＳＤ１(東から)　3 ＳＤ１西壁(北東から)

19　遺跡　第119次調査　1 杭の出土状況　2 木製品出土状況　3 馬の頭骨出土状況　4 馬の下顎骨出土状況

20　遺跡　第120次調査　1 調査前全景(北から)　2 調査区全景(北西から)

21　遺跡　第121次調査　1 調査区全景(北西から)　2 石垣完掘状況(北東から)

22　遺跡　第121次調査　1 木製品出土状況(北東から)　2 石垣の抜取り溝(東から)　3 瓦出土状況(北から)

23　遺跡　第121次調査　1 ＳＥ９完掘状況(東から)　2 ＳＥ９断ち割状況(西から)

24　遺物　第119次調査　ＳＤ１出土土器

25　遺物　第119次調査　ＳＤ１出土瓦・木製品

図版26　遺物　第121次調査　軒丸瓦
27　遺物　第121次調査　軒平瓦
28　遺物　第121次調査　軒平瓦
29　遺物　第121次調査　平・丸瓦
30　遺物　第121次調査　軒丸瓦・丸瓦細部
31　遺物　第121次調査　1 葺き上げ復原状況　2 葺き上げ復原細部
32　遺物　第121次調査　ＳＤ３・ＳＥ９出土土器
33　遺物　第121次調査　和琴
34　遺物　第121次調査　和琴細部　1 尾部　2 頭部
35　遺物　第121次調査　天蓋環珞１　天蓋環珞２
36　遺物　第121次調査　刀子、銅板、独楽
37　遺物　第121次調査　1 円筒埴輪　2 家形埴輪
38　遺物　第121次調査　植物遺体

挿図目次

図１　西壁断面図……1
2　景石見透し図……2
3　西壁断面図……3
4　ＳＫ２(南から)……4
5　ＳＤ１出土土器実測図……5
6　ＳＤ１出土瓦拓影・実測図……6
7　ＳＤ１出土木製品実測図……7
8　遺構実測図……10
9　ＳＤ３東壁断面図……11
10　ＳＤ３石垣見透し図……12
11　ＳＥ９実測図……12
12　平瓦部分名称……15
13　丸瓦部分名称……16
14　ＳＤ３出土土器実測図……17

図15　ＳＥ９出土甕実測図……18
16　天蓋・瓔珞実測図……18
17　金属製品実測図……19
18　独楽実測図……20
19　家形埴輪拓影・実測図……20
20　家形埴輪復原実測図……21
21　葺き上げ復原図……22
22　尊勝寺出土の同笵瓦……23

表　目　次

表１　第 117 次土壌サンプル調査結果……24
2　第 121 次種子調査結果……25
3　第 117 次・第 119 次調査出土遺物一覧表……26

Ⅰ　第117次調査

1　調査経過

調査地は、東殿に造営された苑池の跡につくられた水田である。昭和60年度調査地のすぐ東側で実施した第112次調査では、池跡の東岸や島の一部ではないかと考えられる陸部を検出している。今回の調査地は、この陸部にあたるところである。このため、陸部の形状や性格をより明確にするため調査区をなるべく広くするように務めた。その結果、調査区を2分割し前後2回に分けて調査を実施した。

2　遺構・遺物

調査地の基本層位は以下のようである。耕土・床土下に褐色砂泥層が厚さ20～30cmにわたって認められる。その下には明灰黄色砂泥層がある。この層から下の層については、陸部と池跡では異なった堆積状況を示す。池跡側では黄灰色砂泥層、暗灰黄色砂泥層が厚く堆積しているが、陸部に近ずくにつれて徐々に薄くなり途中でとぎれてしまう。次の暗灰黄色泥砂層は洲浜沿の陸部に薄く堆積している。苑池内には、黒褐色砂泥層（多量の植物遺体を含む）が厚く堆積している。この層を除去すると池底になる。

調査の結果、池に張り出した出島の一部、洲浜や景石を検出した。現在までのところ、島に関する調査次数が少ないためその全貌を知るに至っていないが、今回検出したのは島の北半部である。島の北側から西へ伸びる洲浜は、第112次調査で検出した苑池北岸の洲浜と途中切れることなく繋がったものである。しかしながら、島と北岸とを繋ぐ陸部はあまり高くないため、水位の昇降の状態によっては出島であったり、池に浮かぶ島になった

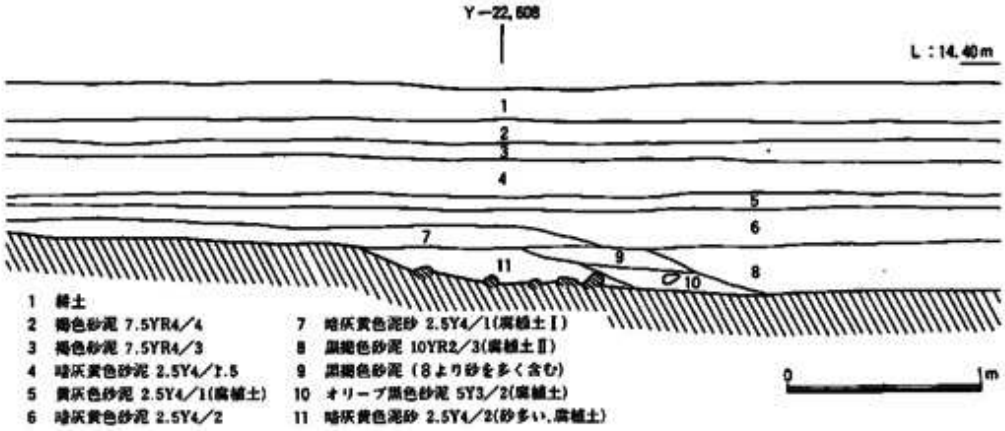


図1　西壁断面図

りする。汀の傾斜角は10～20度前後をはかりゆるやかである。洲浜に用いられている玉石は拳大である。景石は計６石発見したが、その内の２石は打ち砕かれていた。この他、玉石を根固めとした景石の据え付け穴を１箇所検出した。

図２　景石見透し図

景石は、１石を除き汀から陸部へやや上がった島の西北部に据え付けられていた。材質はチャートである。玉石を根固め石とした据え付け穴の周辺には、緑色片岩の破片が散乱した状態で出土しておりこの据え付け穴には緑色片岩が据え付けられていた可能性が高い。洲浜から池底にかけての斜面で検出した景石(図２)は、掘形をもたず玉石で景石の底部を安定させただけである。景石の上端部はほぼ水平であった。

遺物は主に、洲浜の上面や池内堆積土層から出土した。いずれも小片であるが、土器、瓦、木製品などがある。土器は土師器(Ⅲ)や瓦器(椀)などの他に、山茶碗や白磁(椀)などが出土しているが量的には少ない。瓦は、尾張や播磨の国で生産されたものがほとんどで山城で生産されたものは極めて少ない。軒瓦は２点出土しただけである。なお、池内堆積土から播磨産の平瓦が完形で１点出土している。木製品は、第112次調査で出土した木製五輪塔と同様のものをわずかに発見している。

３　まとめ

調査の結果、東殿に造営された苑池には中島(出島)が築かれていたことが明かとなった。この中島は、苑池の北東から中央にかけて位置している。規模は、島の西半部が未調査のため明確でないが一応南北40m、東西42m以上をはかるものである。島は、苑池の造営当初から計画されたらしく島の基部は地山を島の輪郭に合わせて掘り残し、その上に土盛を加えて構築したことが、断ち割の結果明かとなった。第10次調査以降、今回までの庭園の調査成果を見ると、苑池の汀に洲浜が認められる箇所とそうでない所がある。今回検出した島の西側には洲浜が認められたが、その反対の東側では一切なかった。同じく、第112次調査でも調査地西半では洲浜が検出できたが、島を境に東側では全く認められなかった。建物跡と庭園遺構の関係では、島の東側には塔などが建立されており洲浜が認められない箇所は死角にあたらない。このような状況の変化は、塔が御陵へと変わった時点で景観を変えたのであろうか。今後の検討課題の一つである。

Ⅱ　第119次調査

1　調査経過

今回の調査は倉庫建設に先だって実施したものである。調査地は鳥羽離宮田中殿に推定される地区にあたる。調査地と道路を隔てた東側では既に第104次調査(註1)を実施しており、建物基壇や田中殿の北限と考えられる東西方向の溝を検出している。この溝が当調査地まで延びることが予想されたため、まず試掘調査を実施した。この結果対象地の南端で溝の堆積層の一部を確認することができ、本調査を実施するはこびとなった。

調査は東西の溝に重点をおき、対象地の南よりに調査区を設定した。さらに、北側の状態を確認するために幅1.5mのトレンチを東よりに北へ15m設定した。検出した遺構は平安時代後期の幅4m以上のＳＤ１、そしてこれより少し古い時期と思われる土取り穴状の遺構群である。また、この溝の肩部で縄文時代と考えられる土壙を検出し、この部分を一部掘り下げて調査を行った。

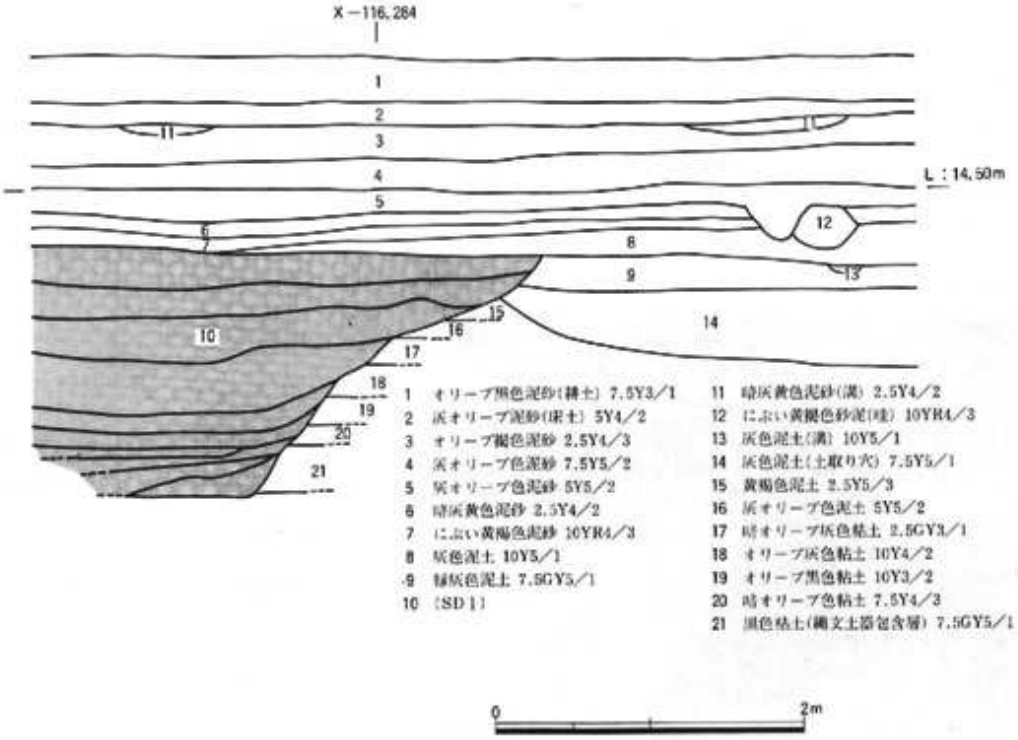


図3　西壁断面図

2　遺構

調査区の基本層序は、上からオリーブ黒色泥砂層(耕土)30cm、灰オリーブ砂泥層(床土)15cm、オリーブ褐色泥砂層20cm、灰オリーブ泥砂層20cm、灰オリーブ泥砂層15cm、暗灰黄色泥砂層10cm、にぶい黄褐色砂泥層、灰色泥土層10～30cm、緑灰色泥土層20cmと続く。

オリーブ褐色泥砂層から暗灰黄色泥砂層までは鳥羽離宮廃絶後の堆積層で、鎌倉時代から江戸時代の遺物が含まれる。このうち暗灰黄色泥砂層は耕作土であると考えられ、上面に東西方向の畦とそれに並行する浅い溝を検出した。

鳥羽離宮期の遺構は緑灰色泥土層の上面で東西方向のＳＤ１と浅い溝を検出した。この上層のにぶい黄褐色砂泥層と灰色泥土層は第104次調査で検出した建物基壇に伴う時期のものであると考えられ、ＳＤ１廃絶後の整地層である。この層からは鎌倉時代の遺物が出土している。

また、土取り穴状の遺構群はＳＤ１よりも北に認められ、第104次調査と同様のあり方をしめしている。そして、その範囲については現在のところ不明であるが、離宮造営に伴う大規模な土取りと思われる。遺物は極めて少なくＳＤ１よりも古い。さらに、鳥羽離宮の遺構面から約1.2ｍ下の黒色粘土層は縄文時代と考えられる遺物包含層である。この上面でＳＫ２を１基検出した。以下主な遺構について述べる。

ＳＤ１　鳥羽離宮田中殿の北限と考えられる東西方向の溝である。深さは1.4ｍを測る。幅は南岸が調査区外になるため不明であるが第104次調査時と同規模と考えられ、約５ｍと推測される。溝の北側斜面にかるい段が作り出される。この一部で崩れを補修した杭と杭跡を検出したが、他に護岸の施設はみられない。ただ、溝の南側では板材、杭が出土しており、南側には護岸を施していた可能性が高い。また、溝の西側部では底に高さ約０.５ｍの溝に直交する高まりを検出した。これは溝の掘削時に地山を掘り残して高まりとしたもので、水量を調節するための施設であると考えられるが詳細は不明である。埋土は腐植土が厚く堆積しており、ここから多量の遺物が出土した。

図４　ＳＫ２（南から）

ＳＫ２　東西0.9m、南北0.8m、深さ0.6mの袋状をした土壙である。南側をＳＤ１に削られている。埋土から土器の小片が出土している。

3　遺物

今回の調査で出土した遺物は平安時代後期から鎌倉時代のものが多く、縄文時代のものがわずかに出土している。遺物の大半は平安時代後期のＳＤ１から出土したもので、ここから土器類、瓦類、木製品の他、骨なども出土している。以下ＳＤ１の出土遺物について述べる。

土器類(図版24、図５)

ＳＤ１から出土した土器類には土師器、瓦器、輸入陶磁器等があり、出土量の97%が土師器である。

土師器(１～11)　土師器は皿が大半を占め器形によって大皿、中皿、小皿、受け皿に分けられる。大皿は口径14.0cm、高さ2.8cm前後で、平らな底部と湾曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁部外方を二段になでるもの(９・10)と一段にナデ、口縁端部をつまみ上げるもの(11)がある。中皿は口径11.0cm、高さ1.8cm前後で口縁部外方を二段になでるもの(７)と一段になでるもの(８)がある。小皿は口径9.5cm、高さ1.6cm前後で、口縁部外方を一段にナデ、端部を丸くおさめるもの(２)とつまみ上げるもの(3・4)がある。また、口径がやや小さく、器高の高いもの(１)がある。これは口縁部外方を二段にナデており、全体の調整の他のものに比べ丁寧である。受け皿(5・6)は口径8.7cm、高さ1.2cm前後で平らな底部と内側に強く折れ曲がる口縁部からなる。

瓦器(12・13)　瓦器の出土量はわずかで椀と盤が出土しているのみである。椀(12)は小

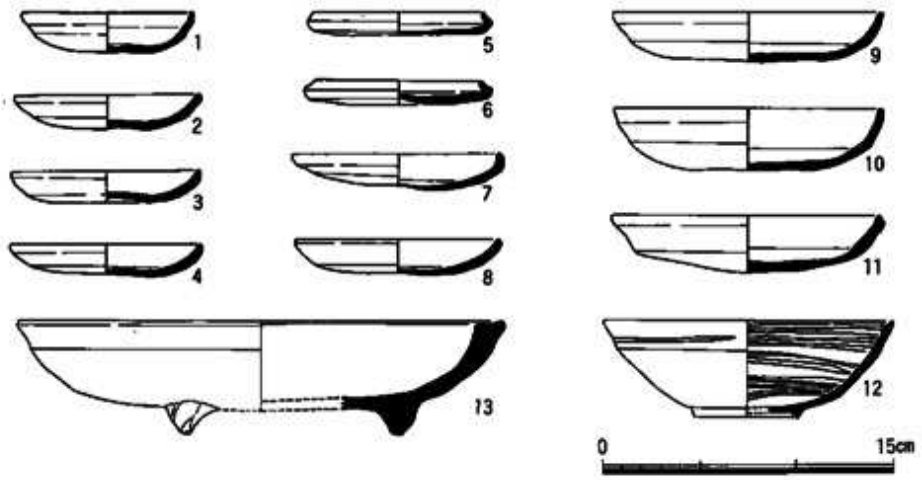


図５　ＳＤ１出土土器実測図

さな底部から口縁部にかけてゆるく内弯しながら立ち上がる。底部外面には断面三角形の小さな高台が付き、内面は細いラセン状の暗文が施される。体部内面には粗いミガキが施される。口縁部内側には一状の沈線がめぐり、外側はナデの後一部にミガキが施される。盤(13)は平らな底部とゆるく内弯しながら立ち上がる口縁部からなる。底部外面には円錐形の小さな脚が付く、残存している脚は一つであるが、本来は三脚であると考えられる。口縁部はナデで、平らにおさめられる。底部から体部の外面には籾の圧痕が明瞭に残る。

瓦類(図版25、図6)

瓦類の出土量は少ないが軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。

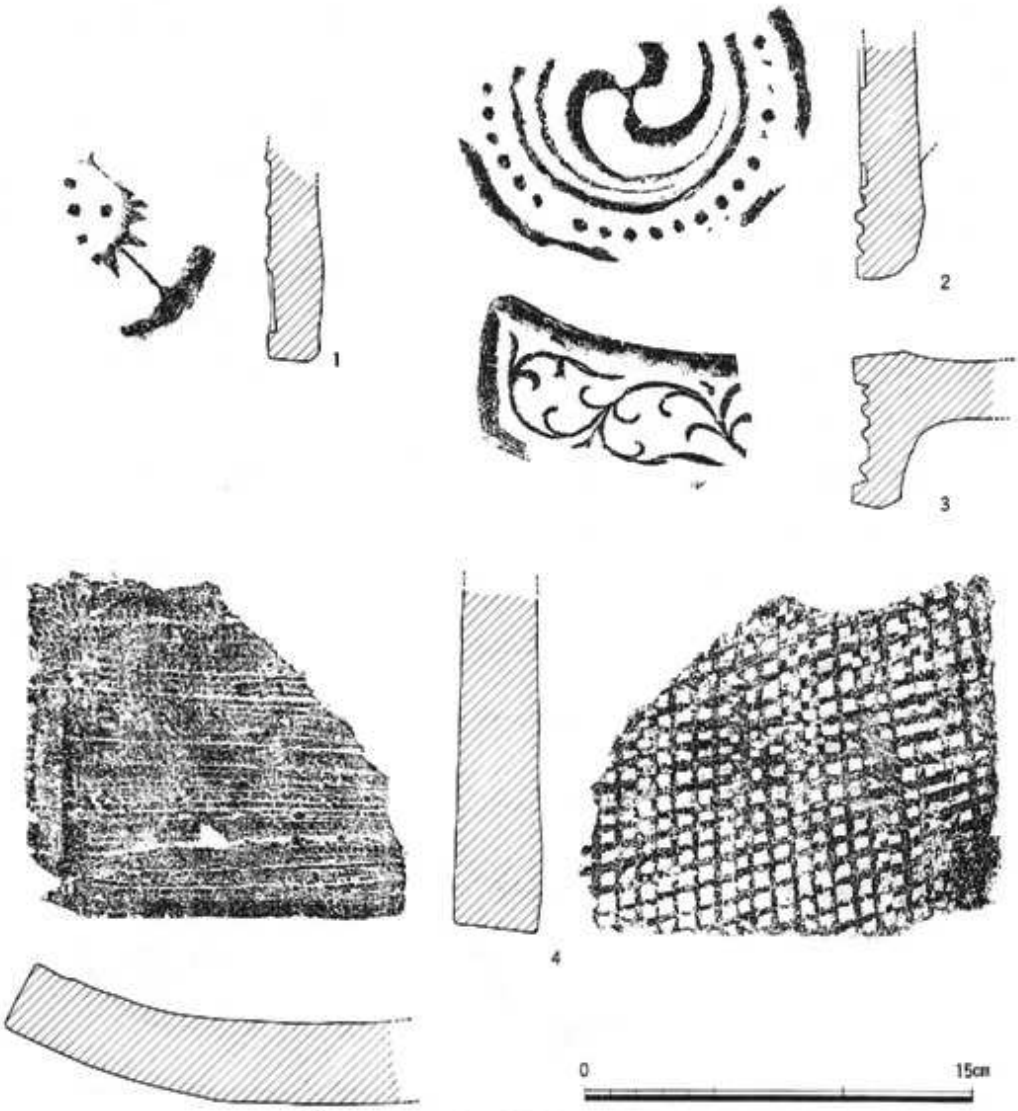


図6　ＳＤ１出土瓦拓影・実測図

複弁蓮華文軒丸瓦(1)　瓦当右下部の破片である。中房には1+4の蓮子を配している。花弁は簡略化され、三角形を呈する子葉が中房の圏線に接している。瓦当外周下部及び瓦当裏面は不定方向のナデとオサエである。胎土は砂と小石を含み、焼成は軟質である。暗灰色を呈する。山城産の瓦と考えられる。

三巴文軒丸瓦(2)　右に巻き込む三巴文で、頭が凸線で結び付く。巴は断面台形で細く、尾の部分も長い。外区と内区の間には太い圏線がめぐり、珠文を密に配する。瓦当外周と裏面は横方向のナデを施す。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は須恵質で硬い。色調は暗灰色を呈し、瓦当面にはオリーブ色のうすい自然釉を帯びる。播磨産の瓦と考えられる。

均整唐草文軒平瓦(3)　太い唐草が左右に二転する。瓦当外周上部及び顎部は横方向にナデ、平瓦部凹面の端は縦方向にナデる。瓦当の接合方法は包み込み式である。胎土は黒色の砂粒を含み、焼成は須恵質で硬い。色調は暗灰色を呈する。播磨産の瓦である。

平瓦(4)　残存長13cm、残存幅14cm、厚さ3cmである。平瓦凸面は粗い格子目叩きが密に施され、凹面は横方向にヘラケズリする。側面及び端面もヘラケズリである。胎土は砂と小石を多く含み、焼成は良好で硬い。色調は黄灰色で、平瓦凹面の端から端面にかけてオリーブ色のうすい釉を帯びる。尾張産の瓦であると考えられる。

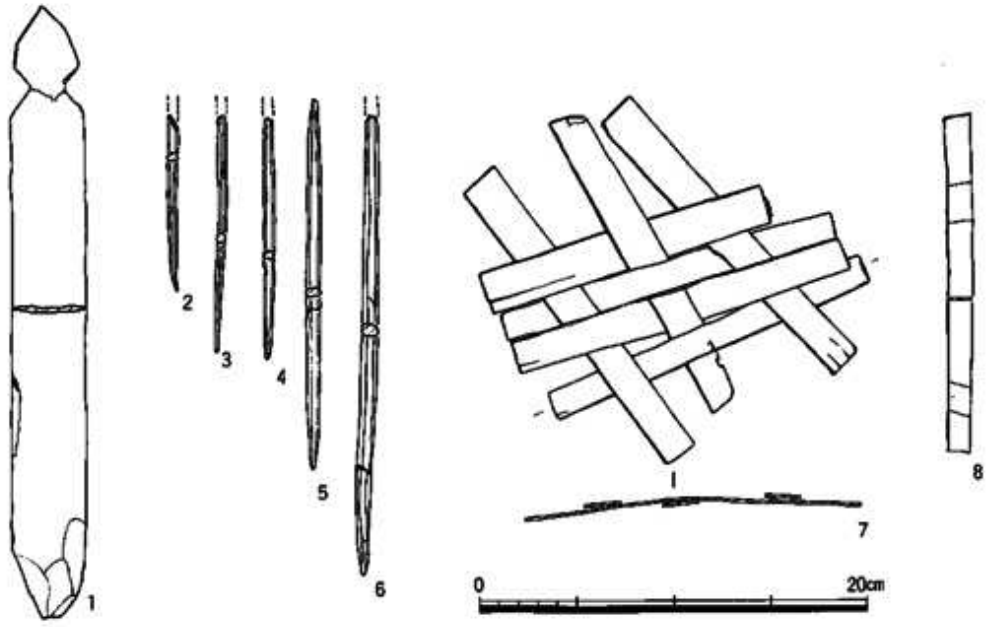


図7　SD1出土木製品実測図

木製品(図版25、図7)

ＳＤ１には腐植土が厚く堆積していたため、木製品の保存状態は良好であった。斎串、箸、編物などが出土している。

斎串(1)　長さ31.4cm、幅3.8m、厚さ２～３mmである。薄い板材の両端を尖らせて、上端に近い部分を両側から三角形に切り欠いている。上端部は両側から切り欠くだけに比べ、下端部は両側からの切り欠きと表面を削ることによって整形している。

箸(２～６)　全体の形状がわかるものは(５)のみで長さ19.3cm、直径約５mmを測る。箸は全体を粗く削って整形し、両端を尖らせている。上下の区別はない。(２～４)は部分であるがほぼ(５)と同じである。(６)は残存長23.9cm、直径約８mmでやや大型である。整形方法は同様で粗く削り、先端を尖らせている。先端から２～３cmにわたって焦げ痕が認められる。

編物(７・８)　長さ17.5cm、幅2.0cm、厚さ1.5cm程度の板材を縦、横交互に編み合せたものである。板材は他の製品の転用と考えられ、ケビキや面取りの痕跡が認められる。(８)は(７)の部品であると考えられ、上下２箇所に刳り込みが認められる。

４　まとめ

今回の調査成果は鳥羽離宮田中殿の北限に想定できる溝を検出したことである。第104次調査では建物基壇の保存を優先し、溝は部分的な調査にとどめたため、その性格、時期を知る上での十分な資料を得ることができなかった。しかし、今回は溝に重点をおいて調査を進めることができ、溝の構造、堆積の状況など貴重な資料を得ることができた。

溝は底部に人工的な高まりを設けていること、腐植土が厚く堆積していることなどから排水の機能よりも、水をたたえた堀の機能を重視して構築されたと考えられる。溝の構築時期は不明であるが、平安時代の終りごろには埋没をはじめ、第104次で検出した基壇建物が造営される鎌倉時代には埋めもどされて整地されている。その後、この溝にかわる田中殿北限の施設は検出されず、今後の調査の検討課題として残った。

また、下層に縄文時代と考えられる遺構を検出したことは今後付近を調査する上での新たな検討課題である。

註１)　京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所「鳥羽離宮跡発掘調査概報」昭和59年度

Ⅲ　第120次調査

1　調査経過

調査地は、北向不動院の西隣に位置する。当調査地は、1985年６月21日に試掘調査を実施し、地表下45cm付近で建物基壇と考えられる遺構の一部を検出した。しかしながら、建物予定地が資材置場となっていたため、改めて1985年８月22日に再度試掘調査を行った。この時５ケ所に試掘トレンチを設けたが地表下 250 cmまで重機によって破壊されていることが判明した。また、６月21日に検出した遺構も同様に業者によって破壊されていた。しかし、一部破壊をまぬがれた所が点々と存在していたが、その後も破壊が続いた。1986年８月11日当調査地について国庫補助による発掘調査を実施する運びとなった。

調査は、まず破壊状況を把握するために調査地の境界に沿ってトレンチを数ヶ所に設定し、重機で掘り下げを実施した。その結果、境界のぎりぎりまで破壊されていることが判明した。その後も破壊を免れている所を探すために調査地内にトレンチを設けたが、調査前に仮設建物の建っていた所だけが一部残存していることが明かとなった。調査は、この場所についてのみ実施した。

2　遺構・遺物

遺構は、南北方向の溝跡を一部検出したにとどまった。時期は江戸時代と考えられる。この他にはごく近年の大規模な土取り穴のみである。

出土遺物には、平安後期から江戸後期までの土師器、陶磁器が少量出土した。いずれも小片で、計測できるものはない。

3　まとめ

当調査地に東殿関係の遺構があったことはまちがいない。このような遺構が何等の記録も残すことなく世の中から消えてしまったことは残念至極である。

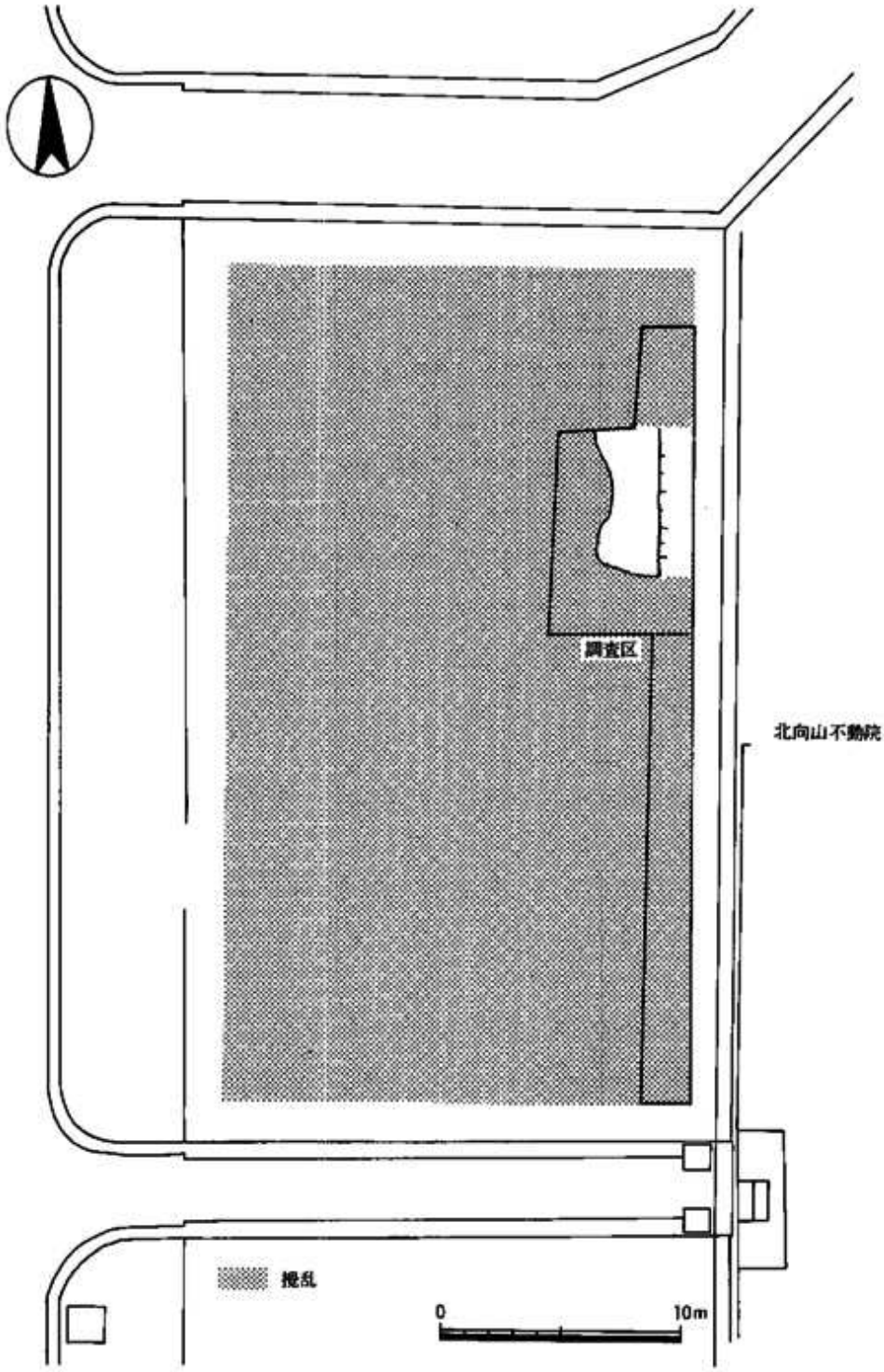


図8　遺構実測図

Ⅳ　第121次調査

1　調査経過

今回実施した第 121 次調査は、浄菩提院陵(白河天皇陵)の北側に接する水田地で実施した。調査地の東側で行った第91次調査では、直角に曲がる平安時代後期の溝を検出している。また、調査地のすぐ西側で行った第96次調査では、先の第91次調査で検出した溝が南へ直角に折れ曲がる隅の部分を発見した。

今回の調査地は第91次調査地と第96次調査地との中間に位置する。調査区は、建物の建築場所を外して行ったため不整形なものとなった。

2　遺構

調査地内の基本層位は以下のようである。耕土・床土下には、まず厚さ30cmの黄褐色砂泥層が調査区全体に認められるが、北へゆくに従って徐々に薄くなる。この層を除去すると平安時代(鳥羽離宮併行期)の遺構が検出できる。遺構面は海抜 13.80m 前後である。鳥羽離宮の造営にかかる整地層、オリーブ褐色泥土層は厚さ20cmにわたりこの周辺部に広く認められる。この層からは、古墳時代の埴輪が多量に出土する。また、奈良時代の遺物も若干含まれている。更に下の緑灰色粘質土層も埴輪を包含しているが、古墳時代以降の遺物は一切出土していない。この層以下は地山となる。調査の結果検出した主な遺構は、溝跡、井戸跡などである。遺構の分布密度は低い。

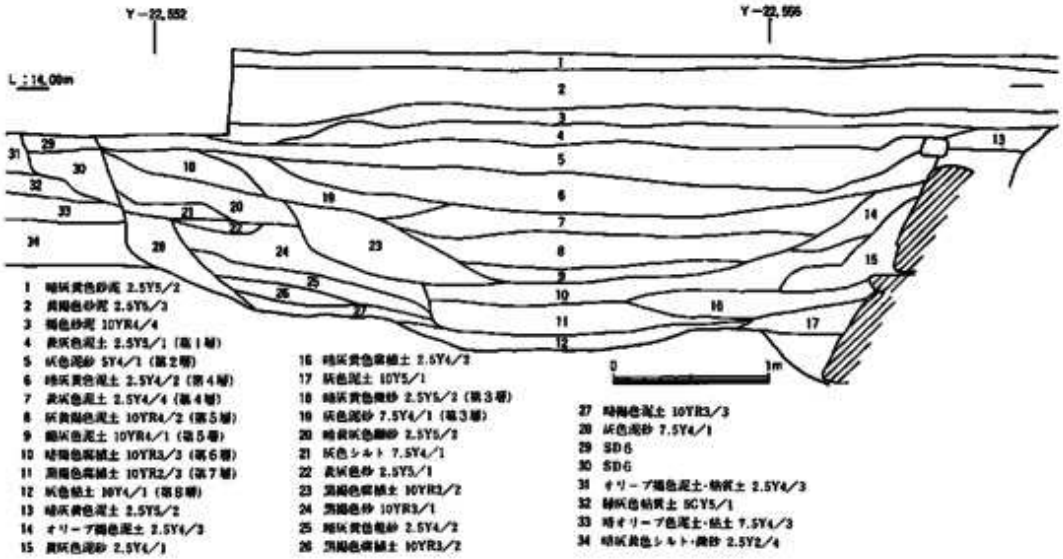


図9　ＳＤ３東壁断面図

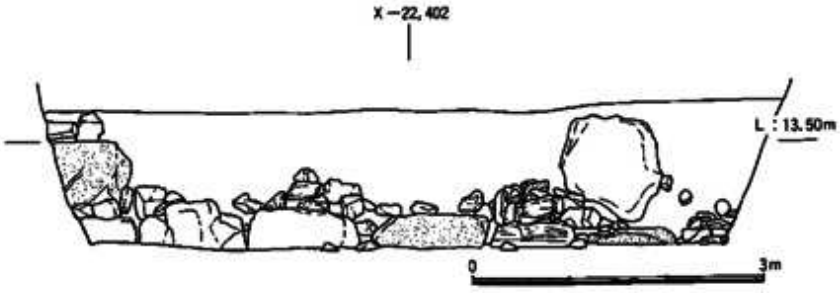


図10　ＳＤ３石垣見透し図

ＳＤ３　東西方向の溝で、幅5.70～６ｍ、深さ1.5ｍ前後をはかる。溝の北岸は素掘りのままの状態であるが、南岸は自然石を積み上げて護岸としている。しかしながら、ほとんどの石は安土・桃山時代に抜き取られており、最下段の石のみが残存していた。東壁近くにおいて一部であるが、旧状を比較的よく留めているところがあった。それによると、この石垣は最低４段以上石を積み上げていたと思われる。石の積み上げ方は、まず石の長軸を溝に平行するように据え付ける。その上に、人頭大の石を３～５個置き２段目をつくる。更にその上には、１段目に使用した石と同様なものを積み上げる。すなわち、この石積みの特徴は、大きな石と石の間に小振りの石を横にならべて使っていることである。

溝内の堆積土は、おおよそ７層に分離できる。上層は、灰色系の泥土層や泥砂層が認められるが下層になると腐植土の混入が顕著になる。上層は室町時代から安土・桃山時代、下層は平安時代の遺物が出土する。

なお、性格は不明であるが北側の底部近くに、10～15cm前後の先が尖った木の棒が点々と突き立てられていた。呪術に関係するものであろうか。

ＳＥ９　瓦と河原石や凝灰岩を積みあげて井戸枠を構築した井戸跡である。瓦や凝灰岩は、鳥羽離宮の建物に使用されていたものを井戸に再利用したものである。丸瓦や平瓦は、使用しやすいように半截したものが一般的であったが、中には完

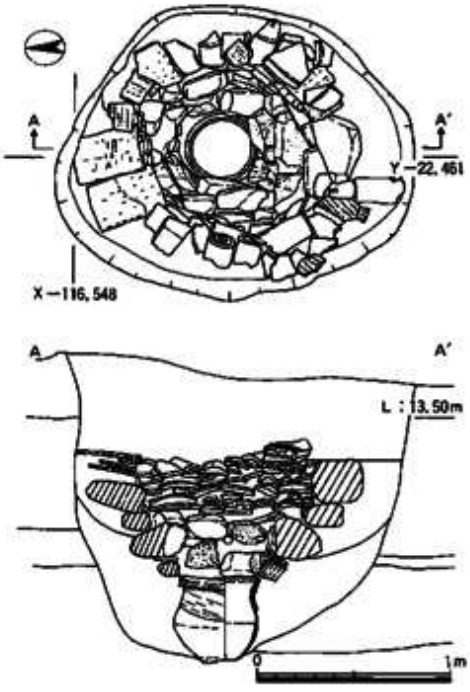


図11　ＳＥ９実測図

形のまま利用したものも含まれていた。井戸の底部には、甕の底部を打ち欠いたものを据え付けていた。甕は、口縁部から頸部にかけて曲物の側板が縄で結び付けられていた。これは、甕の底部を打ち欠いた際に罅が入ったために行ったものであろう。井戸の掘形内からは、接合できる甕の底部が出土しており、現地で甕の底部を打ち欠いたものと考えられる。井戸の底部に、このように甕を据え付けた例は鳥羽離宮跡内では初例である。

3　遺物

瓦類(図版8～14、26～31)

瓦の大半は、ＳＤ３・ＳＥ９から出土した。これらの瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・隅木蓋瓦などに分類できる。また、平瓦の中に竹管文風の「○」印が見られるものがある。軒瓦は総数で40種61点ほど出土している。以下、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦の順に述べることにする。

複弁八弁蓮華文軒丸瓦(１～３)　３種類に細分できる。内区は低く突出し、中房及び蓮弁は上下２段に重複して表現されている。中房は大きく、上段は花弁状を呈し蓮弁に対応して８弁である。蓮子は１＋８である。蓮弁の下段は互いに接するが上段部は独立する。子葉は高く突出し基部は中房に接する。外縁の両端は凸線が巡り、その中央に珠文が配される。これらの瓦当部に接合している丸瓦部は、一般的なものと異なり丸瓦端の側面に一定の間隔で切込みを加えた特異なものである。この切込みは、丸瓦側面を削り込んで左右に２対、計４箇所に設けている。丸瓦部から玉縁にかけての段は緩やかな角度を示す。この一群の軒瓦は、丁寧な調整を加えて仕上げている。

複弁八弁蓮華文軒丸瓦(４～６)　いずれも簡略化された蓮華文である。(4・5)は中房の周囲に蕊が巡る。(４)は笵の打込が数度おこなわれたために蓮弁の上に蕊が重なっている。(５)は蓮弁及び子葉を凸線で表す。弁と弁との接点から更に弁を囲む凸線が巡る。(６)も同様弁は凸線だけで表現される。子葉も点となっている。中房は盛り上がり１＋６の蓮子を配する。

三巴文軒丸瓦(７～10)　(７)は瓦当面が楕円形で、内区には左へ巻き込む巴文を配する。頭部・尾部とも接することはない。外区には大粒の珠文が19個巡る。笵の打ち込みは不均等で瓦当面の上端は深くまで達しているが下半は浅い。瓦当裏面にはオサエ時の指圧痕が縦方向に残る。(8・9)とも右方向に大きく巻込む巴文である。頭部・尾部とも接しない。(８)は、オサエを中心とする調整であるが、(９)はナデが主流である。(10)は、右方向に巻き込む巴文で頭部は瓦に接する。外区には、珠文を密に35個配する。瓦当裏面は丁寧に

ナデを施して仕上げる。瓦当面の一部には自然釉が認められる。

無文軒丸瓦(11)　瓦当部は楕円形をしめす。瓦当裏面は凹凸しているが丁寧にオサエて仕上げる。外周は軽くケズリを施す。

偏行唐草文軒平瓦(12～14)　2種に細分できる。いずれも、左端の唐草文は他と異なり逆向きになる。(12)は他の2点と異なり、各単位の唐草文は大きく8反転する。主葉の先端は強く巻き込み玉状を呈する。主葉の先に向い合うように子葉が伸びる。外縁・脇の内外周とも凸線が巡り、その中央に珠文を配している。瓦当面には離れ砂の使用が認められる。顎は段顎である。平瓦部の厚さは通常のものより2倍近く厚い。平瓦部凹面には布目圧痕や糸切り痕を残す。顎・平瓦部凸面は丁寧にナデを施して仕上げる。側面はヘラケズリを施す。平瓦部の端面には植物圧痕が多数見られる。(13・14)は同笵であるが顎の形態などは異なる。尊勝寺176B型式(註1)とも同笵である。文様構成は(12)と同一であるが、唐草文の反転が1単位多く9反転する。また、唐草文の巻き込みも強くない。外縁の珠文も小粒で数も多い。瓦当面に離れ砂が認められるものとそうでないものとがある。また、瓦当部の上外縁の端部に面取りを施すものと施さないものとがある。先述したように(13・14)は同笵であるが顎の形態は全く異なる。すなわち、(13)の顎は(11)と同じ形態の低い段顎であるが、(14)は曲線顎に近い。この違いは、(13)は瓦当部の成形に際し、顎を削り出すように成形しているのに対し、(14)はいわゆる「包み込み式」と言われている瓦当接合法によっているためである。出土数では曲線顎に近い形態の方が半数以上占める。

唐草文軒平瓦(15)　唐草文は内区の左右上端から瓦当中心に向かって伸び4転する。一見すると複線の唐草文にも見受けられる。2～4転目の唐草文は二股に分かれる。内側へ伸びる唐草は短く、外側に向くものは長い。上下外区・脇区には珠文が巡る。上外縁端部は横方向に削り面取りする。顎はヘラケズリを施し曲線顎に仕上げる。平瓦部凸面は荒く押さえたままで凹凸している。

唐草文軒平瓦(16)　中心飾りは逆方向の釣針状を呈する。向かって右側の第1単位目の唐草文は途中で2つに分枝する。各唐草文の先端は水玉状を呈する。左右の脇は「く」字形となる。瓦当面には離れ砂の使用が見受けられる。瓦当部の接合方法はいわゆる「包み込み式」である。瓦当部のほぼ中央に平瓦端部を接合している。

幾何学文軒平瓦(17～19)　(17)は、瓦当文様をヘラ描きによって表している。瓦当部は半折曲げに近い手法で成形している。(18)の脇は外縁に比較して幅広である。上外縁の端部はヘラケズリを施し面取りを行っている。笵の打ち込みは浅い。(19)は瓦当部を半折曲

げに近い手法で成形している。笵の打ち込みは深い。平瓦凹面の布目痕は瓦当部外面の端まで認められる。

唐草文軒平瓦(21)　長く伸びる茎の先端には三角形状の唐草文を配している。瓦当部は完成した折曲げ手法でつくっている。

剣頭文軒平瓦(20・22・23)　(20)は剣頭文の初源的なものと考えられているものである。笵の摩滅は著しい。(22)の剣頭文の鎬はすべて瓦当中央の鎬に平行する。顎と平瓦部との境は強く横にナデを施す。瓦当部は完全な折曲げ手法で仕上げる。(23)は、剣頭の鎬はそれぞれ平行せず不揃いである。瓦当部は完全な折曲げ手法で成形する。

平瓦(24～28)　今回報告する平瓦の特徴は、一般的に見受けられるものと異なり凸面に低い段をつくり出していることである。鳥羽離宮跡からは今のところ東殿や田中殿の一部から出土しているだけで分布範囲はかなり限られている。平瓦は、成形手法の違いによって4種類に分類できる。

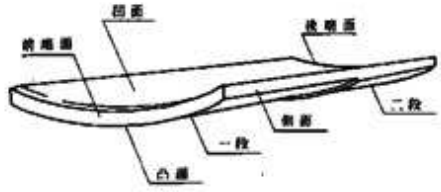


図12　平瓦部分名称

Ⅰ類(24・25)　凸面に縦方向の縄叩きの痕跡を明瞭に残す。離れ砂も使用している。凹面には布目痕が残る。前端面には「○」印の記号が押捺されている。後端面の凹側は面取りする。両端面の広狭はほとんどない。寸法は全長36.5～37cm、端面の幅22.5cm、厚さ2cm、段差0.5cm、前端面から段までの長さ15～15.5cm前後、以下のⅡ～Ⅳ類も同様である。重量4kgをはかる。

Ⅱ類(26)　凸面は、糸切りの痕跡や縦方向の縄叩きの痕跡を残す。凸面・凹面とも離れ砂が多く認められる。凹面には糸切り痕は残存しているが布目痕は一切認められない。前端面にはⅠ類と同様、「○」印が押捺されている。寸法は全長36cm、端面の幅23.3～23cm。厚さ2.5cm、段差0.7cm、重量3.2kgをはかる。

Ⅲ類(27)　凸面は糸切りの痕跡や叩きの痕跡を一切残しておらず、丁寧にナデ調整を施している。凹面も凸面同様ナデ調整が丁寧に施され、一部布目痕がわずかに残るところがある。寸法は全長38cm、端面の幅22.5cm、厚さ2.5cm、段差2.5cm、重さ4.8kgをはかる。

Ⅳ類(28)　凸面は、糸切りの痕跡や布目の痕跡が認められる。凹面は丁寧なナデ調整が施されており布目の痕跡はほとんど認められない。寸法は全長37cm、幅23.5cm、厚さ2.7cm、段差0.7cm、重量5.3kgをはかる。

丸瓦(29・30)　丸瓦も平瓦と同様に一般的なものと形態を若干異にしている。最大の特徴は先述した軒丸瓦(1～3)と同じように丸瓦の側面に切込みを加えて段をつくり出していることである。調整が丁寧におこなわれているため、手法の違いによる分類はできなかった。(29・30)とも両側面の段は、側面をヘラで6箇所に切込みをいれてつくりだしている。段の位置は左右対象で、3対設けている。端面の内側はヘラケズリを加えて面取りをしている。玉縁に穿たれた釘穴や溝は、丸瓦の中軸線上になく右側にやや寄ったところに設けられている。この溝は、釘の頭が高くならないように気くばりをしたものと考えられる。玉縁の長さは普通のものより長くつくられている。凹面には、糸切りの痕跡や布目痕が明瞭に残っている。調整は極めて丁寧に施している。寸法は全長44～45.5cm、玉縁の長さ12～12.5cm。切込みの深さ(段差)1.5cm前後、重量3.1～3.2kg、1段目の長さ4cm、2段目15.5cm～16cm、3段目15～16cm、4段目は8～8.5cmをはかる。

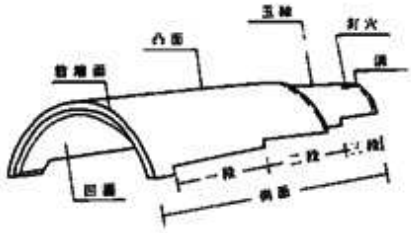


図13　丸瓦部分名称

土器類(図版32、図14・15)

ＳＤ３から出土した土器類には土師器・須恵器・陶磁器・輸入陶磁器・瓦器などがある。大半を土師器が占めている。今回遺存状態の良好な土師器・瓦器を図示した。

第5層出土土器(1～8)　土師器の皿と受け皿がある。皿は窪んだ底部に斜め上方に立ち上がる口縁部からなるいわゆるヘソ皿である。(1)と(2)は底部の窪みが小さい。(1・2・4)はいわゆる白土器である。受け皿(8)は平らな底部と強く内側へ屈曲する口縁部がつく。

第6層出土土器(9～12)　土師器皿と瓦器椀がある。土師器皿は平たい底部に外反する口縁部とからなるもの(9)と、丸い底部に内弯しながら立ち上がる口縁部がつくもの(10)がある。(9)は口縁端部を上方につまみながらヨコナデ調整。瓦器椀(11・12)は平らな底部に内弯しながら立ち上がる口縁部とからなり、断面三角形の高台がつく。口縁端部にはわずかに浅い沈線がめぐる。内面には粗いミガキが、底部の見込みには(11・12)とも暗文が施される。

第7層出土土器(13～33)　土師器皿があり大きさによって大皿・小皿に分けられる。大皿・小皿ともに平たい底部に内弯しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は丸くおさめる。調整はヨコナデによるもので、大半が1段であるが2段ナデ(20・31～33)もある。

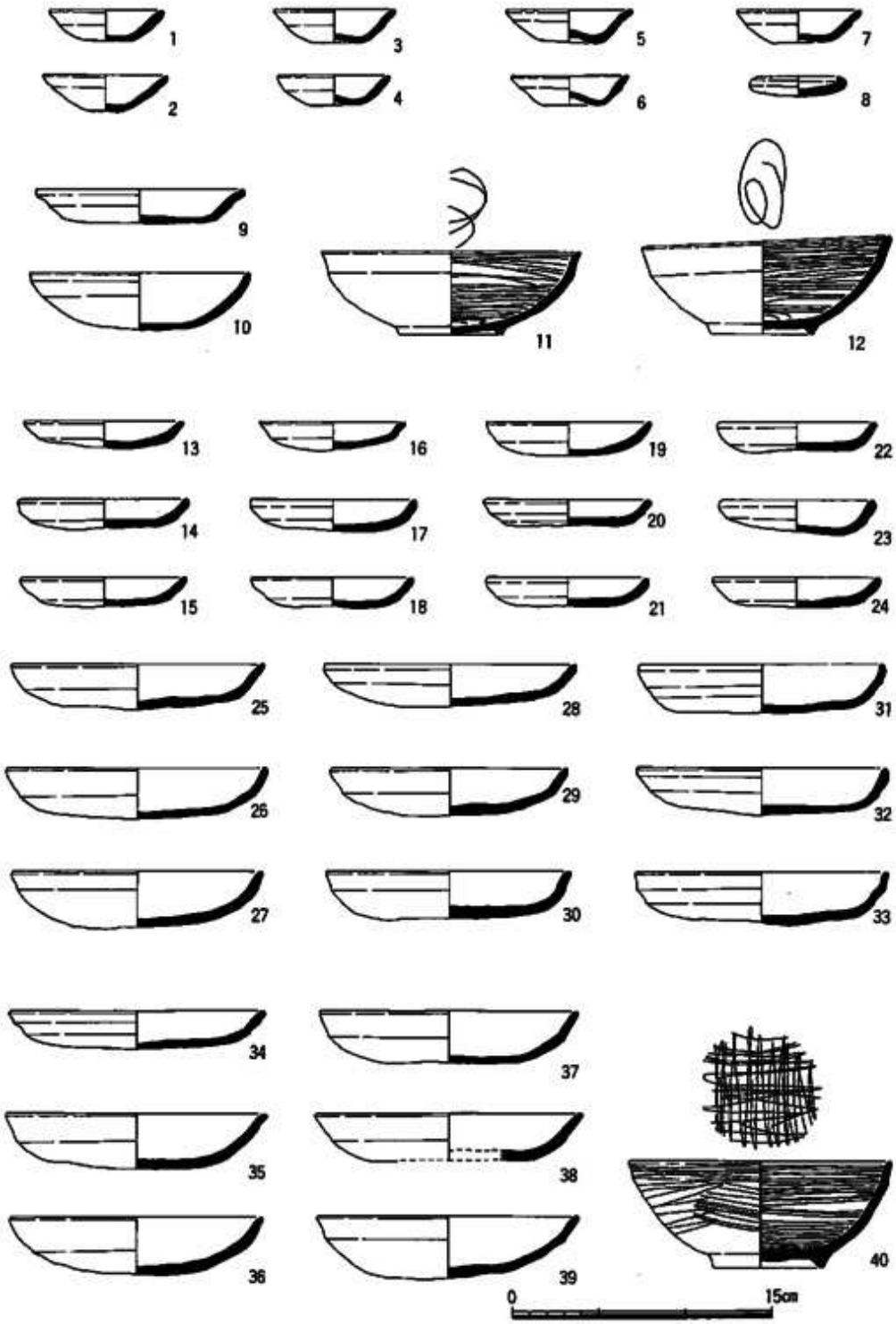


図14　ＳＤ３出土土器実測図

第８層出土土器(34～40)　土師器と瓦器がある。土師器は形態・調整が第７層と同様であるが口径がやや大きい。(34)は口縁部外面を２段にナデ調整し、(35～39)は１段のヨコナデ。これらの土師器は赤い微砂粒が混入している。瓦器椀は平らな底部に内弯しながら立ち上がる口縁部とからなる。高台は台形に近い。口縁端部内側には沈線がめぐる。内外面ともにミガキを施す。外面のミガキは４分割である。内面見込みには格子状の暗文がつく。

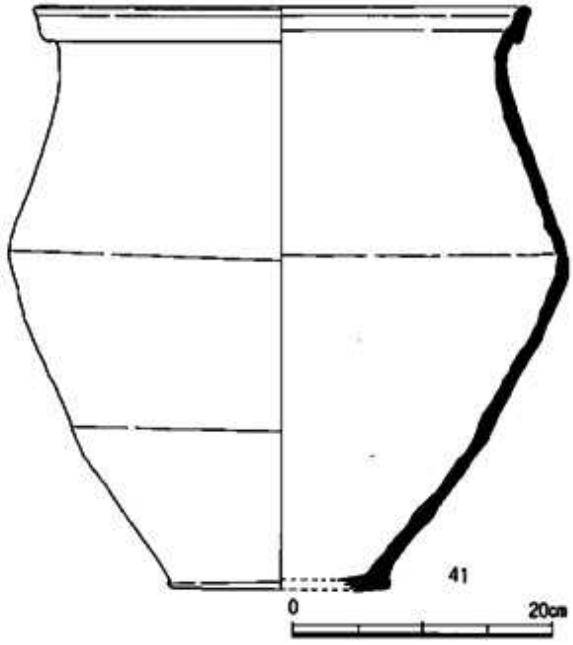


図15　ＳＥ９出土甕実測図

甕(図15)　ＳＥ９の底部に、井戸枠として用いられた焼きしめ陶器が１点ある。信楽焼の甕である。平たい底部に最大径に張る胴部と外反する口縁部からなる。口縁部は外側へ折り返した後、ヨコナデ調整を行っている。口縁端部は丸くおさめる。体部外面の上半は格子叩き後回転台によって時計方向にヨコナデ、下半はオサエとナデ調整。叩き目はほとんど撫で消す。内面上半は明瞭に左下がりの指オサエが残る。内面中程は横方向にケズリを行う。胎土に石英・長石を含む粒目粘土で焼成は良好。色調は淡橙色。口径は37.9cm、器高は45.4cmをはかる。

金属製品(図版35・36、図16・17)

金属製品はすべてＳＤ３埋土中から出土した。時期はいずれも平安時代後期（鳥羽離宮併行期）である。

天蓋・瓔珞(１・２)　(１)は、銅板に金鍍した一辺4.2cm、厚さ0.2cmをはかる正方形の瓔珞である。中央には、簡略化した15弁の蓮華文を置き、その周りを宝相華で飾

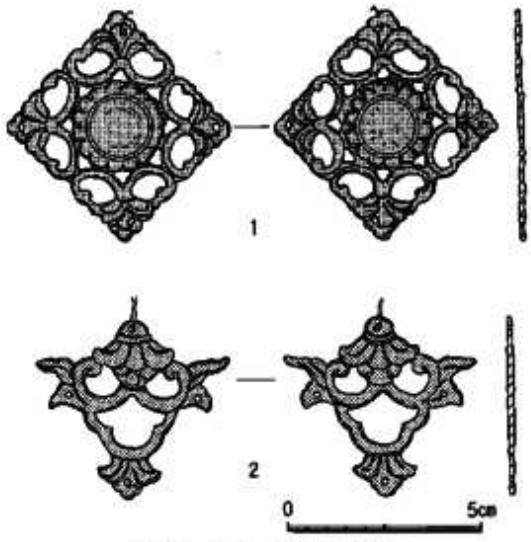


図16　天蓋・瓔珞実測図

る。四隅には孔を穿つ。文様は毛彫りによって表現されている。蓮華文の中房は、かたほうは凸に、もう一方はタガネで削って凹に仕上げている。(2)は銅板に金鍍した瓔珞である。寸法は縦4.6cm、横5cmをはかる。天の部分には斜め上からのぞき見たような宝相華文を置き、茎・葉が左右に伸びている。上下・左右に孔を穿つ。

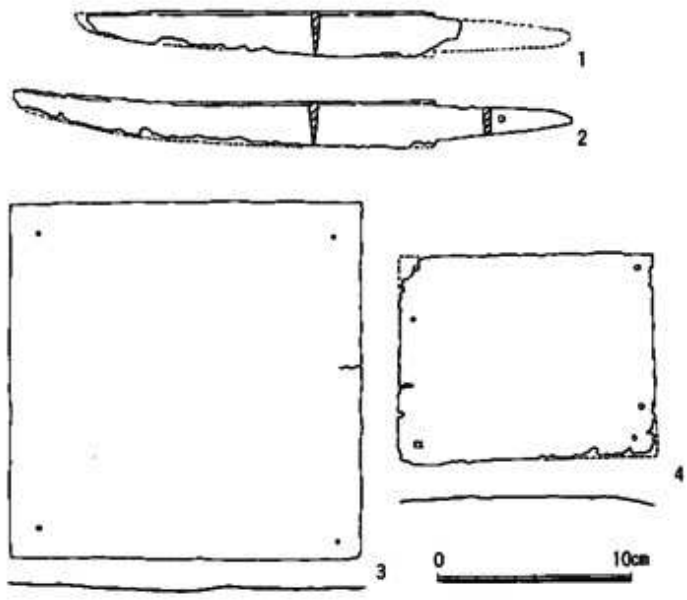


図17　金属製品実測図

銅板(図17)　大小2種類ある。(3)は18×15.1cm、(4)は一辺10.8×13.1cmをはかる。いずれも錫鍍金の痕跡が残っている。(3)については残存状態は良好でないがわずかに金鍍された痕跡が観察できる。

刀子(図17)　2点とも腐植がひどく刃部や茎が欠けている。(1)は残存長19cm、元幅2.4cm、丸棟で直刀である。(2)は残存長29cm、茎の長さ7.2cm、元幅2.5cmで刀子はやや反りをもつ。茎には径0.4cmの目釘孔がある。茎は先が釘先状になる。

木製品(図版15・33・34)

和琴(図版15)　SD3第5層より和琴の槽の部分が1点出土した。檜の一枚板で作られ、頭部が根方向である。裏面は刳貫かれ、断面がカマボコ状を呈している。上面と側面は平滑に仕上げる。上面はわずかであるが頭部から盛り上がり、中央部がへこみ、また尾部が盛り上がる。大きさは長さ151cm、最大幅23.8cm、最小幅20.0cmをはかる。尾部は頭部に比べ広く、先端に柏葉形の切込みがある。頭部・尾部とも弦を通す弦孔が6個穿たれており、6弦の琴であったことがわかる。尾部の通弦孔は頭部より大きく、弦の末を結びまとめる葦津緒を用いたと思われる。さらに端部に近い方には2個の穴がある。琴上面には直径20cm程の円形と帯状文様が連続して認められた。しかし、琴柱の痕跡は不明である。裏面には裏板が残っていないが、裏板を留めた釘穴が右に3箇所、左に5個所あけられている。頭部の小口板は削り出しによるもので、槽と一材である。また、龍骨板をはめたと想

われるくり込みと釘穴が3箇所にある。頭部両側面には何らかの飾りをつけた痕跡と思われる穴がある。穴には木釘が2本ずつ残存していた。

独楽(図18)　縦木取りでロクロ挽である。内側もロクロで削り取っている。胴部の中央で「く」字状に曲がる。軸は八角形に面取りし先端はとがらす。内面には回転を利用して朱と黒で着色している。胴部外面にも黒く塗られていた痕跡がある。材質は柊である。ＳＥ９出土。

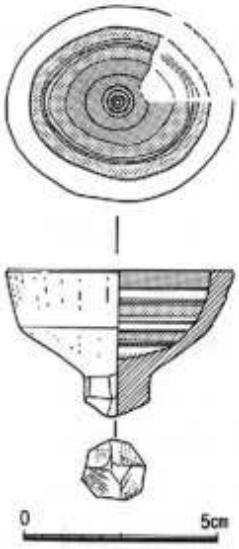


図18　独楽実測図

埴輪(図版16・37、図19・20)

今回の調査で出土した埴輪は総数で約410点におよぶ。その中で最も多く認められるのが円筒埴輪である。この他に、朝顔形埴輪や家形埴輪なども数点出土している。埴輪の出土量は、最も多く発見した第116次調査に次ぐものである。

円筒埴輪(図版16)　(1・2)は口縁部をヨコナデし平坦に仕上げる。(1)は口縁内側をヨコハケで調整する。外面は右上がりのハケ調整している。(3)は口縁部の形態や手法などから円筒埴輪の口縁部とは考えられないが、衣笠の口縁部とも考えられる。(4～13)は円筒部である。外面の調整は、縦ハケの上に横ハケを施している。内面は縦ハケを施すもの(4・6～8)、ナデ調整を施して仕上げるもの(10～13)などがある。(13)にはヘラ記号がある。(14～19)は底部である。(14・17)は粗い縦ハケの上に横ハケをかるく施している。(15・16・19)は外面に右上がりのハケを施し、底部近くはヨコナデで仕上げている。(18)は細かいハケ原体で縦ハケの上に横ハケを施している。

家形埴輪(図19・20)　いずれも破片であるため詳細について不明な点が多い。(19・20)

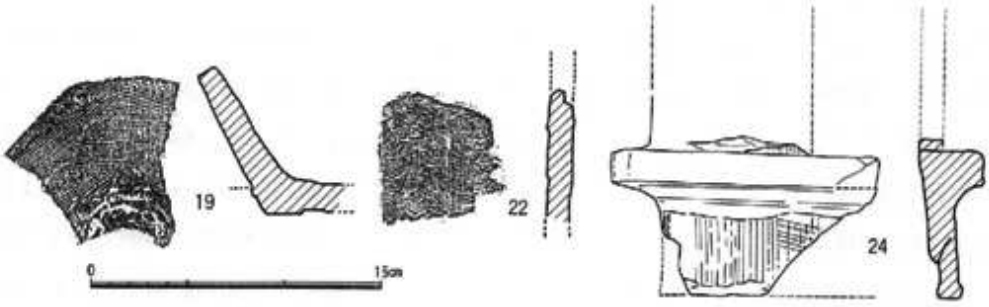


図19　家形埴輪拓影・実測図

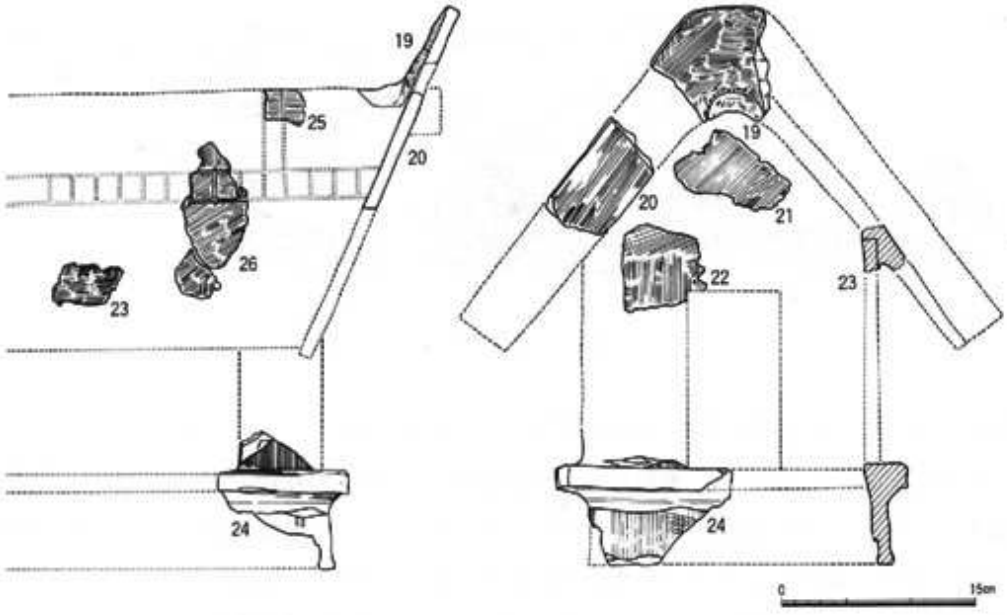


図20　家形埴輪復原実測図

は破風の一部と考えられる。外面にはやや粗いハケ目を残す。端部はケズリの後にナデを施す。(25・26)は屋根の断片と思われる。(25)は大棟の一部と考えられ、2本の沈線を引いている。(23)は屋根と桁行方向の壁と考えられる。(24)は家形埴輪の基部の一部と出入口の透かしを2箇所にとどめている。基部は粗い縦方向のハケ調整を行っているが、壁の部分はかなり細かなハケ調整で仕上げている。

4　まとめ

第91次調査や第96次調査では護岸用の石垣は、その上部を安土・桃山時代に抜き取られており、あまり旧状をとどめていなかった。しかし、今回検出した範囲内の一部に比較的良く保存されていたところがあり、旧状の一端を知ることができた。それによると、石積みは4段か、もしくはそれ以上なされていた事は確実である。石はすべて人工的な加工を加えていないものであり、切り石は一切認められなかった。石の使い方は、底部や3段目に用いられているような大形の石は基本的に、長軸を横に向けて据え付けており、縦方向に使うことはない。大形の石と石との間には、人頭大の石を横に並べ、上に重なる大形の石が安定するようにしている。今回の調査でも、溝の北肩口は素掘りのままでなんら護岸した施設は認められなかった。なぜ、片側(成菩提院陵側)だけに石垣を設けたかについては、溝の形態や規模などと共に今後の課題である。この溝がいつ頃成立したかについては、

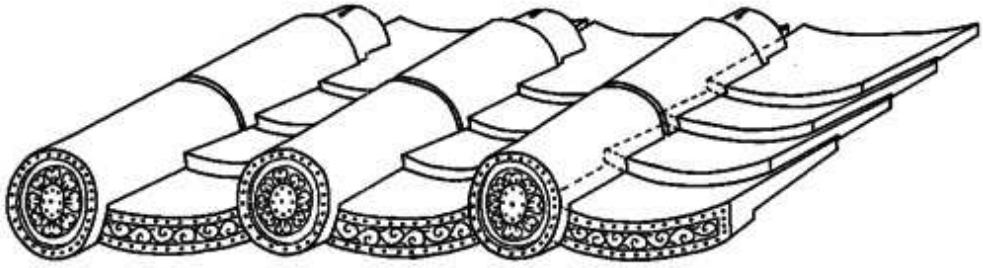


図21　葺き上げ復原図

先に実施した調査成果や今回の調査結果などから12世紀の前半と考えられる。

出土遺物には、土器、瓦、木製品、金属製品などが認められたが、その中に従来あまり報告されたことのない和琴や瓦が含まれていた。和琴については弥生時代・古墳時代の出土品や正倉院御物・春日大社の伝世品がわずかに見られるだけである。平安時代はほとんど不明であった。今回出土したものがその初例である。この和琴は裏板や琴柱を欠いているが、ほぼその全貌を知ることができる。そして、和琴本来の特徴を有しているだけでなく、箏の特色も合わせ持ったものである。また、室町時代の土器と共に出土したが、教示によればこの和琴の製作年代は平安時代中頃まで遡るものと考えられる。(註2)

瓦については、出土瓦の中に通称「有段瓦」(註3)と呼ばれているものがある。鳥羽離宮跡内におけるこの瓦の分布状況は、東殿と田中殿の一角から出土する程度で、その範囲もかなり限られている。過去に行った調査でも、少なからず認められていたが、いずれも小片が多く使用法を具体的に知るまでには至っていなかった。また、これらの瓦と組み合う軒瓦も明かでなかった。しかしながら、今回の調査でこれらの瓦が良好な状態で、しかもまとまって出土したため新しい知見をいくつか得ることができた。

まず第一に平瓦の凹面は通常のものとなんら変わっていないが、凸面に低い段を設けているところに最大の特徴が見いだせる。段の位置は全長の半分よりやや片側に寄ったところへつくりだしている。すなわち、1段目の長さは2段目よりも必ず5～6cm長くとられている。そして、このような平瓦と組み合う丸瓦も、一般的なものと異なって側面に3対の切込みを加えている。つまり、丸瓦部(筒部)2対、玉縁1対である。各段における切込みの深さは、平瓦の厚さの1/3～1/2程度である。丸瓦側面の段の寸法は、平瓦の葺足寸法と密接に関係している。例えば、平瓦前端面を軒先側に向け凸面の段を次の平瓦凹面後端面に掛けた時の葺足は、丸瓦各段の寸法と同じになる。その結果、平瓦凸面の段は平瓦の

縦ずれを防止するのと、葺足を一定するのに役立つように設けられたものと考えられる。丸瓦の各段は、平瓦のずれ防止を強固にしているだけでなく、葺上げの際に生じる丸瓦と平瓦の隙間をなくし雨漏れの防止にもなっているものと思われる。また、すべての丸瓦玉縁に釘穴が穿たれていることなどから、これらの瓦は比較的急勾配の屋根に葺かれていた可能性がある。このような条件で復原したものが図21である。

第二は前述の丸瓦や平瓦と組み合う軒瓦は、軒丸瓦(1〜3)と軒平瓦(12〜14)である。瓦当文様は、両者とも瓦当外周の外縁に珠文を巡らす特異なものである。肉眼観察では胎土や焼成は全く同一である。また、出土率から見ても組み合う確立は高い。軒平瓦は、瓦当文様の違いから2種に分類できたが、軒平瓦(13・14)は尊勝寺出土の176B型式と同笵である。しかしながら、図22のように瓦当接合法や顎の形態・胎土などは明らかに異なっている。尊勝寺出土の軒平瓦176B型式は、瓦当の接合を「包み込み式」と呼ばれる手法で行っている。瓦当の断面は撥形を呈し、平瓦部も薄い。瓦当面には離れ砂が認められる。胎土は緻密で砂粒を含まない。これに対して、今回出土した軒平瓦(13)は、尊勝寺176B型式と同様に瓦当の接合を「包み込み式」の手法でおこなっているが、瓦当断面の形態は全く異なっている。また、平瓦部の厚さも3cmと厚い。軒平瓦(14)は、段顎風で顎も長い。(13・14)とも胎土・焼成は同じである。以上のような点から、尊勝寺出土の176B型式と軒平瓦(13・14)とは別の地で生産されたものであると考える。

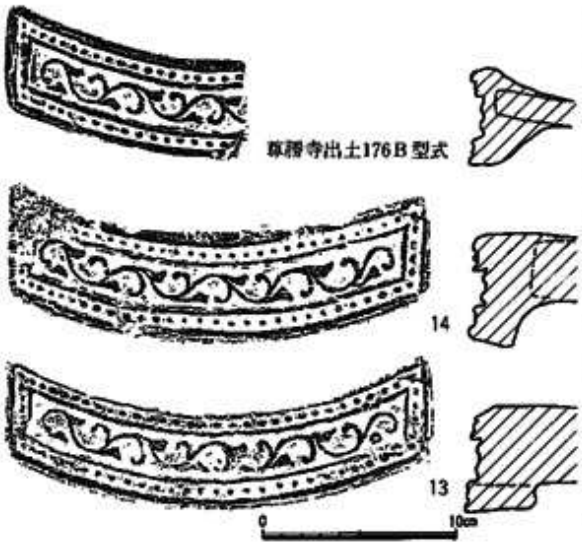


図22　尊勝寺出土の同笵瓦

以上が今回の調査で明らかになった主な成果である。しかし、これらの遺物については類例も少なく、詳細については今後の調査・研究に期待されるところが大きい。

註1)　杉山信三・岡田茂弘「尊勝寺跡発掘調査報告」『平城宮発掘調査報告Ⅰ・伝飛鳥板蓋宮跡』奈良国立文化財研究所学報第10冊　1961年　(PL41—176B)

註2)　本書の第Ⅵ章を参照。

註3)　梶川敏夫・渡辺和子・木村捷三郎『六勝寺—六盛西店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』六勝寺研究会　1976年　この調査では、平瓦しか出土しておらず、鳥羽離宮跡出土の丸瓦、軒瓦は発見されていない。鳥羽離宮跡出土の瓦より若干小型である。この他に、梶川敏夫氏の御教示によれば、尊勝寺跡第3次調査でも出土している。

V　植物遺体

1．第117次調査植物種実分析結果

調査法

植物質が多く含まれる池の汀線付近11地点において大型植物遺体の分析を行った。各地点から4ℓの土壌を採取して、1mmメッシュのフルイで水洗した残渣をバットに展開し、葉、枝、種実を拾いだし、種実についてのみ同定を行った。

結果

木本　6科8種を確認した。種実類の検出数は各分析地点とも余り多くはないが、アカマツ、クワ、カジノキ、サクラ類、ウメ、アカメガシワ、センダン、カエデといった内容は、すべて庭木として植栽されたものと考えるべきものである。アカマツ、サクラ、センダンは多くの地点で検出したことから、これら3種が本調査地における主要な構成樹木であったとすることができるであろう。

草本　14科16種を確認した。大部分が水辺に成育する性質を持つ。ナス、ウリ、イネなどの栽培植物がごくわずか含まれる。

表1　第117次調査土壌サンプル調査結果

木本

科名	和名	出土部位	L13XQ X594 Y232	L13XQ X596 Y232	L13YQ X598 Y232	L23AN X602 Y244	L23AN X602 Y246	L23AO X602 Y240	L23AO X602 Y242	L23AP X604 Y236	L23AQ X604 Y——	L23BN X604 Y244	L23BN X606 Y246
マツ	アカマツ	球果		1		1	4	2	8	2	2	3	2
クワ	クワ	核								1			
	カジノキ	核								1			
バラ	サクラ	核			1	1	破片	1	破片	2	1	2	
	ウメ	核				1							
トウダイグサ	アカメガシワ	種子				1						1	
センダン	センダン	核	破片	1	破片	4	破片	1	1		1		2
カエデ	カエデ	果実							1				

草本

科名	和名	出土部位	L13XQ X594 Y232	L13XQ X596 Y232	L13YQ X598 Y232	L13AN X602 Y244	L23AN X602 Y246	L23AO X602 Y240	L23AO X602 Y242	L23AP X604 Y236	L23AQ X604 Y——	L23BN X604 Y244	L23BN X606 Y246
タデ	タデ	果実				○	○					○	
タデ	ギシギシ	果実	○	○		○				○	○		
キンポウゲ	タガラシ	果実	○	○	○	○		○	○			○	○
キンポウゲ	キフネノボタン	果実			○		○		○	○		○	
ブドウ	ノブドウ	種子					○				○		
ヒシ	ヒメビシ	果実	○	○	○	○	○	○				○	○
ナス	ナス	種子	○							○	○		
ウリ	ウリ	種子				○	○						
キク	タカサブロウ	果実					○		○			○	
ミクリ	ミクリ	果実				○	○	○	○				
ヒルムシロ	ヒルムシロ	果実						○					
オモダカ	オモダカ	果実			○	○	○	○	○	○		○	○
イネ	イネ	穎	○			○					○		
カヤツリグサ	カヤツリグサ	果実				○							
カヤツリグサ	ホタルイ	果実						○					○
フユクサ	イボクサ	種子	○	○	○	○	○	○	○	○	○		

2．第121次調査植物種実分析結果

調査法

植物質が特に多く含まれる堀の堆積物について、植物遺体の分析をおこなった。調査区のL11—NGとL11—NHの2地点の6，7層から、地点及び層位によって植物の構成に違いが見られるかどうか確認するため約4ℓの土壌を採取し、1mmメッシュのフルイで水洗した残渣をバットに展開して葉、枝、種実類を拾い出した。

結果

木本　木本の出土部位は葉、枝、種実からなり、このうち種実類について同定を行い、10科15種を確認した。地点、層位に関係なく、最も多かったのはサクラ、センダンであった。ついで多かったのがニレ科のムクノキとエノキであった。エノキは果実の状態で出土しているので、鳥によって運ばれたのではなく、付近に生育していた母樹から直接落下したものとみることができる。その他に量的には少ないが、カジノキ、クワ、フジ、キイチゴ類、アカメガシワ、ニワトコ、ガマズミ、サルナシ、ブドウなどが出土した。これらの種実の内容を概観してまず気付くのは、樹木がすべて落葉広葉樹であることで、これは当調査地の景観を決定付けるものといえるだろう。さらに、サクラ、センダンといった花木が植栽されていたことも当調査地の特徴である。6層と7層の木本の構成要素には大差はないが、6層においてサクラとセンダンの出土量がNGとNHで逆の関係になっており、この結果は樹木の植栽地点を反映したもの、即ちNG付近にサクラが、NH付近にはセンダンが生育していたことを示すものである可能性も考えられるだろう。

草本　12科16種を確認した。確認した草本は殆どが水辺に生育する性質を持っている。このなかには特に植栽したと思われるものはない。

表2　第121次　種子調査結果

木本

科名	和名	出土部位	6層 L11—NG	6層 L11—NH	7層 L11—NG	7層 L11—NH
ニレ	ムクノキ	核	4	12	9	4
	エノキ	果実・核	6	2	34	3
クワ	クワ	核	—	—	1	4
	カジノキ	核	3	—	1	3
バラ	サクラ	核	38	13	69	79
	キイチゴ	核	8	—	—	4
マメ	フジ	果実	—	破片	破片	—
ミカン	サンショウ	種子	—	—	2	—
	イヌザンショウ	種子	4	4	1	—
センダン	センダン	核	28	108	37	20
トウダイグサ	アカメガシワ	種子	2	2	—	—
ブドウ	ブドウ	種子		1	—	
サルナシ	サルナシ	核	2	—	—	1
ミズキ	ニワトコ	核	1	—	—	—
	ガマズミ	核	—	1	—	—

数字は検出数を示す

草 本

科 名	和 名	出土部位	6層 L11—NG	6層 L11—NH	7層 L11—NG	7層 L11—NH
タデ	タデ	果実	○	○	○	○
キンポウゲ	タガラシ	果実		○	○	
	キツネノボタン	果実		○		
バラ	ヘビイチゴ?	核	○		○	○
カタバミ	カタバミ	種子	○			○
ブドウ	ノブドウ	種子				
セリ	セリ	果実	○			
	チドメグサ	果実	○			
シソ	シソ	果実	○	○		
ウリ	ウリ	種子	○			
	スズメウリ	種子				
ヒルムシロ	ヒルムシロ	果実				○
オモダカ	オモダカ	果実	○			
	ヘラオモダカ	果実				○
カヤツリグサ	カヤツリグサ	果実				
ツユクサ	イボクサ	種子	○			

○は検出を示す

表3 第117次・第119次調査出土植物一覧表

学名は原色日本植物図鑑(保育社)による。

木本

番号	和 名	科 名	学 名
1	アカマツ	マツ	Pinus densiflora Sieb. et Zucc.
2	ムクノキ	ニレ	Aphananthe aspera Planch.
3	エノキ	ニレ	Celtis sinensis Persoon.
4	クワ	クワ	Morus bombycis Koidz.
5	カジノキ	クワ	Broussonetia papyrifera Vent.
6	キイチゴ	バラ	Rubus sp.
7	ウメ	バラ	Prunus Mume Sieb. et Zucc.
8	サクラ	バラ	Prunus sp.
9	フジ	マメ	Wistaria brachybotrys Sieb. et Zucc.
10	サンショウ	ミカン	Xanthoxylum piperitum DC.
11	イヌザンショウ	ミカン	Fagara mantchurica Honda
12	センダン	センダン	Meria Azedarach L.
13	トウダイグサ	アカメガシワ	Mallotus japonicus Muell. Arg.
14	ブドウ	ブドウ	Vitis sp.
15	サルナシ	サルナシ	Actinidia arguta Planch.
16	ニワトコ	スイカズラ	Sambucus Sieboldiana Blume
17	ガマズミ	スイカズラ	Viburnum sp.

草本

番号	和 名	科 名	学 名
1	ギシギシ	タデ	Rumex sp.
2	タデ	タデ	Polygonum sp.
3	タガラシ	キンポウゲ	Ranunculus sceleratus L.
4	キツネノボタン?	キンポウゲ	Ranunculus glaber Makino?
5	ヘビイチゴ?	バラ	Duchesnea sp?
6	カタバミ	カタバミ	Oxalis corniculata L.
7	ノブドウ	ブドウ	Ampelopsis brevipeduncula (Maxim.) T.
8	ヒメビシ	ヒシ	Trapa incisa Sieb. et Zucc.
9	セリ	セリ	Oenanthe javanica (Blume) DC.
10	チドメグサ	セリ	Hydrocotyle sibthorpioides Lam.
11	シソ	シソ	Perilla frutescens Britton var. acuta Kudo
12	ナス	ナス	Solanum melongena L.
13	ウリ	ウリ	Cucumis melo L.
14	スズメウリ	ウリ	Melothria japonica (Thunb.) Maxim.
15	タカサブロウ	キク	Ecripta prostrata L.
16	ミクリ	ミクリ	Sparganium sparganium sp.
17	ヒルムシロ	ヒルムシロ	Potamogeton sp.
18	オモダカ	オモダカ	Sagittaria trifolia L.
19	ヘラオモダカ	オモダカ	Alisma canaliculatum A.
20	イネ	イネ	Oryza sativa L.
21	カヤツリグサ	カヤツリグサ	Syperus sp.
22	ホタルイ	カヤツリグサ	Scirpus sp.
23	イボクサ	ツユクサ	Murdannia Keisak

Ⅵ　鳥羽離宮跡出土の和琴についての観察

出土品は、通弦孔の位置関係と長方形共鳴胴の形状から、長胴ツィター属弦楽器すなわち箏琴類の槽部と断定できる。出土品から観察した構造上の特徴を次に挙げる。なお、槽の頭尾の特定にあたっては、尾部に装飾性が高いことなど箏琴類の構造的共通性から総合判断し、出土品に独特の柏形切込みのある側をその尾部とした。

① 一本檜材をくりぬいた舟形槽である。

② 頭部槽幅が尾部槽幅より狭い。

③ 槽表の頭尾方向に微少なＳ字状反りを認める。

④ 小口側から見て槽表がやや中高である。

⑤ 小口側からみて左右の磯面が末広がりである。

⑥ 頭尾にそれぞれ対応した６つの通弦孔を持つ(内、数孔に腐蝕残欠あり)。

⑦ 尾部通弦孔径が頭部通弦孔より大きい。

⑧ 頭部通弦孔部には乗弦横木を置いた痕跡があり、尾部通弦孔にはその痕跡がない。

⑨ 槽端から通弦孔までの距離は尾部の方が広い。

⑩ 通弦孔の間隔は６弦がほぼ平行に近く張られたことを示す。

⑪ 槽尾と尾部通弦孔との間に２孔を持つ(尾部通弦孔と同径)。

⑫ 磯の裏面に裏板(欠損)あるいは竜骨板を固定したと思われる凹状刳込みと釘痕がある。

⑬ 頭部小口部が槽と一材である。(尾部小口板は欠損)。

⑭ 槽尾に柏形切込みがある。

⑮ 槽表全面に６つの円状装飾痕(釘痕あり)がある。

⑯ 槽頭部の裏面に朱色塗装痕がある。

以上の諸点のうち、　①②④⑥は正倉院遺物の和琴から現制和琴へ継承する基本的な制であることから、出土品は和琴の槽部と判断できる。さらに、⑦⑧からは葦津緒の使用が想定できる。このことは、天平期に確立したとされる「六弦・有槽・葦津緒使用」の制を備えたものであることを示す。

一方、③は正倉院和琴に同例がなく、後世和琴の制には一致する特徴であること、⑤⑫は正倉院和琴に例を見るが、後世和琴には継承しない特徴であること、⑨⑩は箏に近い特徴であること、の３点から見て、出土和琴の推定年代は箏と和琴の制が分化し確立する平

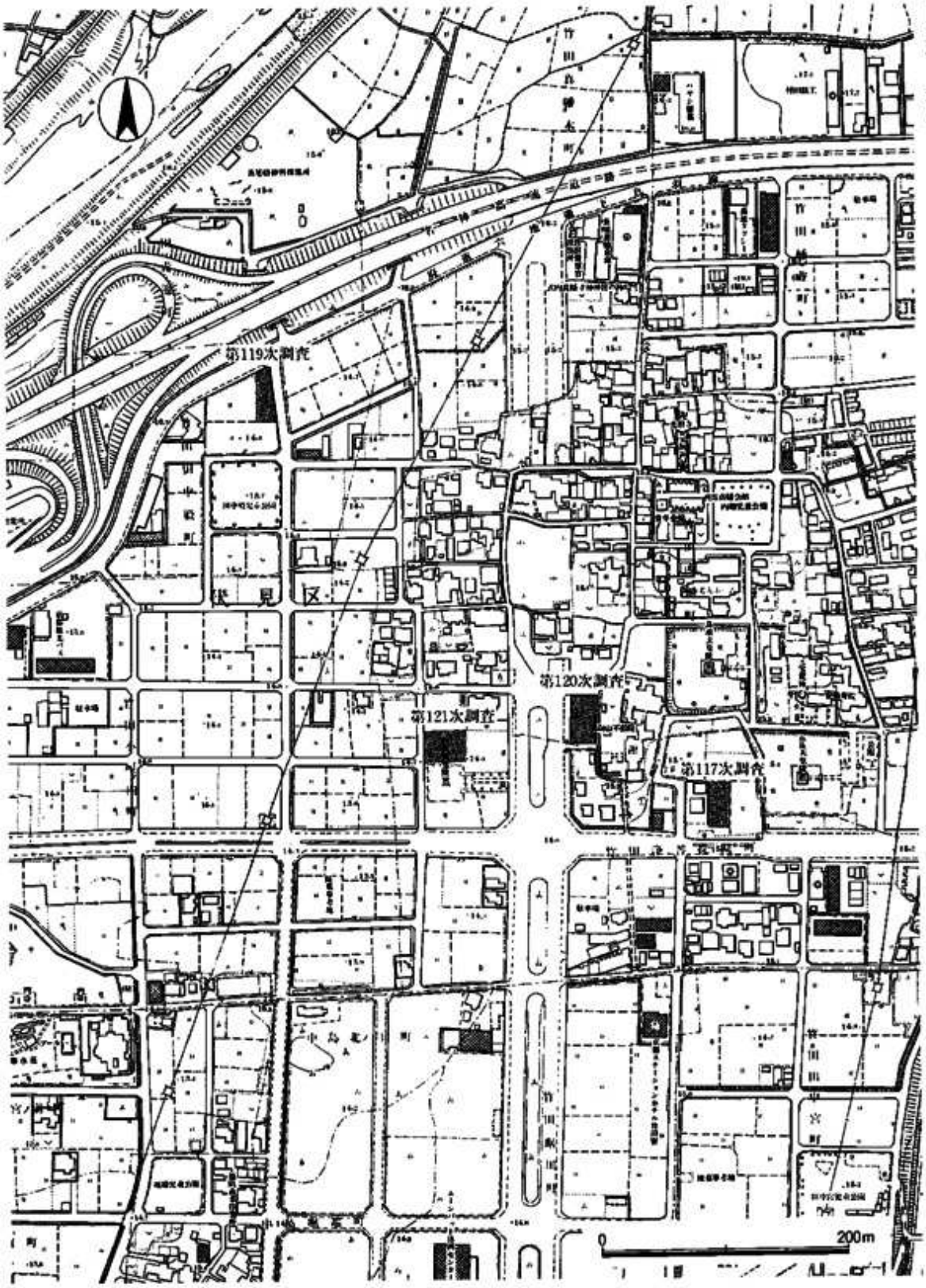
安末期以前と考えられる。

この他の装飾的特徴⑪⑭⑮⑯および構造上の特徴⑬は、現存の他の遺物に同種例を見ないことから、和琴の古制から現制への正統的な系統からは逸脱した要素と考えられる。このことは、雅楽以外の領域、すなわち雅楽ほどに制の継承に厳格でない領域で和琴が多用されたと考えられる平安中期に、その年代を類推することにひとつの妥当性を与えるものである。

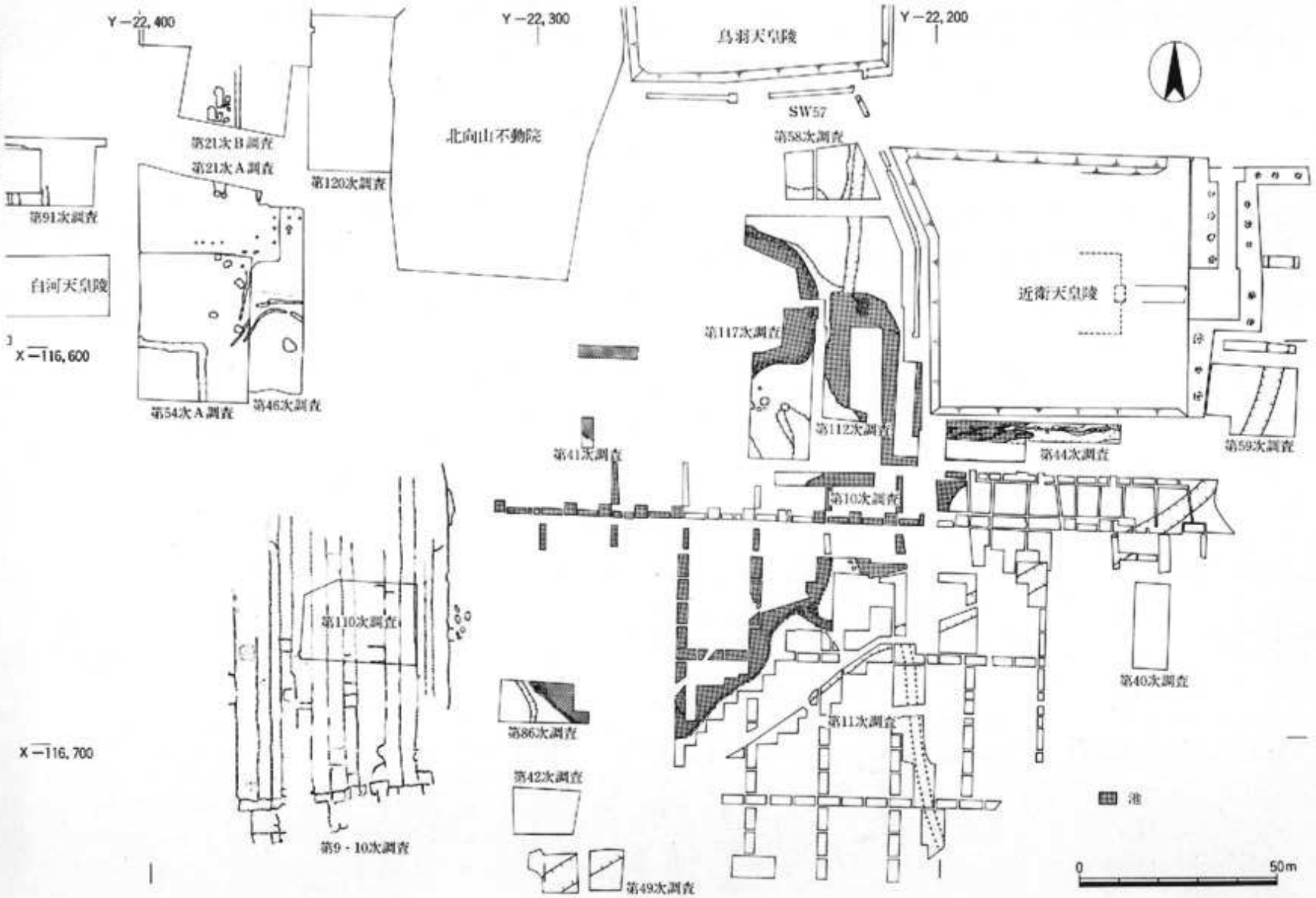
なお、頭部小口部の腐蝕と尾部小口板の欠損により、演奏法と葦津緒の繋縛方法は不明である。

(西岡信雄)

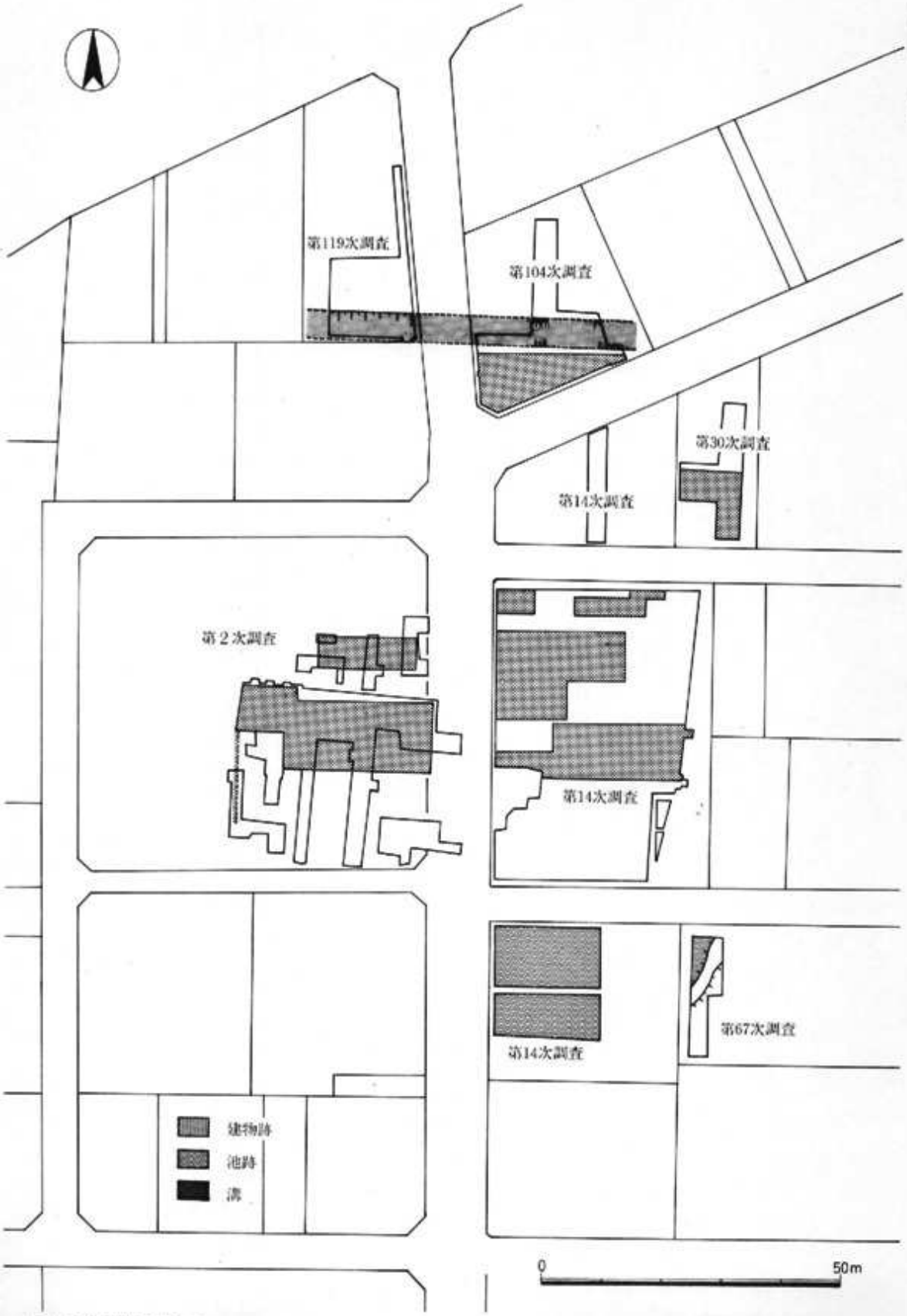
図　版



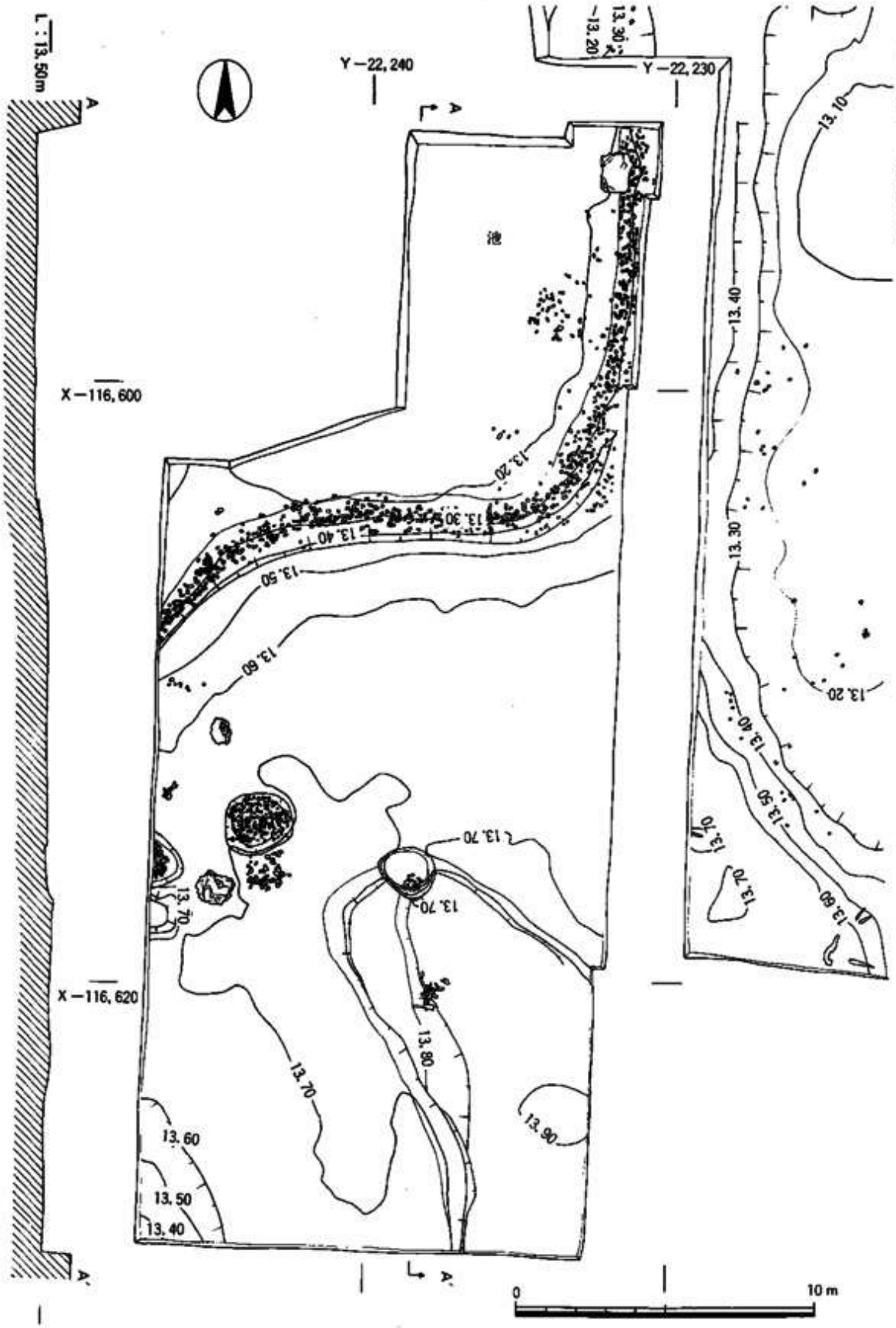
調査位置図


東殿跡遺構配置図
Y－22,400
Y－22,300
Y－22,200
鳥羽天皇陵
SW57
第58次調査
北向山不動院
第21次B調査
第21次A調査
第120次調査
第91次調査
白河天皇陵
X－116,600
第54次A調査
第46次調査
第117次調査
近衛天皇陵
第112次調査
第44次調査
第59次調査
第41次調査
第10次調査
第110次調査
第40次調査
第86次調査
第11次調査
X－116,700
第42次調査
第9・10次調査
第49次調査
池
0
50m

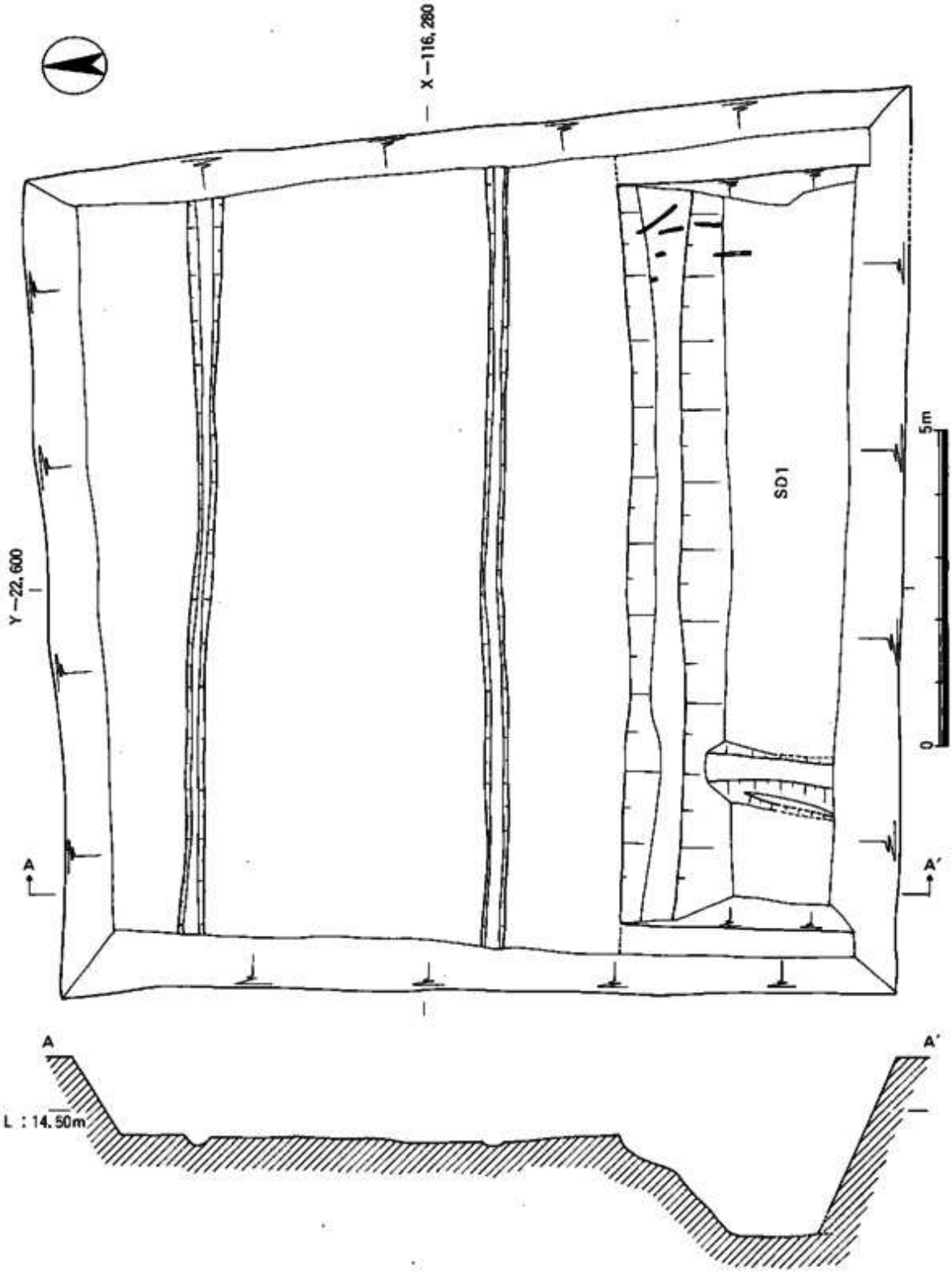
図第11　遺構


第119次調査
第104次調査
第30次調査
第14次調査
第２次調査
第14次調査
第14次調査
第67次調査
建物跡
池跡
溝
0
50m

田中殿跡遺構配置図

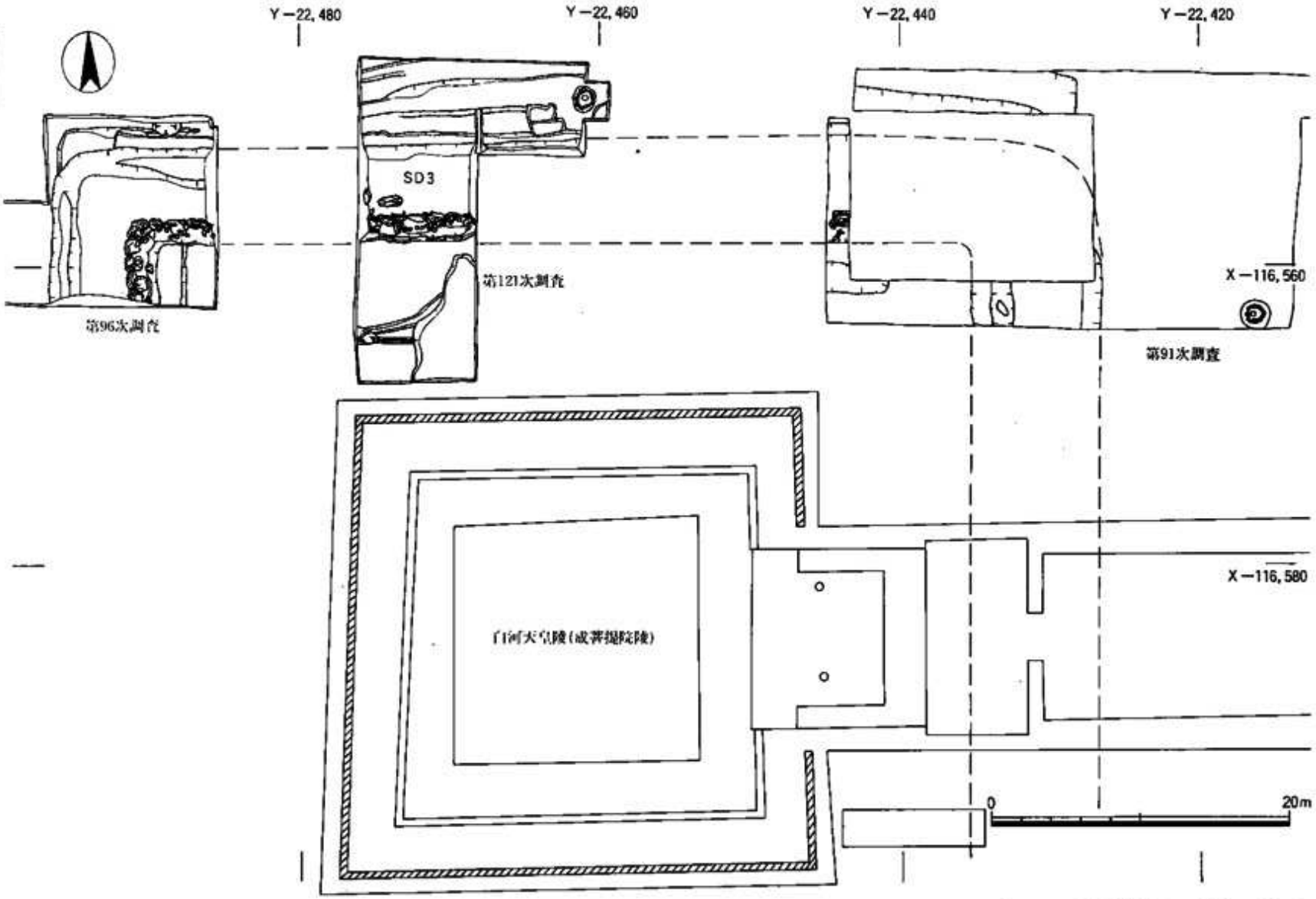

L：13.50m
A
A'
Y－22,240
Y－22,230
X－116,600
X－116,620
池
13.10
13.20
13.30
13.40
13.50
13.60
13.70
13.80
13.90
0
10m

遺構実測図

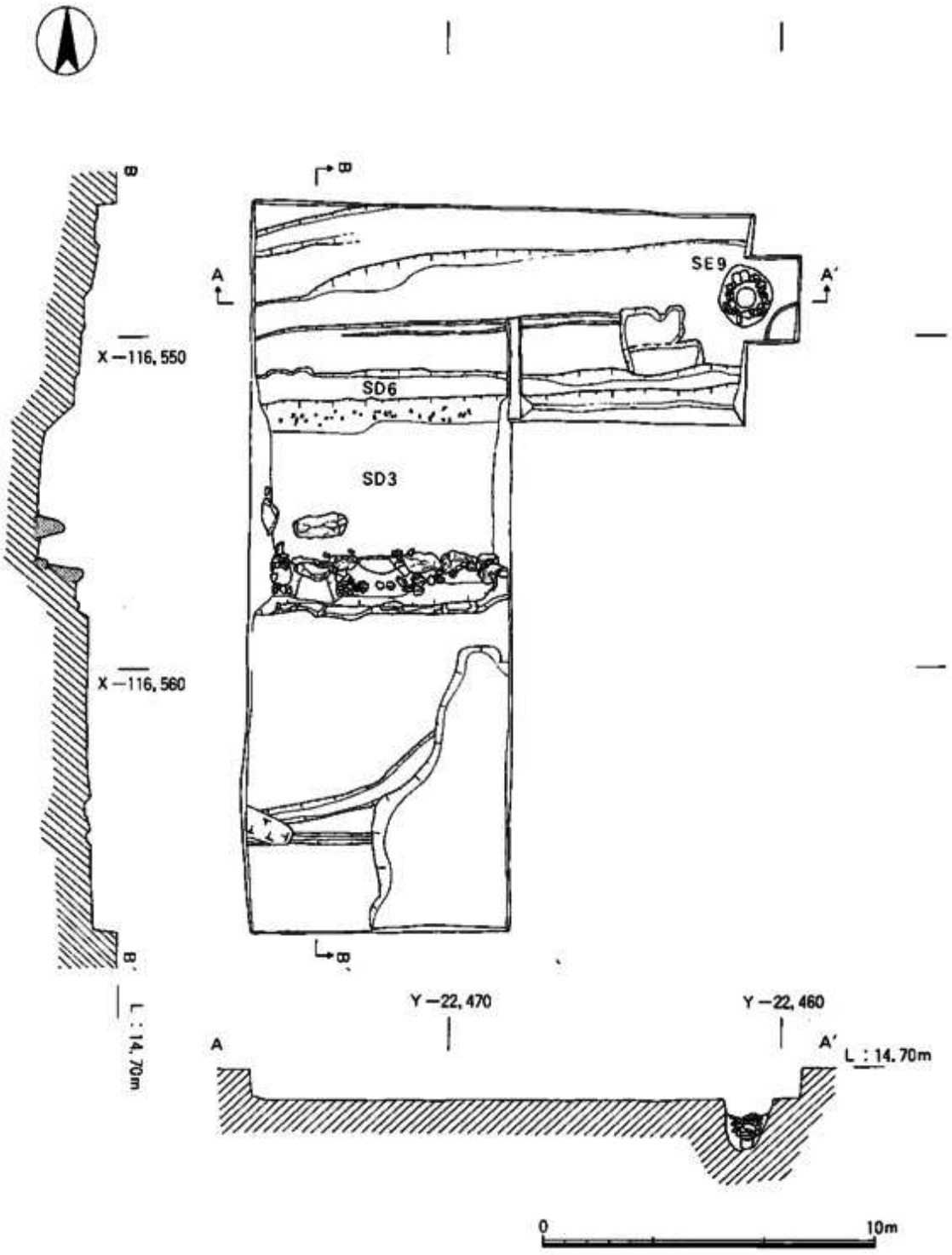


遺構実測図

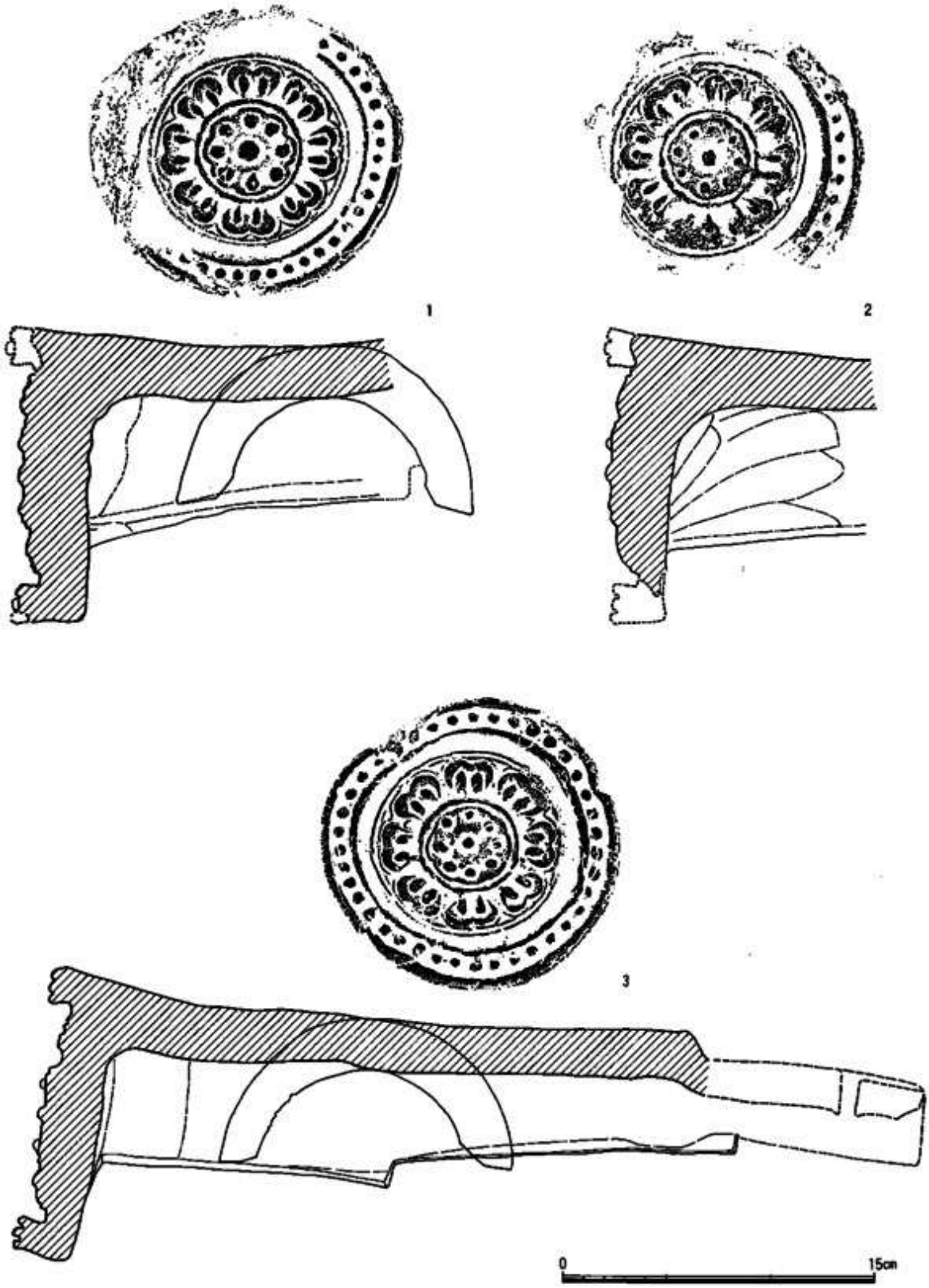
遺構配置図



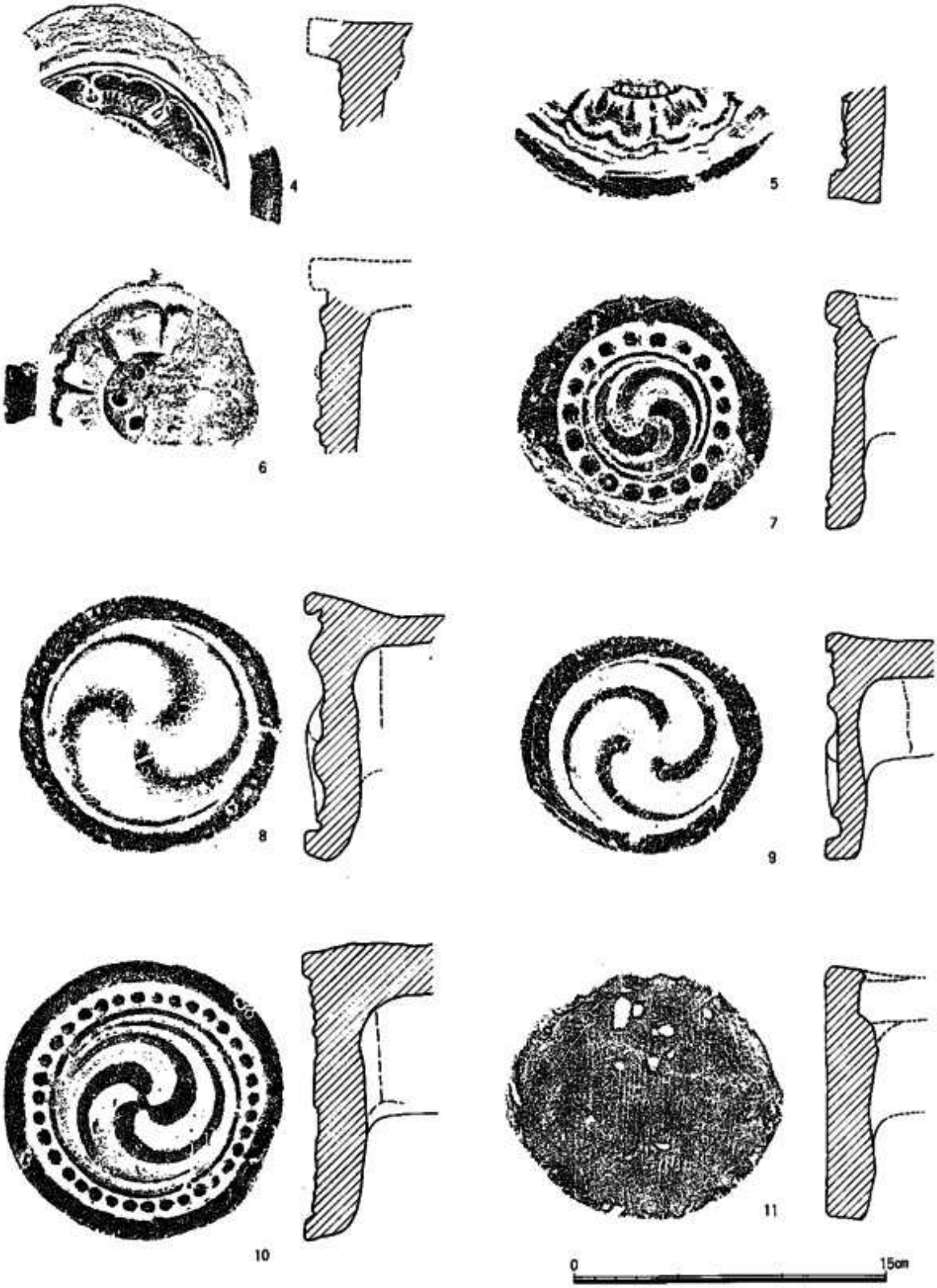
図版4　発掘　遺構配置図


B
B
A
A'
SE9
X −116,550
SD6
SD3
X −116,560
B'
B'
L：14.70m
Y −22,470
Y −22,460
A
A'
L：14.70m
0
10m

遺構実測図

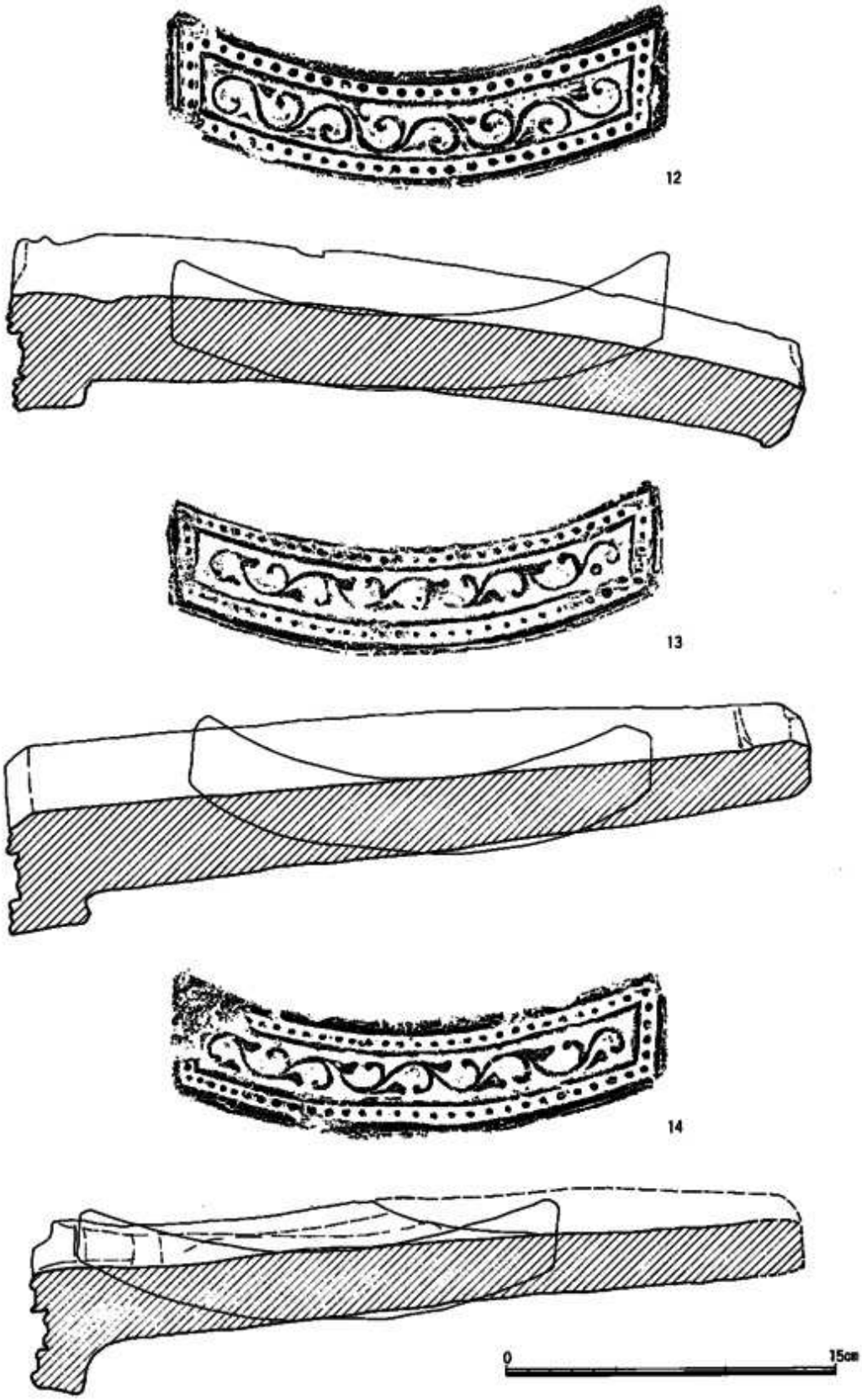


軒丸瓦拓影・実測図

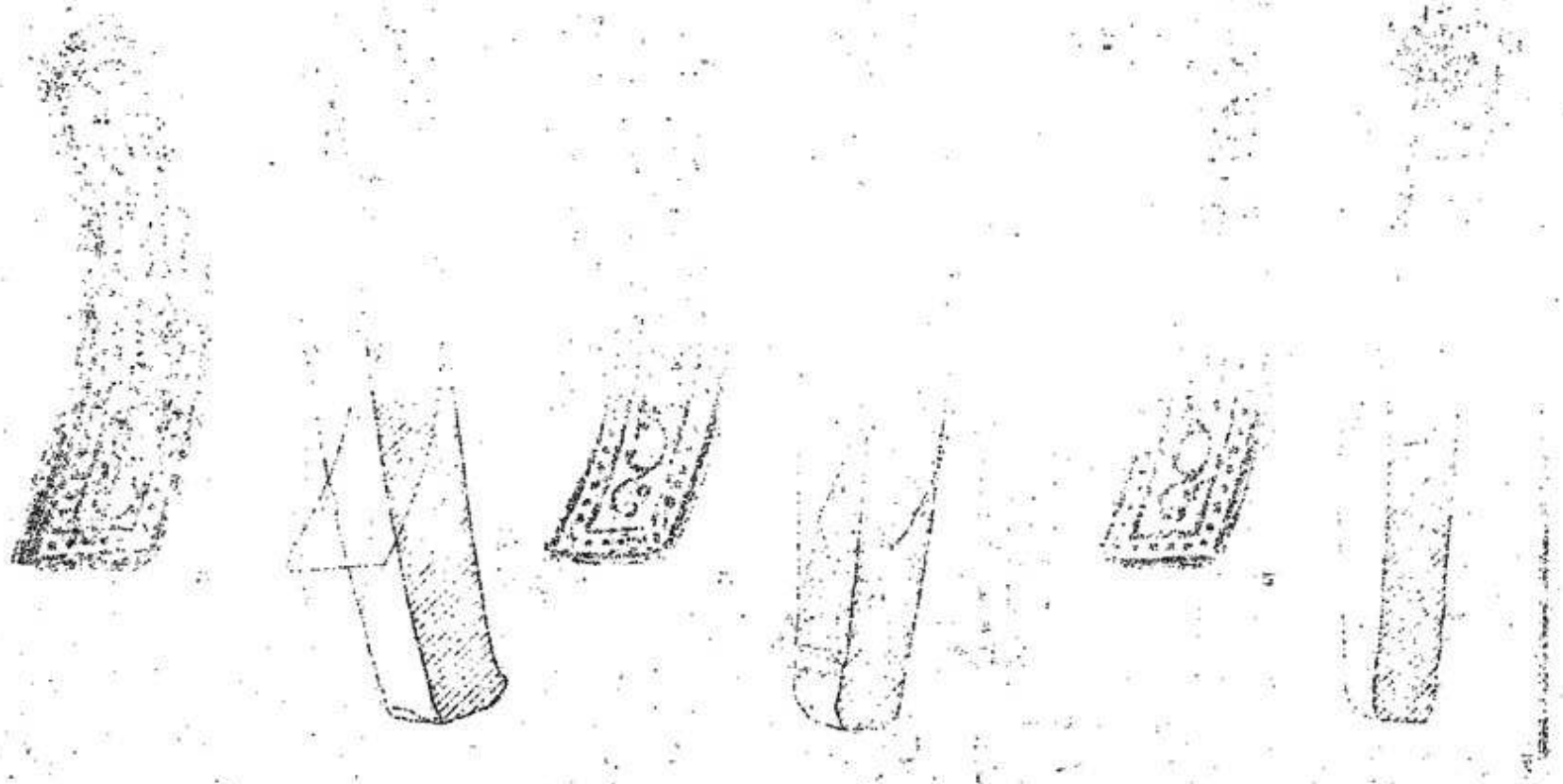


軒丸瓦拓影・実測図

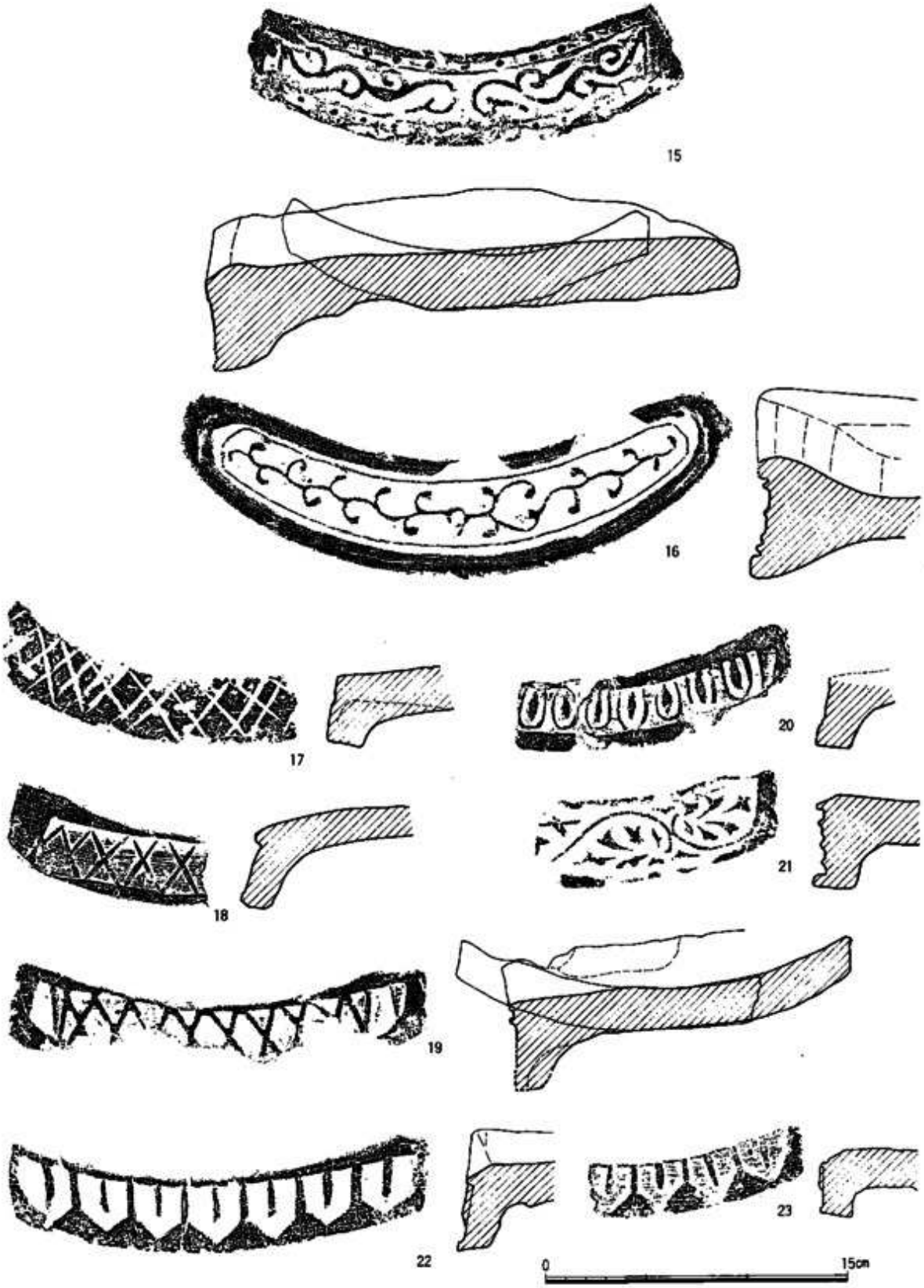
図版十一　彩陶　深田北遺跡



軒平瓦拓影・実測図

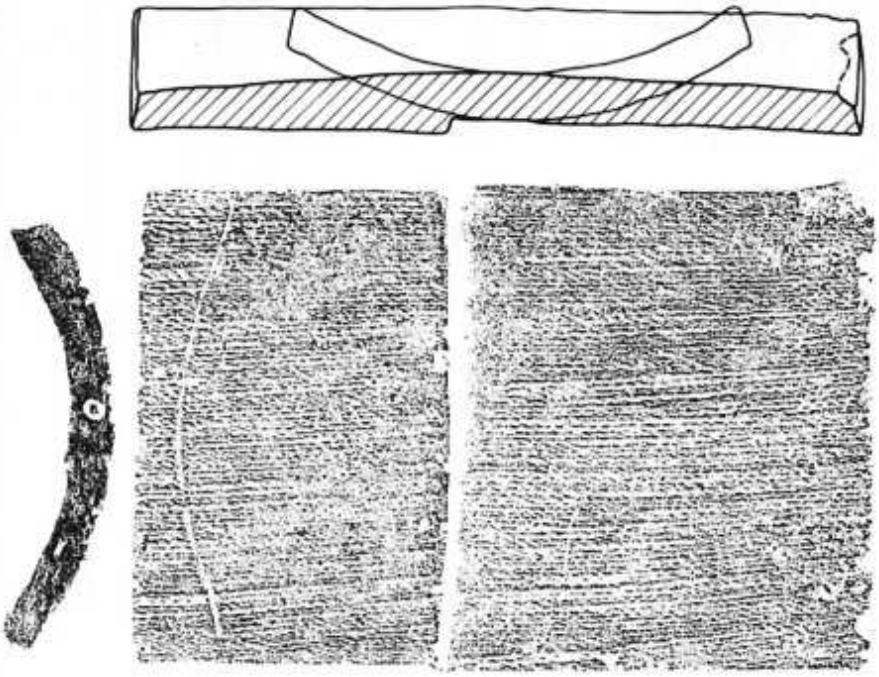


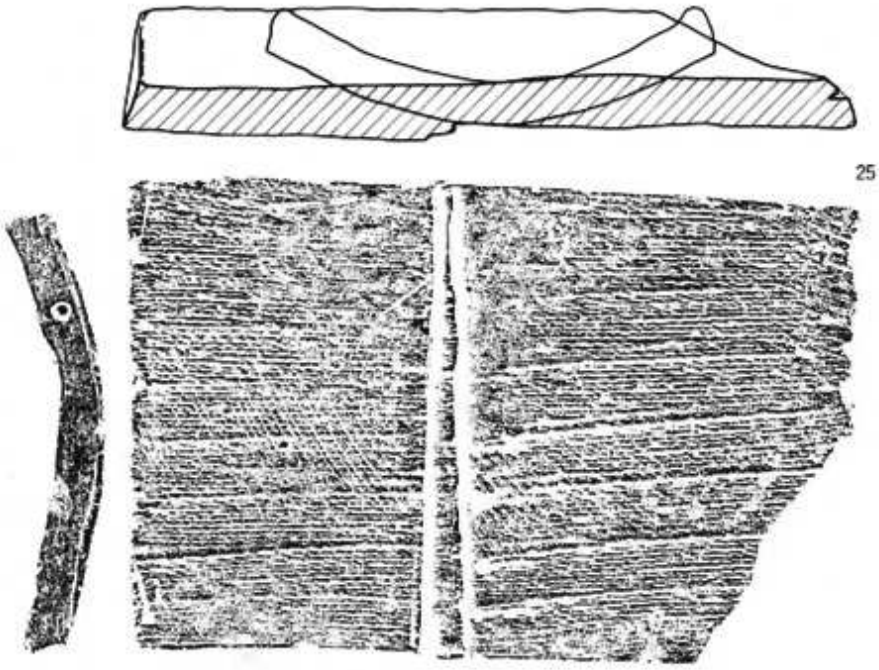
図版10 山王 新田長窯址



軒平瓦拓影・実測図

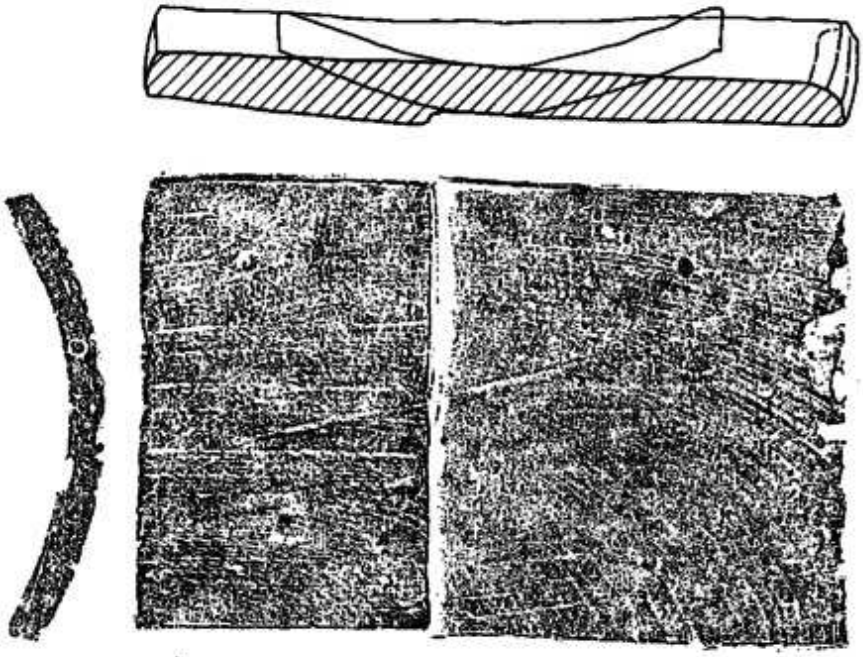
圖版一一　鼎銘　赤圭大明銘

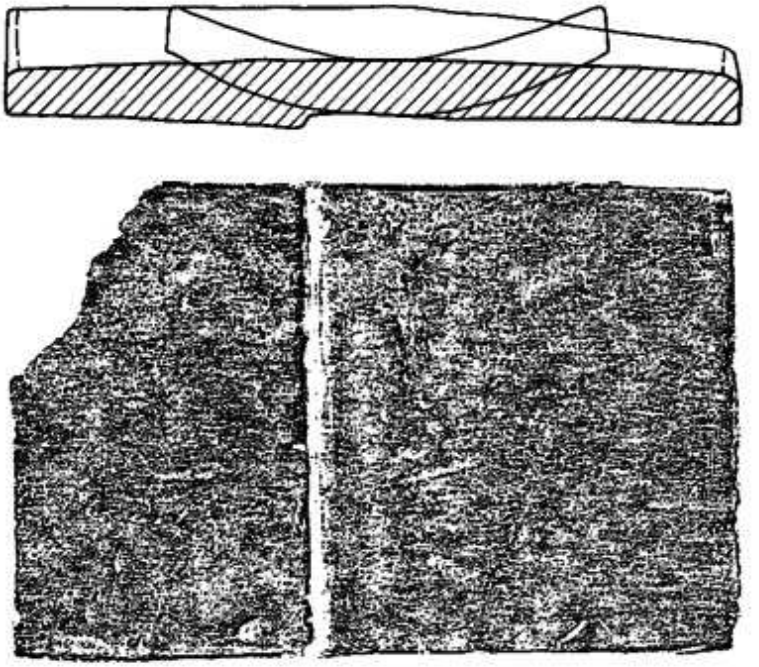




0　15cm

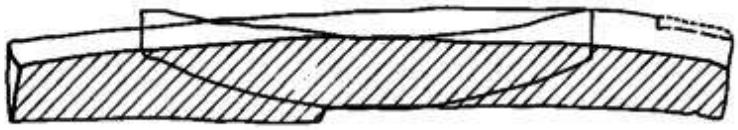
平瓦拓影・実測図



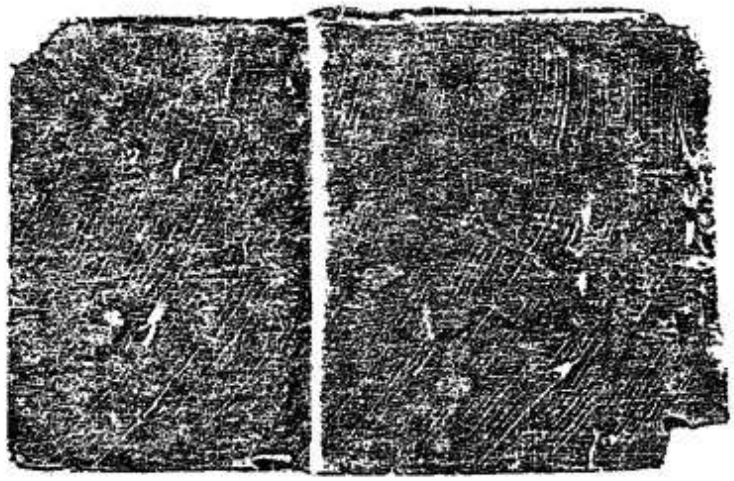


0　15cm

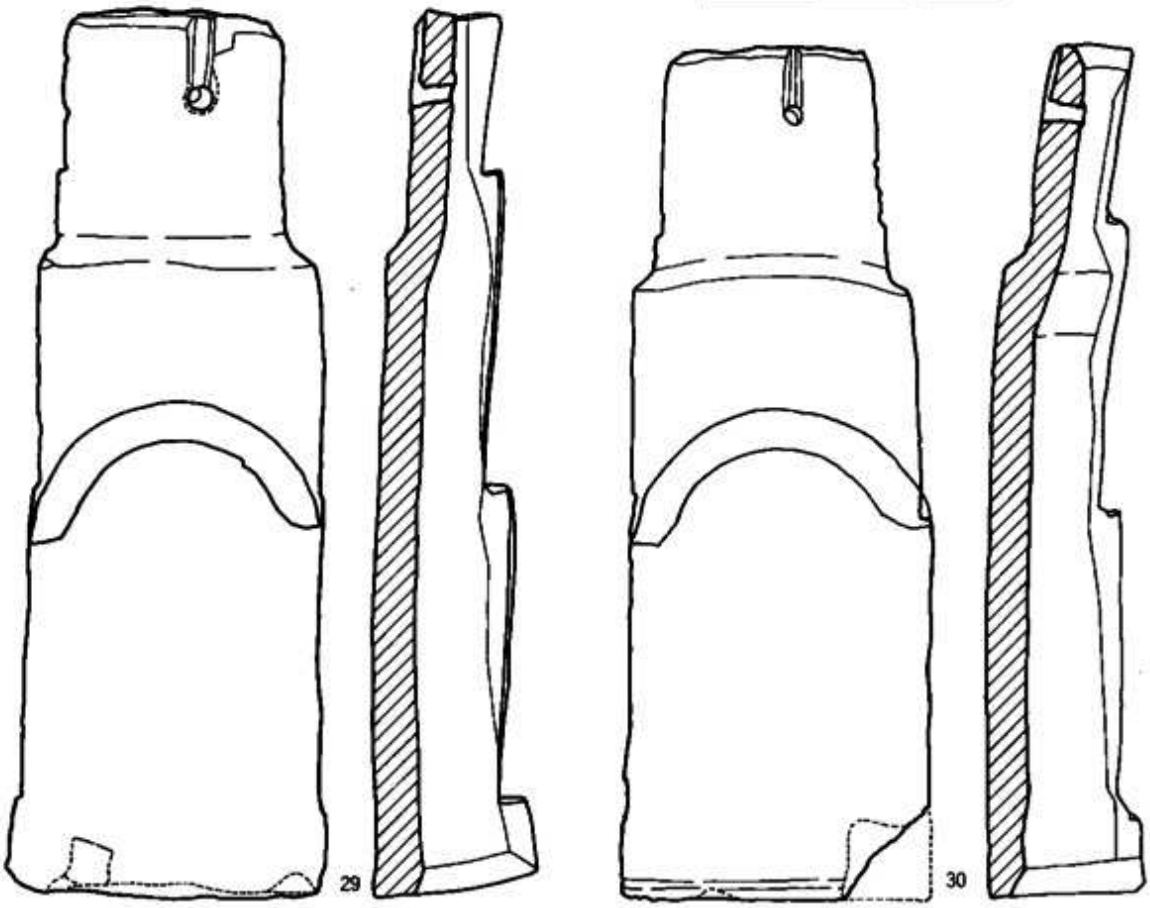
平瓦拓影・実測図



28

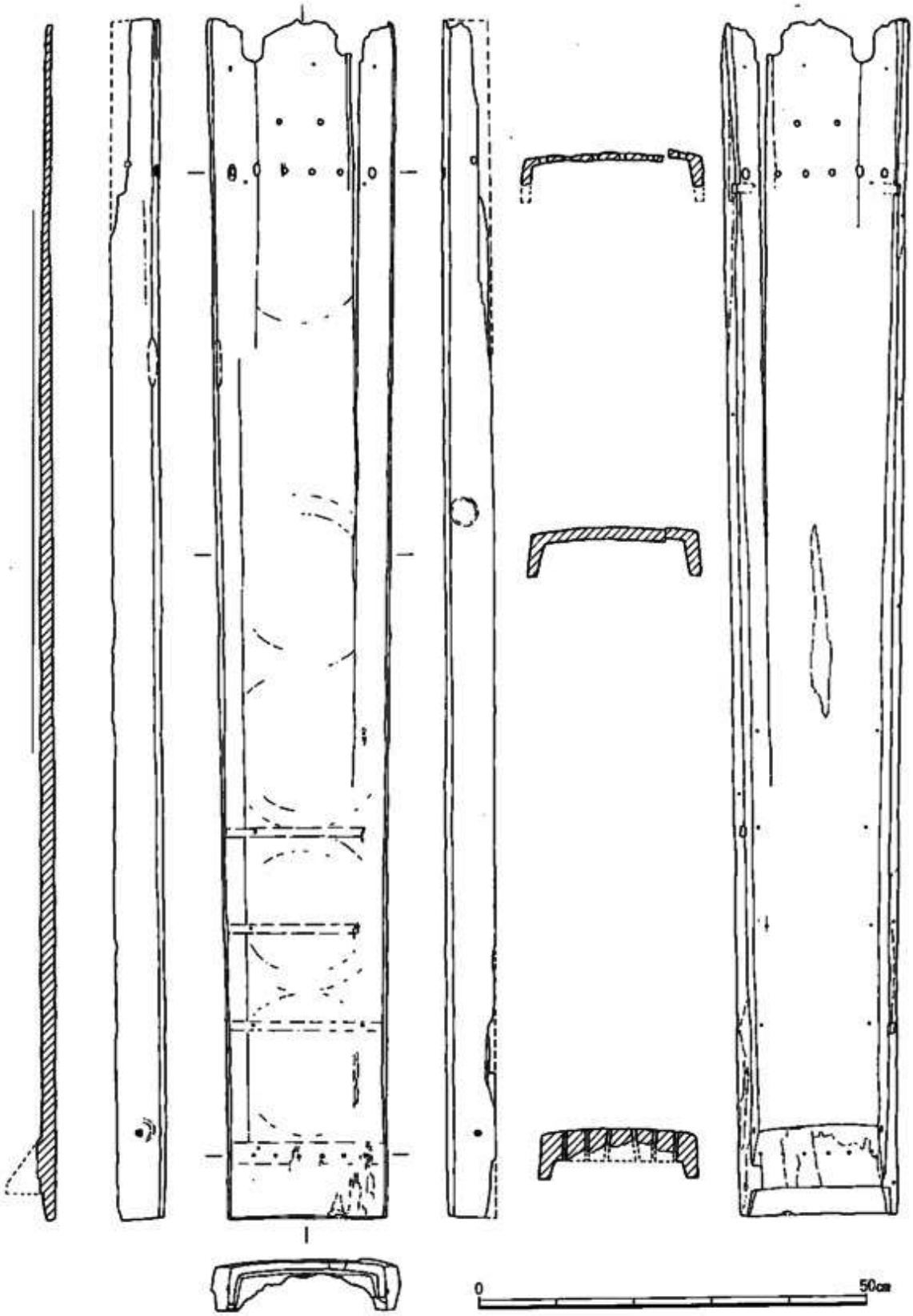


0　15cm

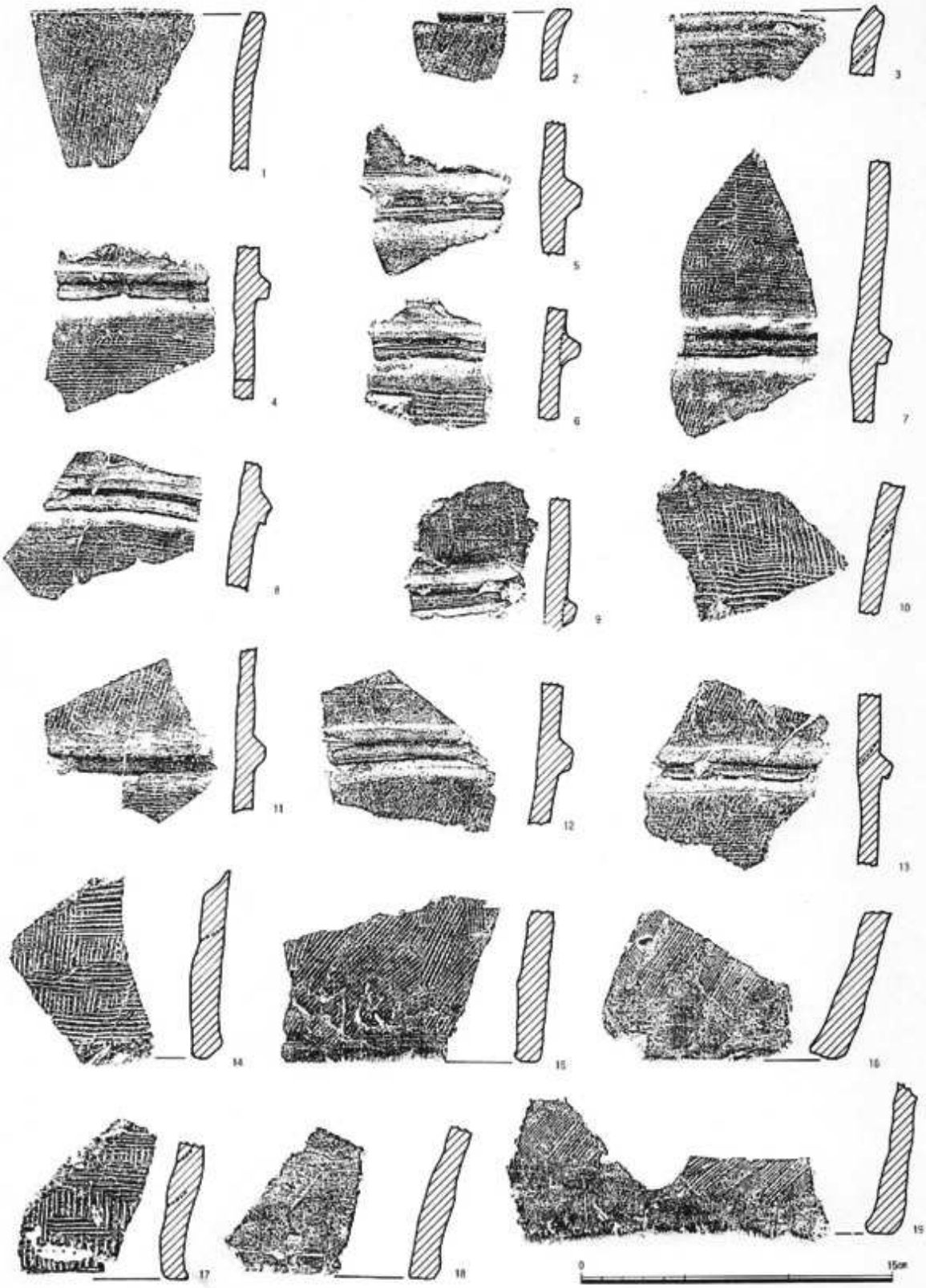


29　30

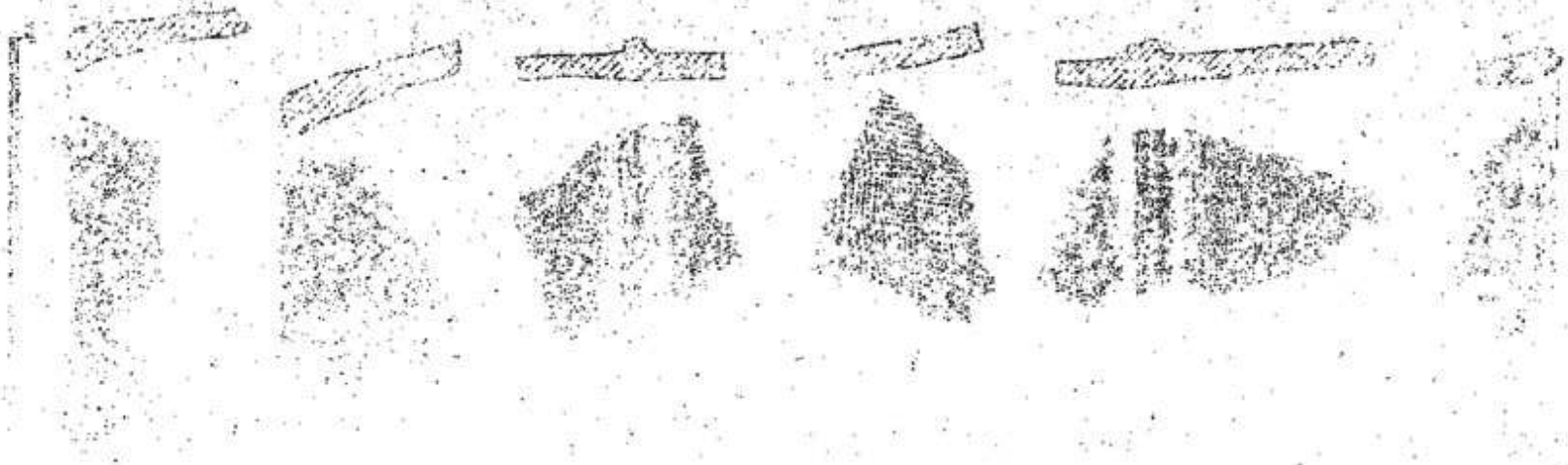
丸瓦平瓦拓影・実測図



ＳＤ３出土和琴実測図

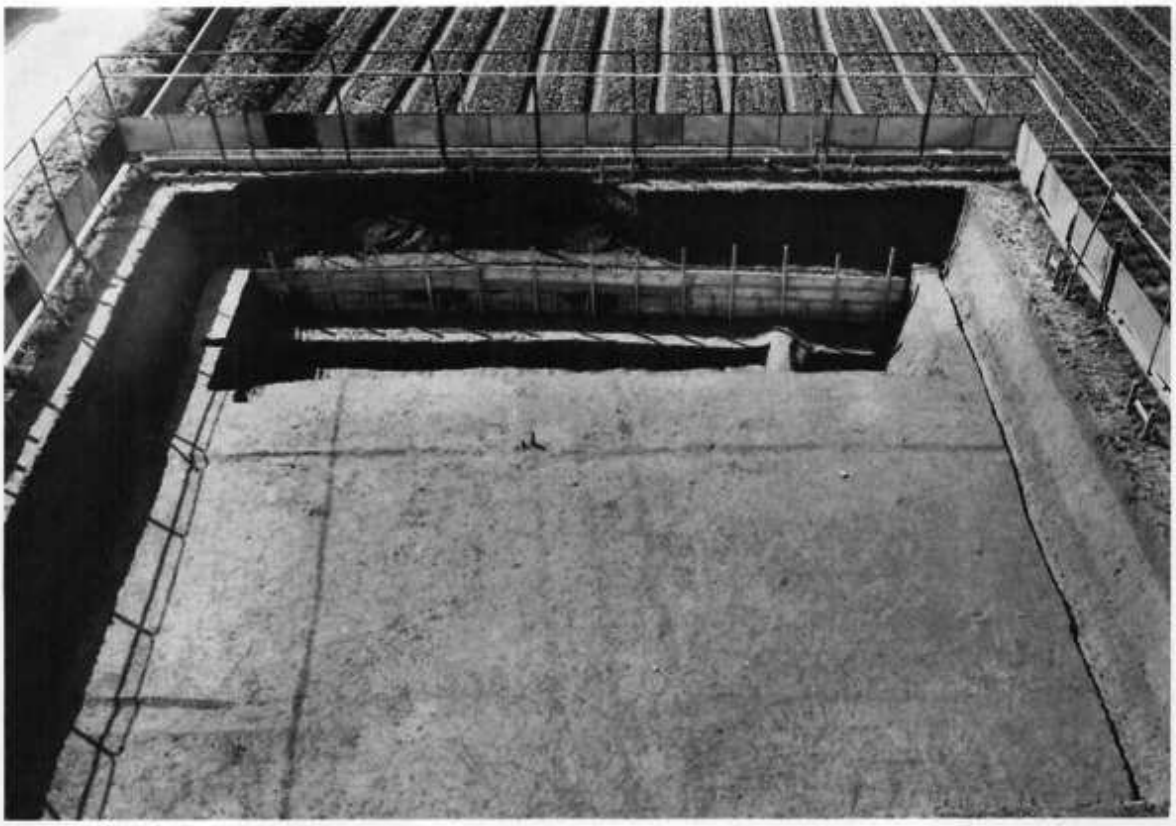


埴輪拓影・実測図



1　調査区全景（北東から）

2　洲浜（南西から）



1　調査区全景（北から）

2　ＳＤ１（東から）

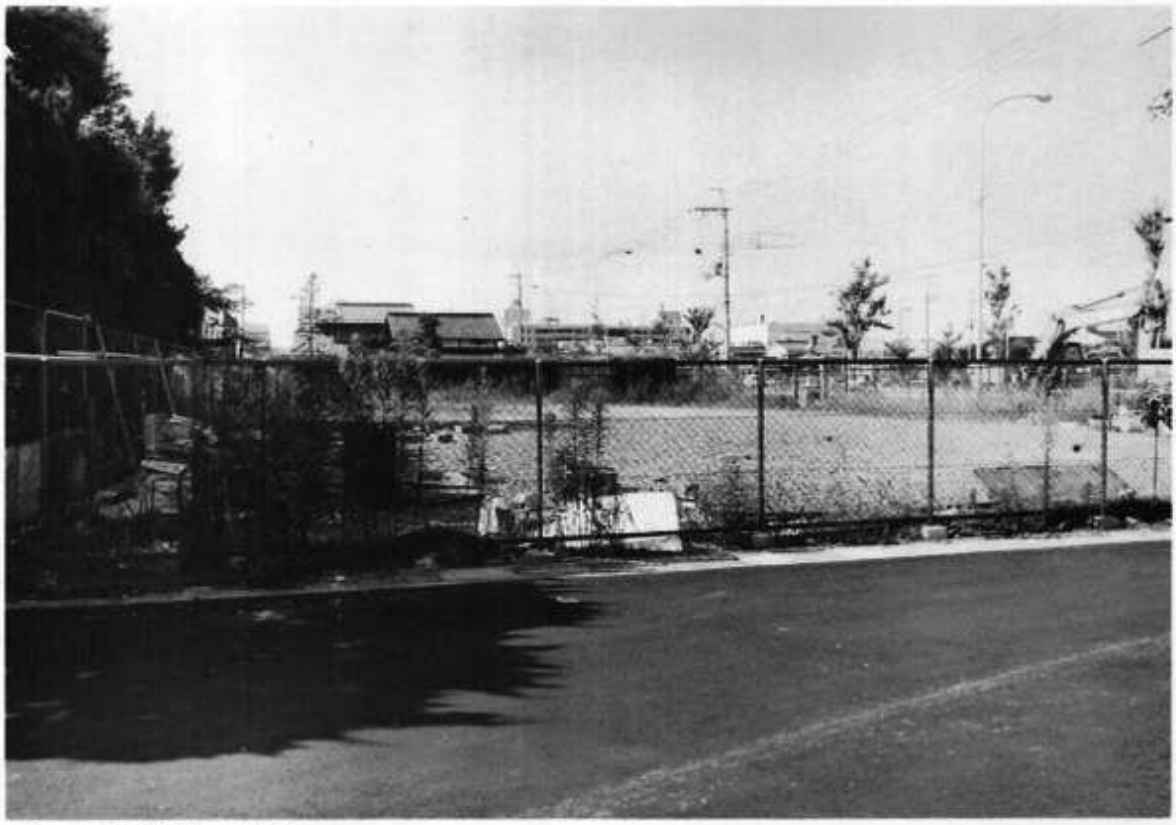
3　ＳＤ１（北東から）

1　杭の出土状況

2　木製品出土状況

3　馬の頭骨出土状況

4　馬の下顎骨出土状況



1　調査前全景（北から）

2　調査区全景（北西から）

1　調査区全景（北西から）

2　石垣完掘状況（北東から）

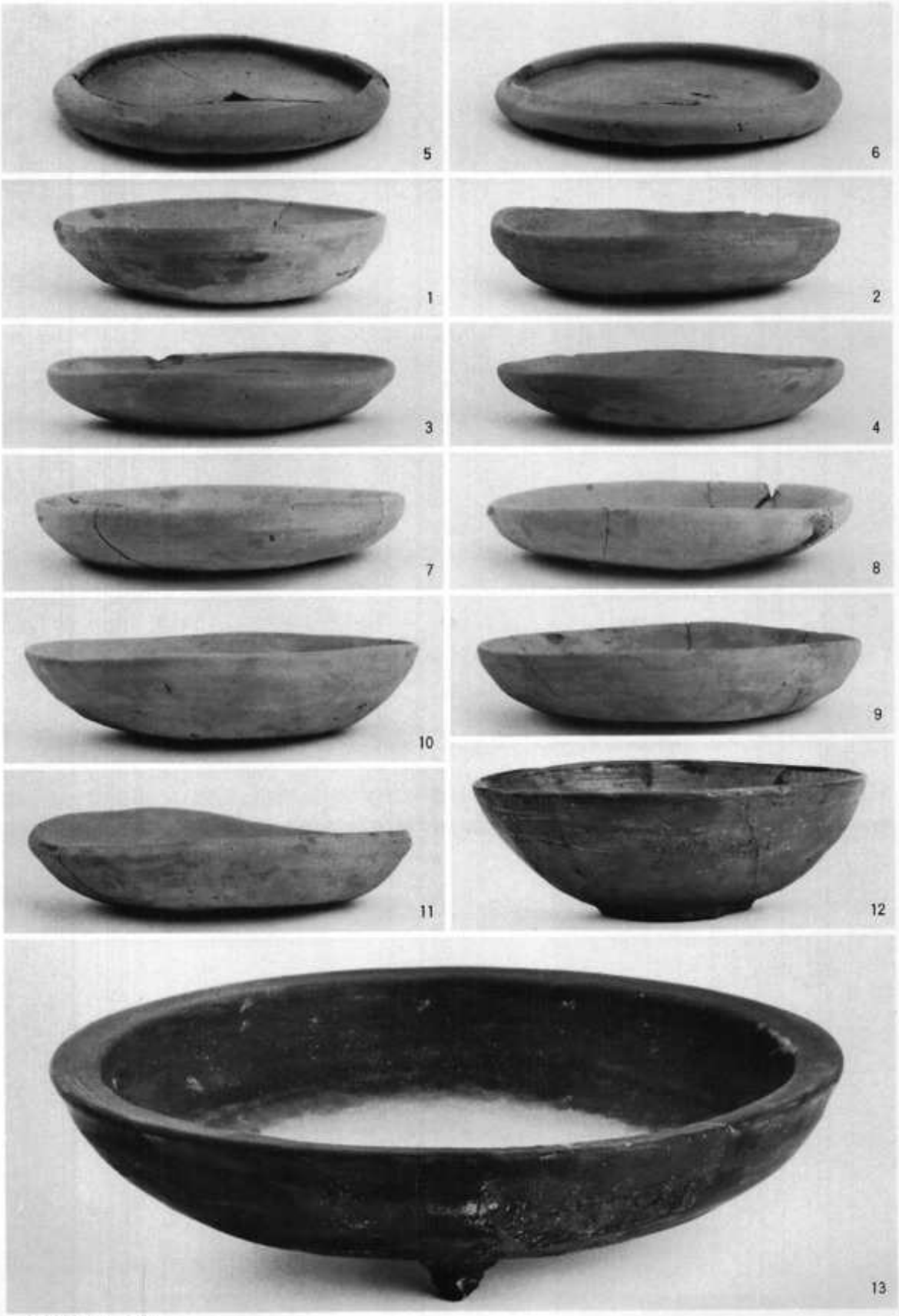
1　木製品出土状況（北東から）

2　石垣の抜き取り溝（東から）

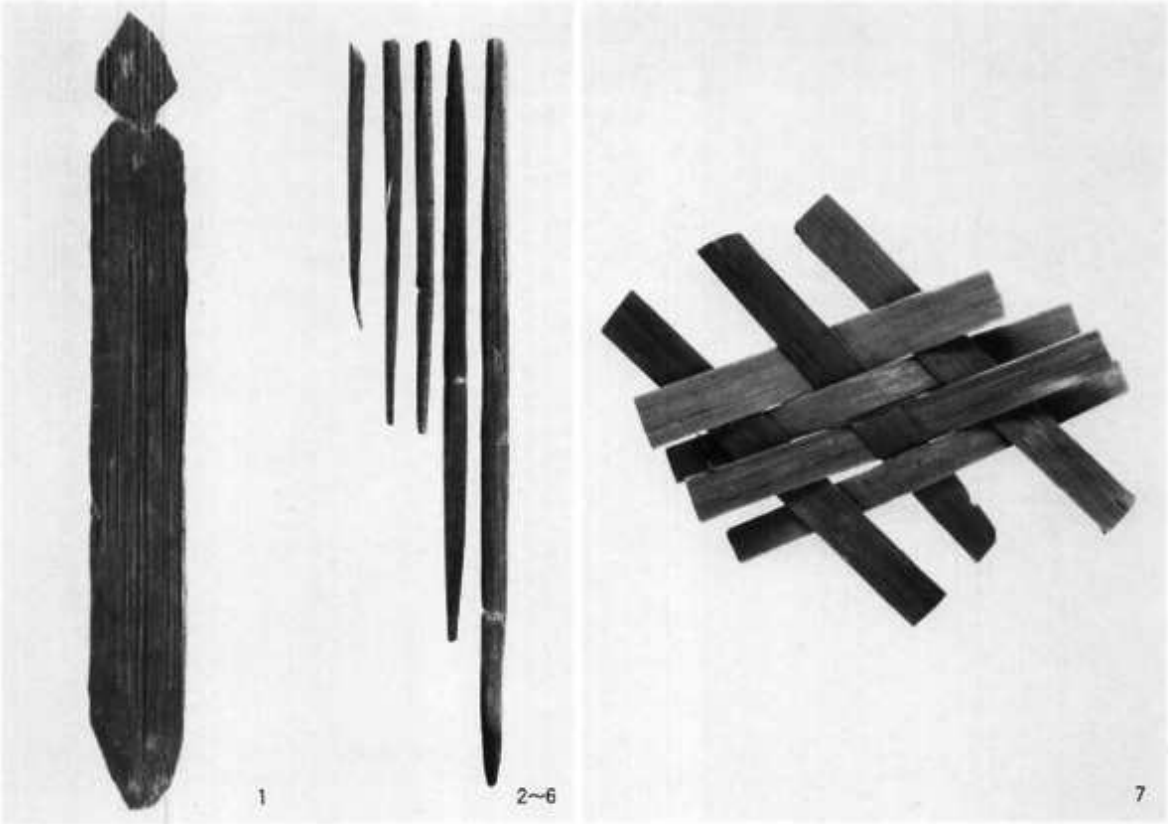
3　瓦出土状況（北から）

1　ＳＥ９完掘状況（東から）

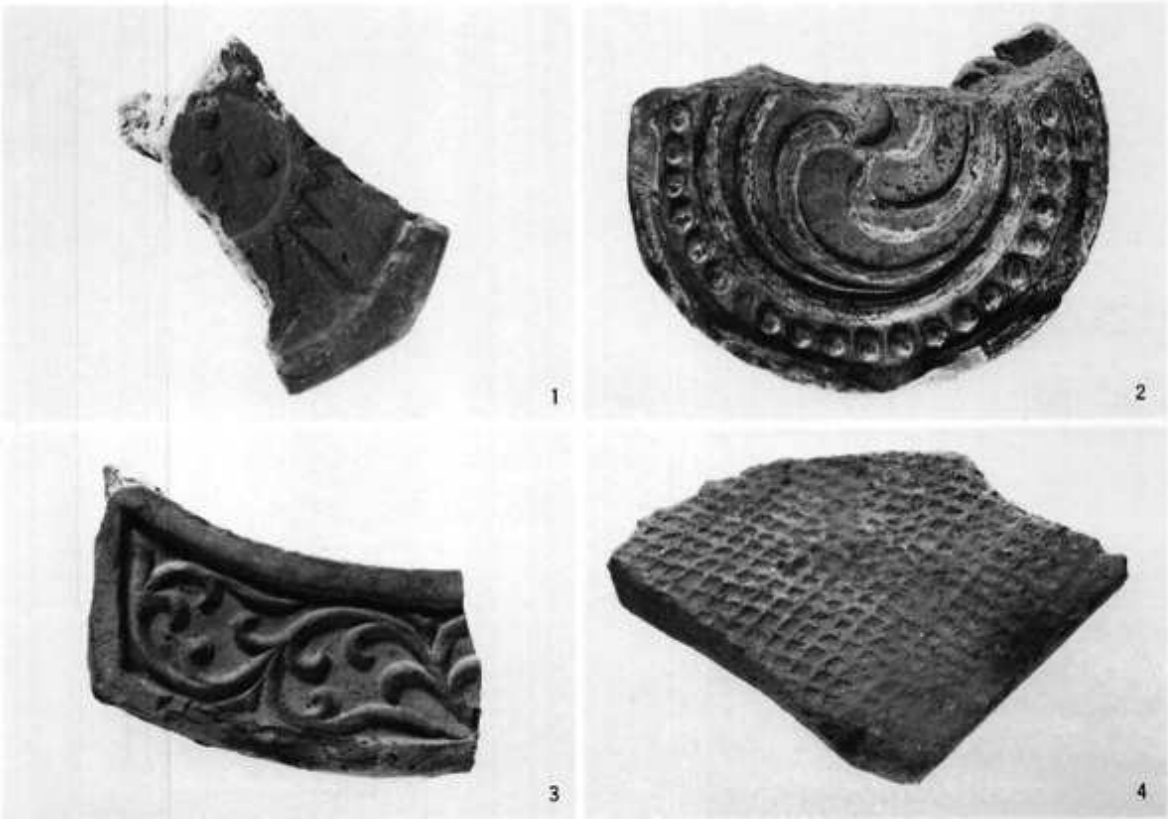
2　ＳＥ９断割状況（西から）



ＳＤ１出土土器



1　ＳＤ１出土木製品



2　ＳＤ１出土瓦

3

1

2

7

10

11

軒丸瓦

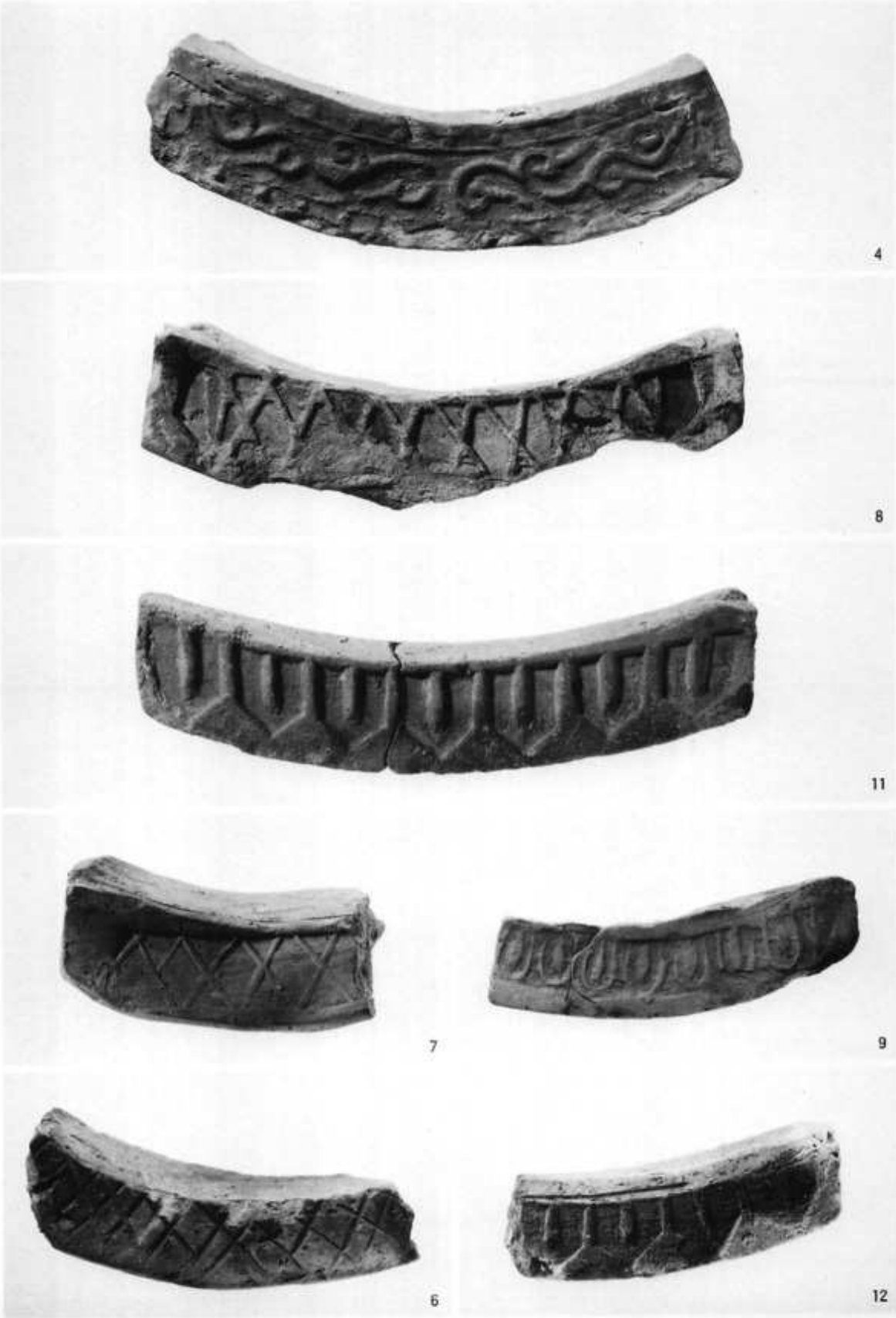
1

2

3

5

軒平瓦

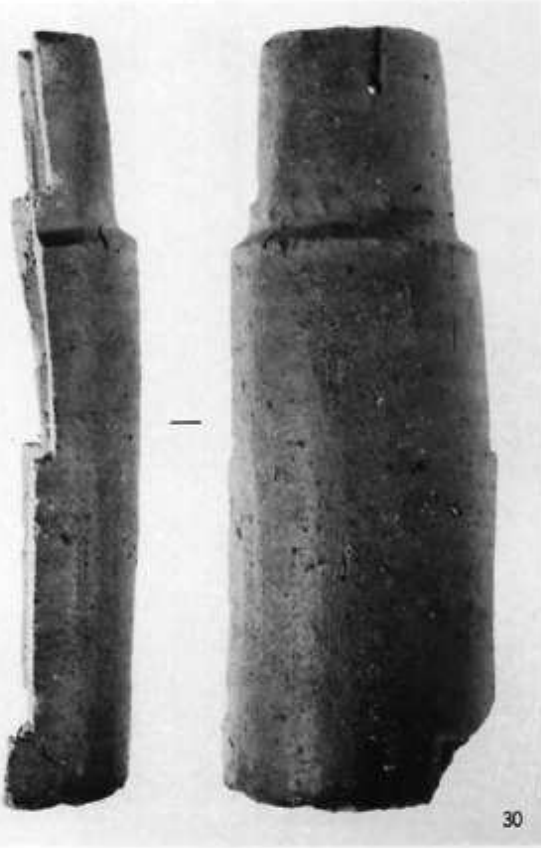


軒平瓦

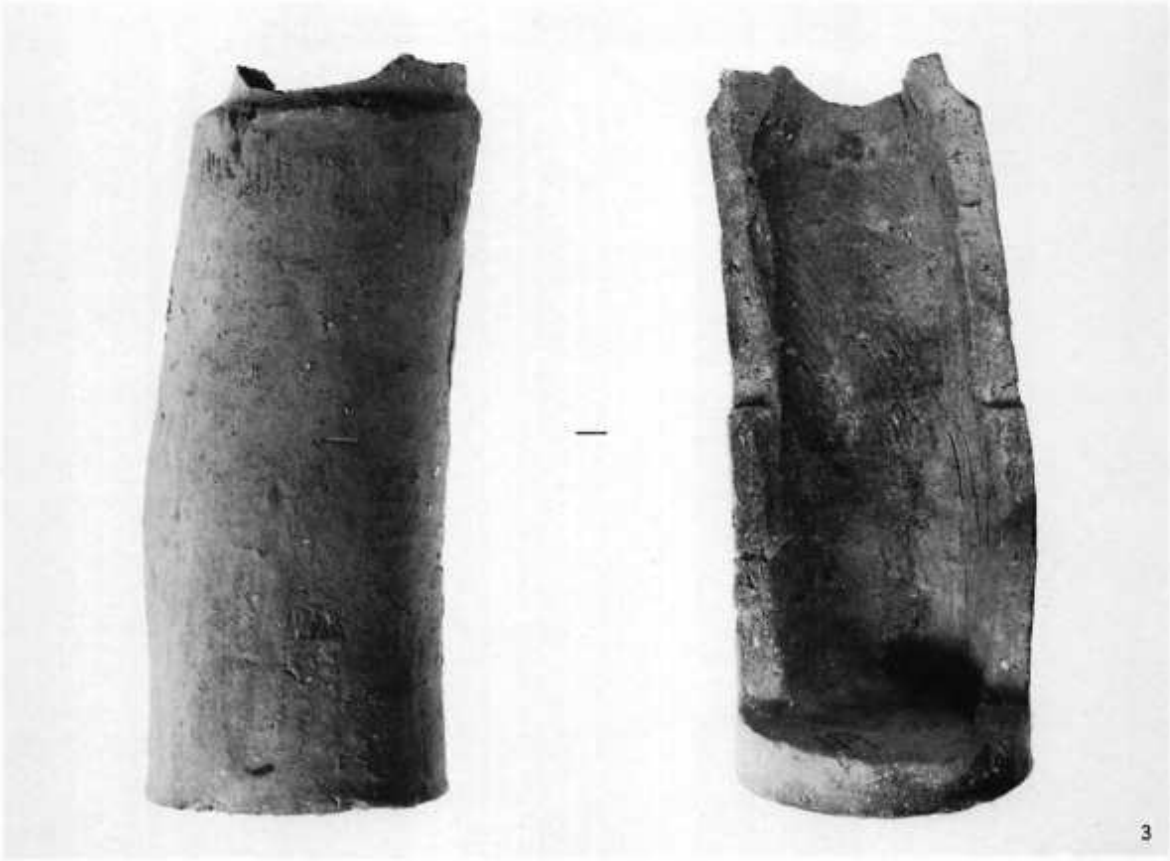
24

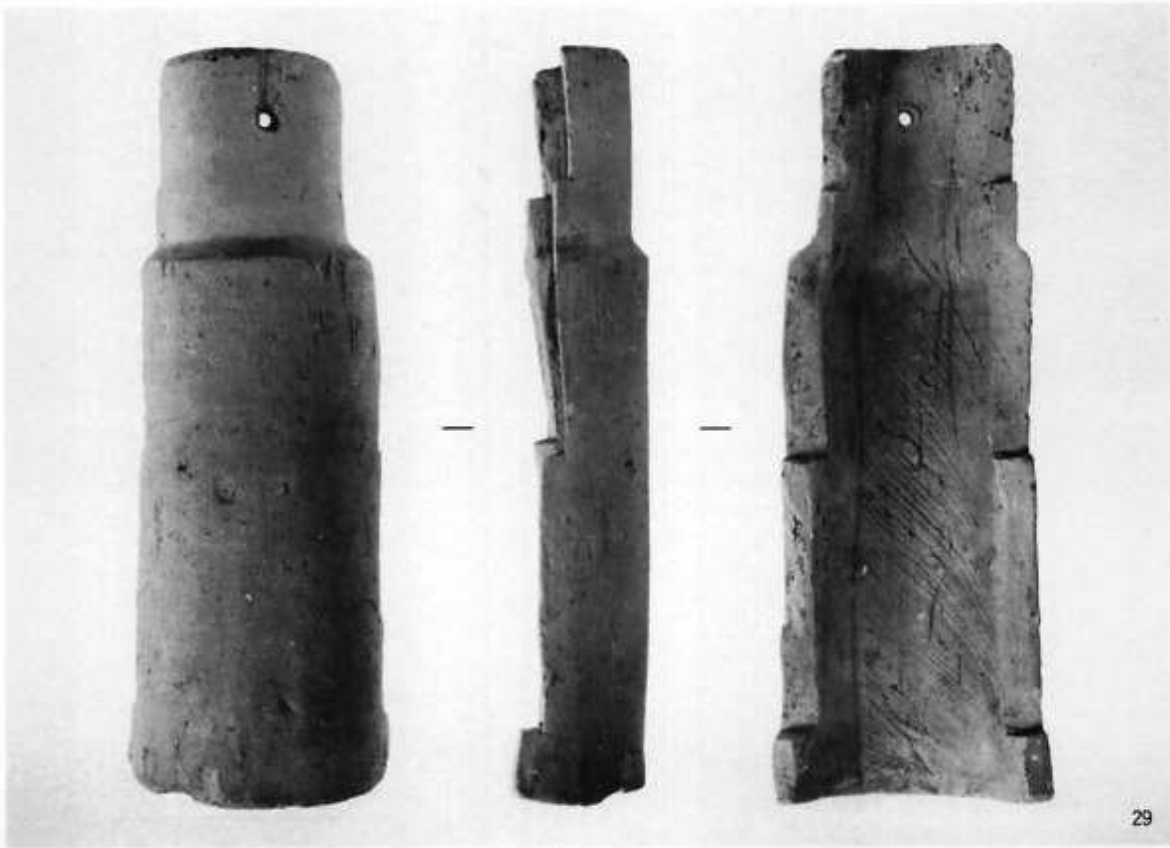
27

28


30

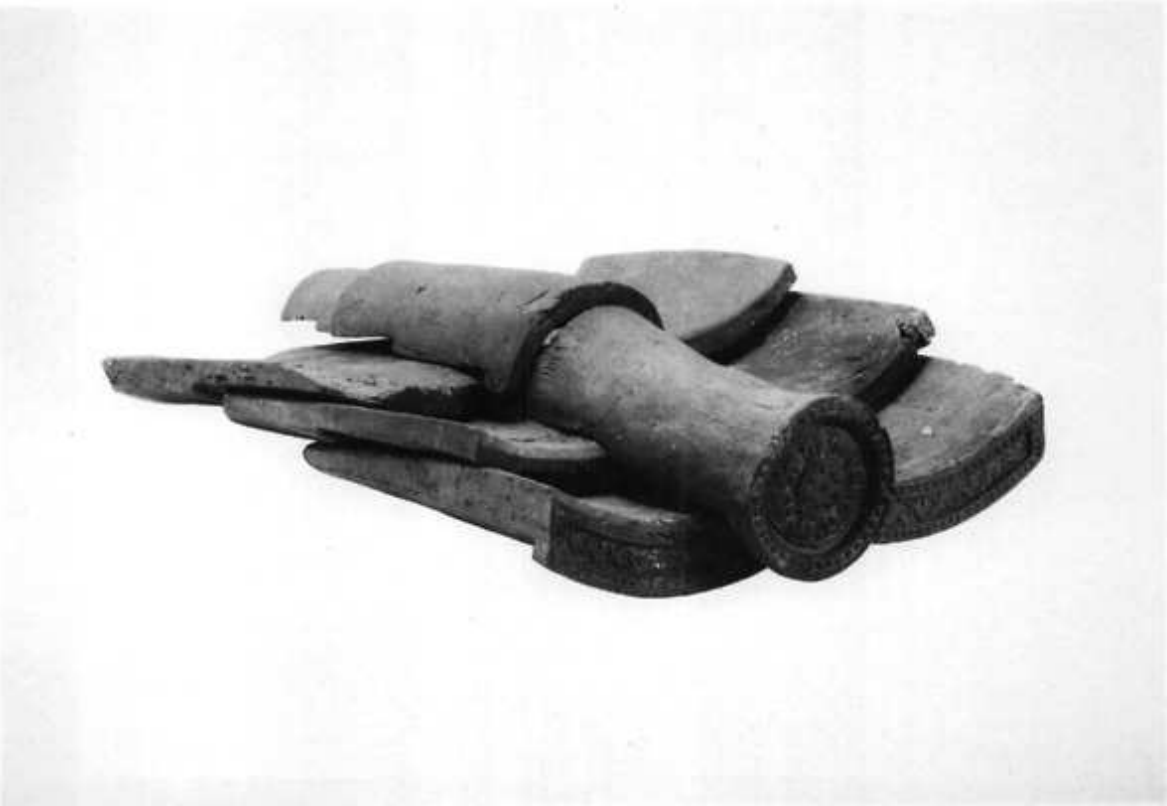
平瓦・丸瓦



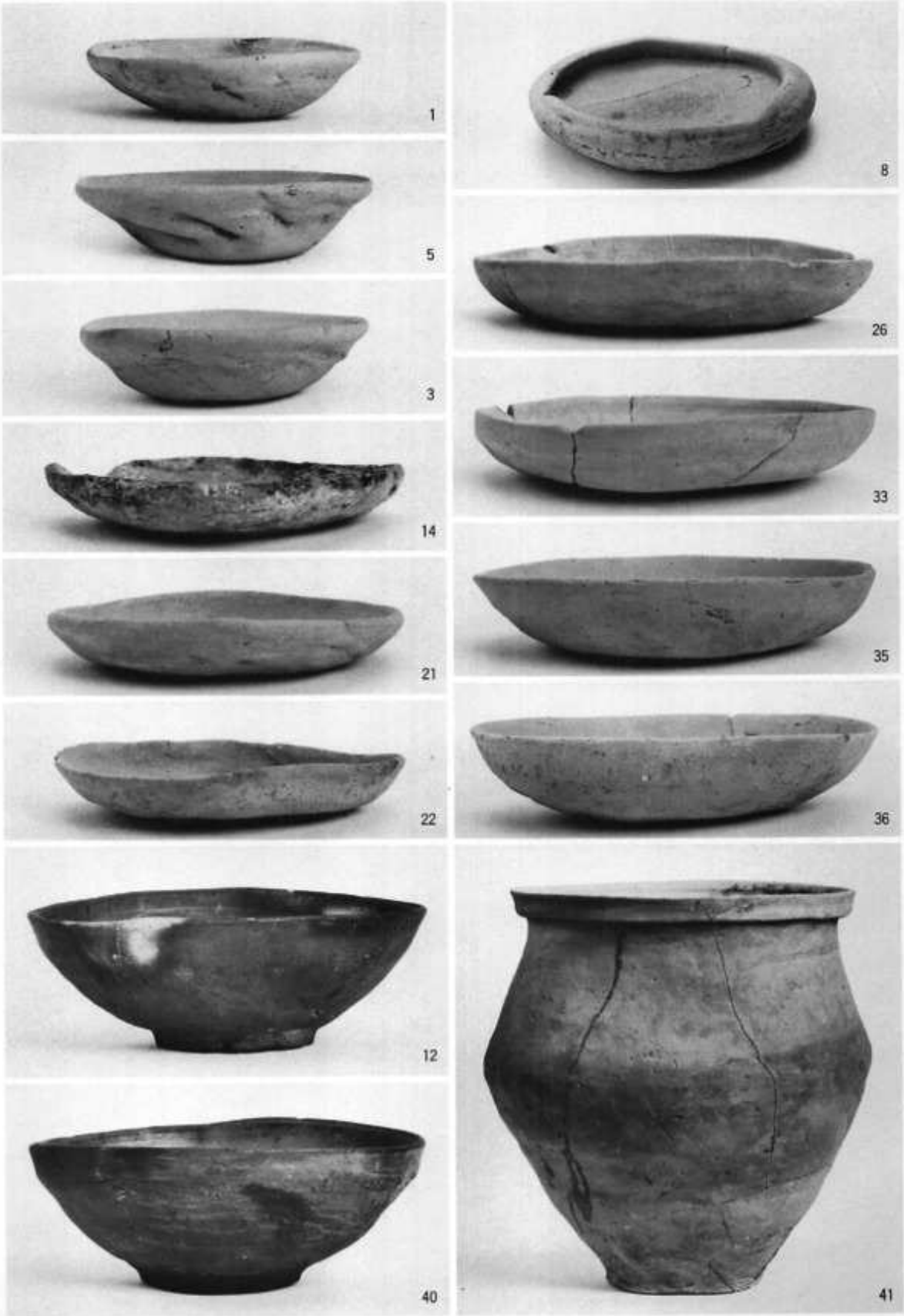


軒丸瓦・丸瓦細部

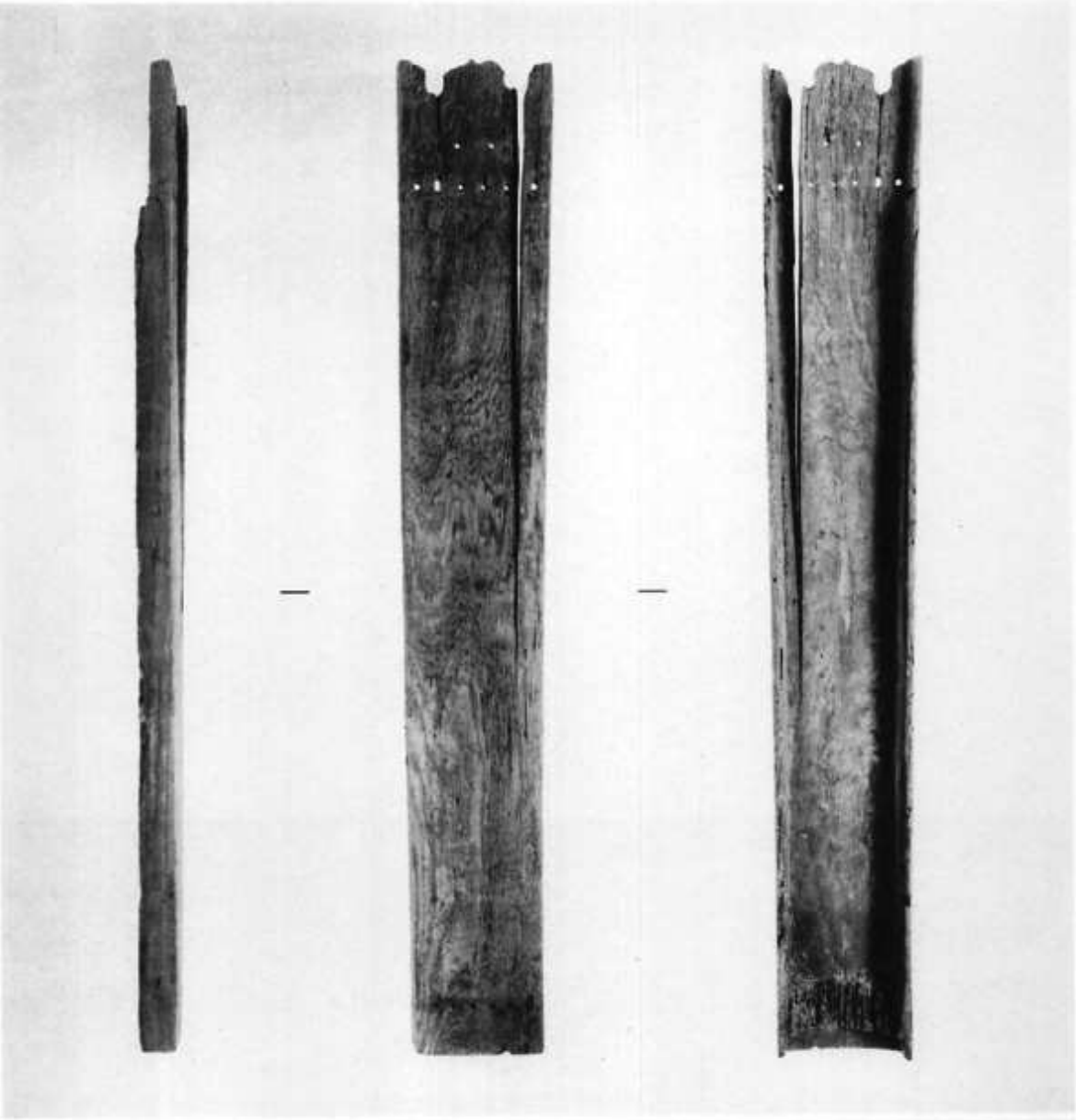
1　葺上げ復原状況

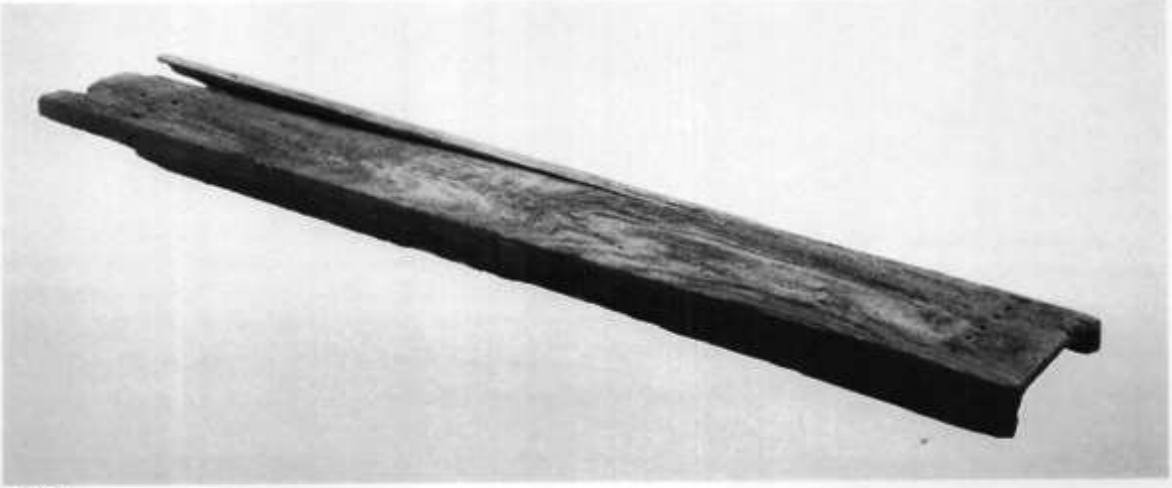


2　葺上げ復原細部

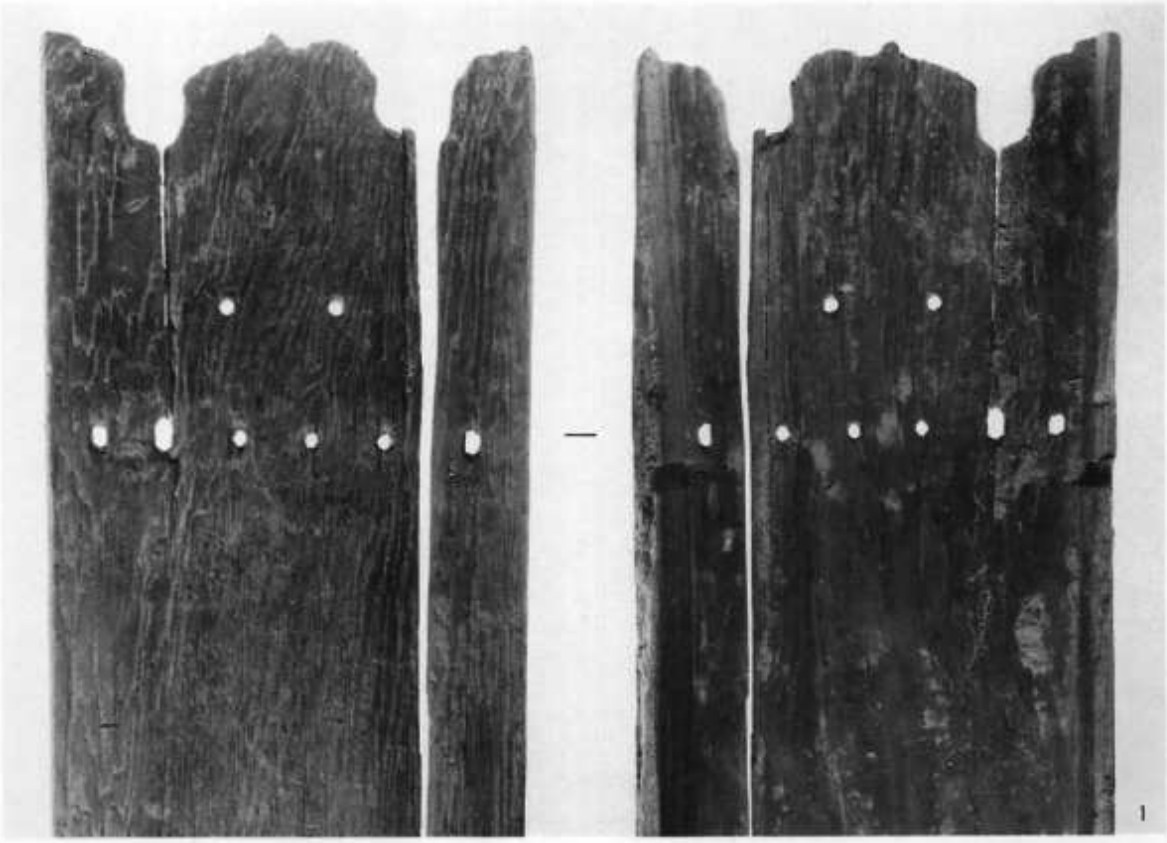


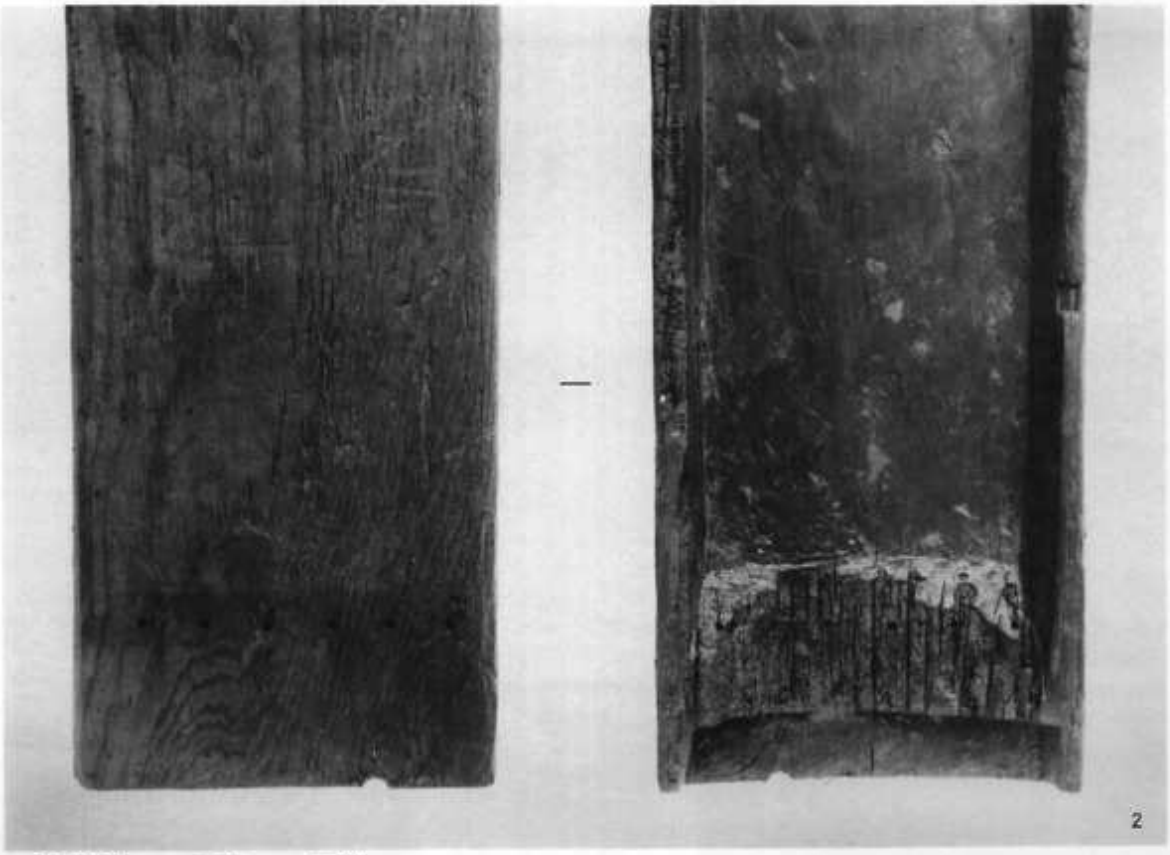
SD3　SE9出土土器



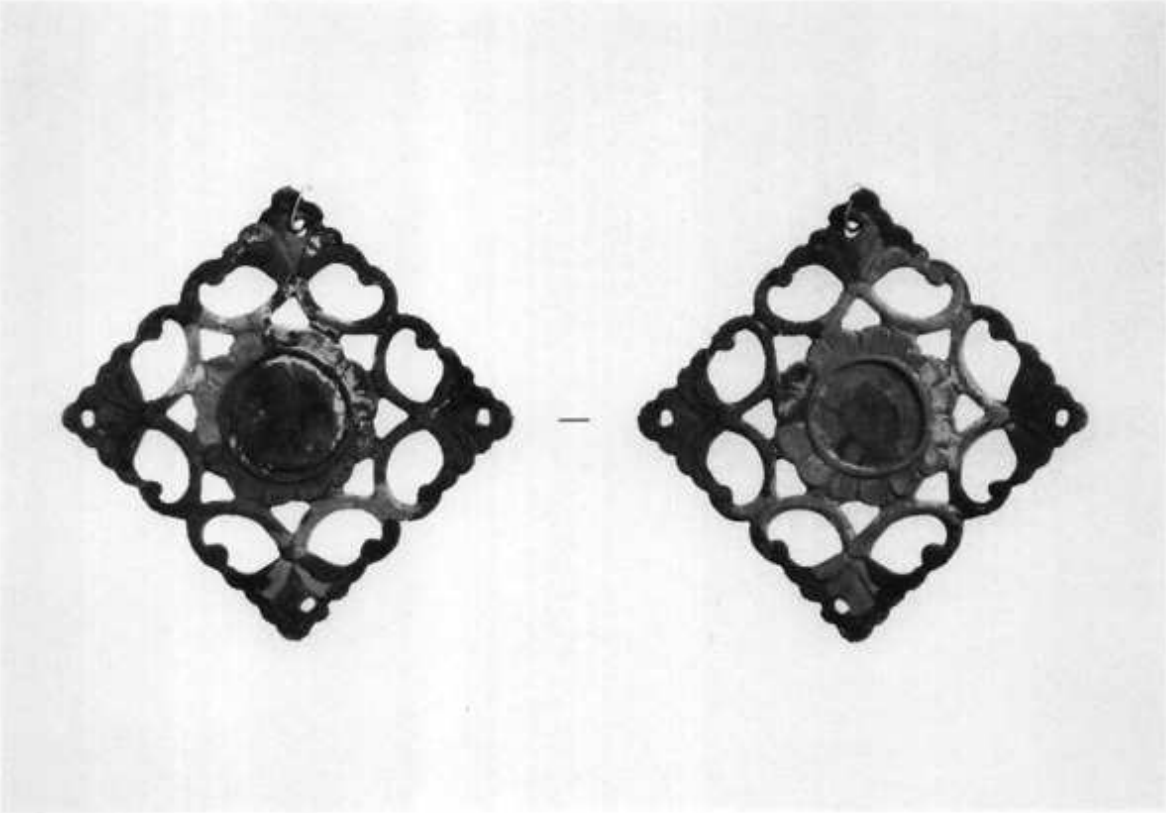


和琴

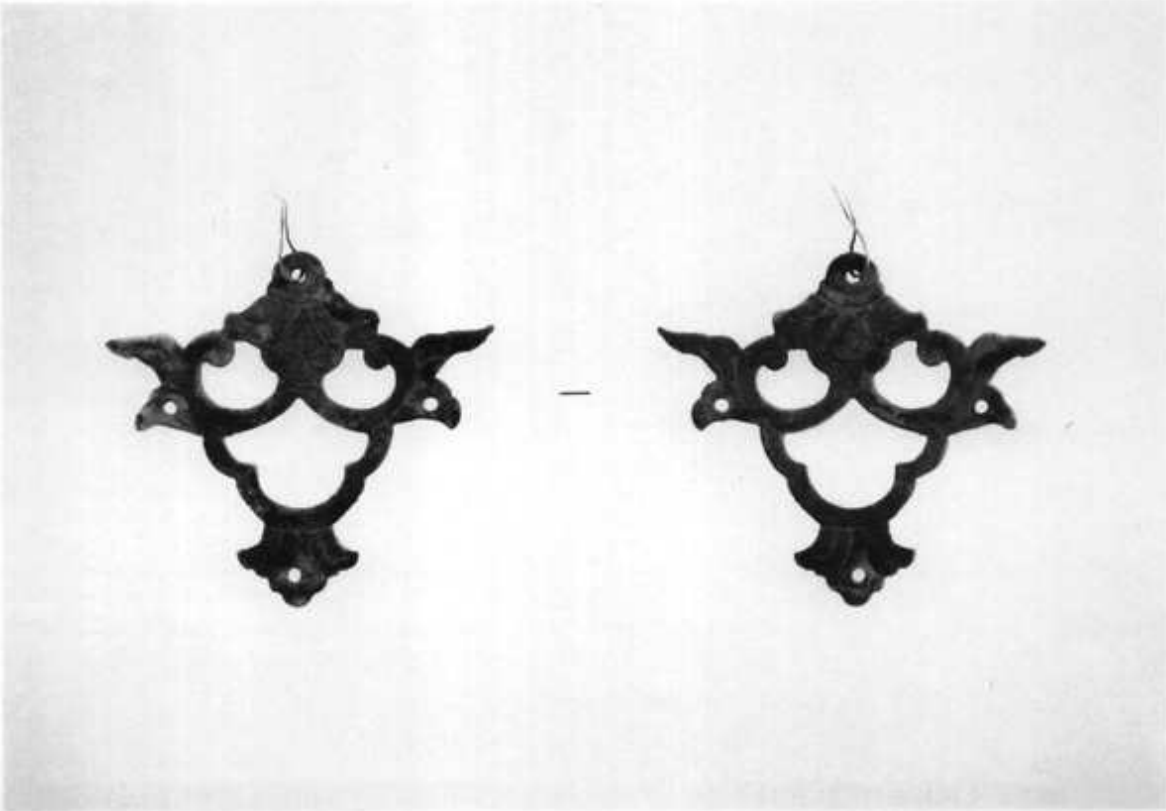




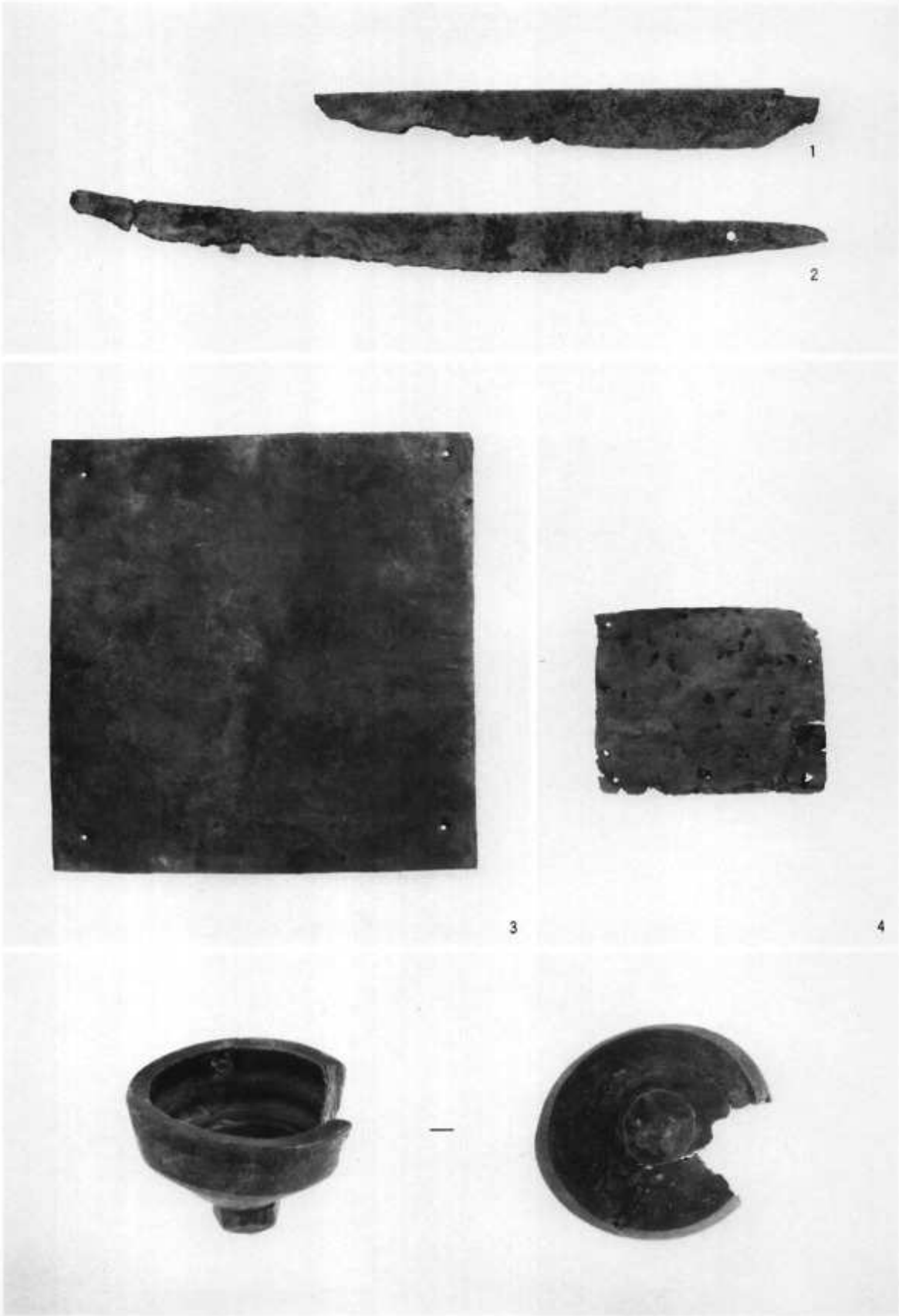
和琴細部　1．尾部　2．頭部



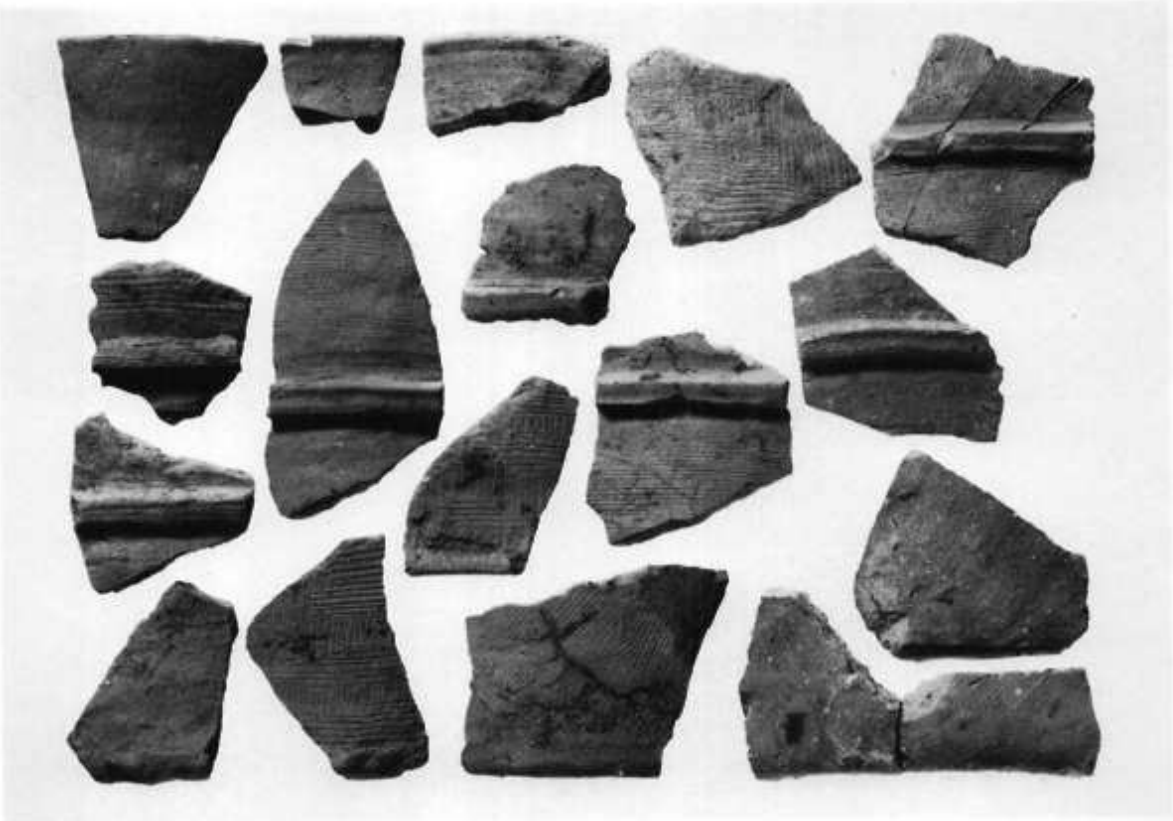
天蓋環珞1（1：1）



天蓋環珞2（1：1）



刀子（1・2）　銅板（3・4）　独楽

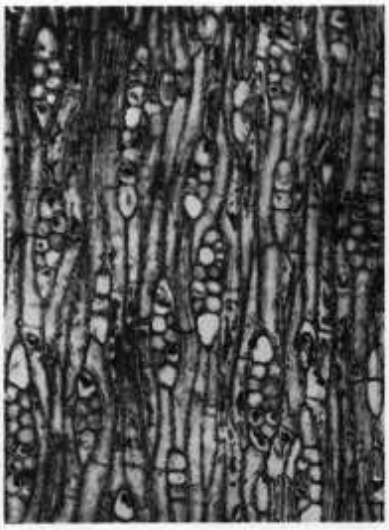


1　円筒埴輪

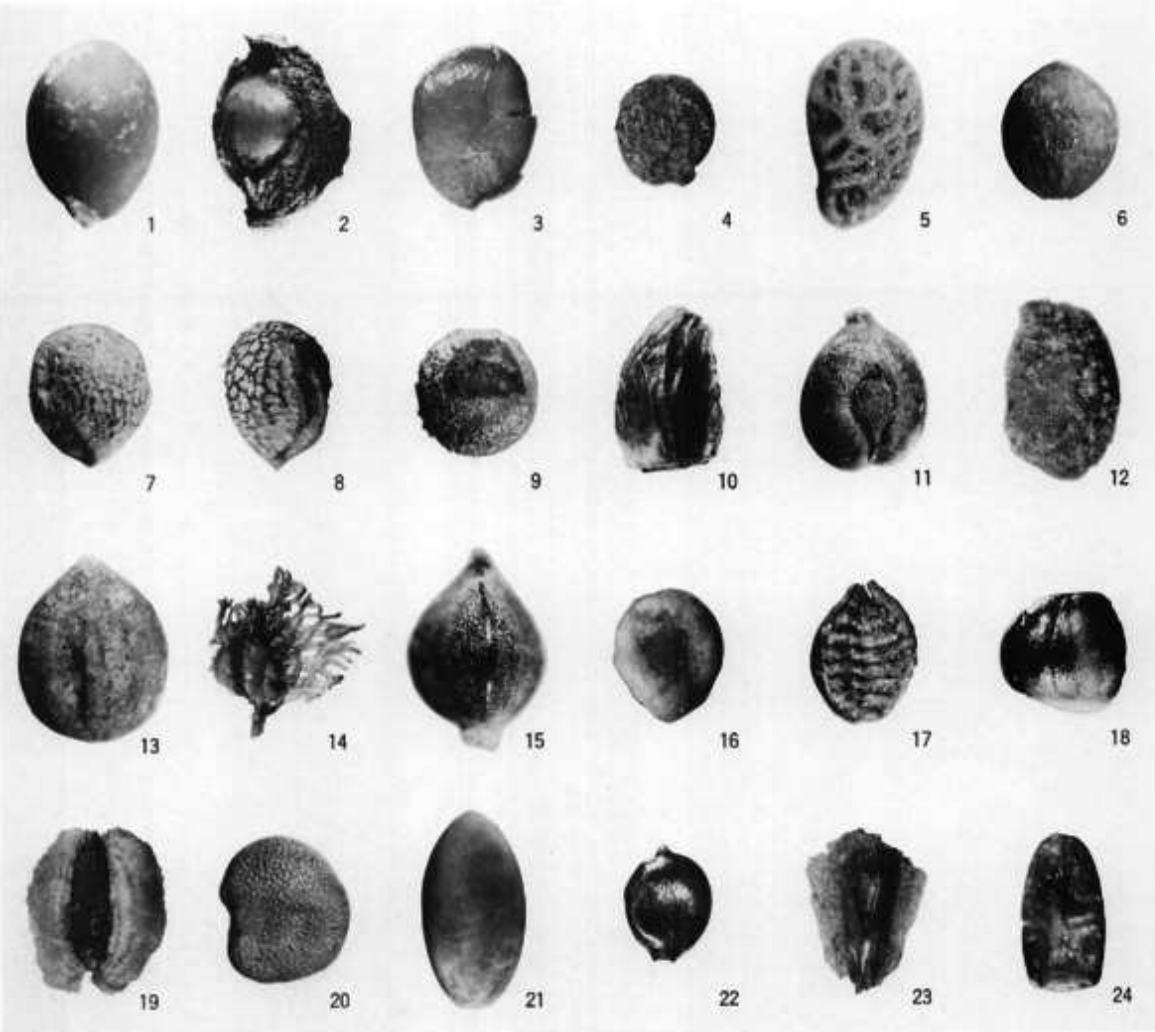
2　家形埴輪

独楽木口（ヒイラギ）（×40）

独楽柾目　（×100）



独楽板目　（×100）



1　ムクノキ(×3.8)　2　エノキ(×3.8)　3　クワ(×10)　4　カジノキ(×6)　5　キイチゴ(×10)　6　サクラ(×3)
7　サンショウ(×4.5)　8　イヌザンショウ(×4.5)　9　アカメガシワ(×4.5)　10　カエデ(×3)　11　ブドウ(×6)　12　サルナシ(×10)
13　ガスズミ(×3.8)　14　ギシギシ(×6)　15　タデ(×9)　16　タガラシ(×12)　17　カタバミ(×12)　18　ノブドウ(×3.8)
19　セリ(×10)　20　ナス(×6)　21　ウリ(×3.8)　22　カヤツリグサ(×12)　23　オモダカ(×7.5)　24　イボクサ(×6)

鳥羽離宮跡発掘調査概報

昭和61年度

発行日　昭和62年３月31日
発　行　京都市文化観光局
住　所　京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内
編　集　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
住　所　京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
ＴＥＬ（075）415－０５２１
印　刷　真　陽　社